

**学校法人 佑愛学園
愛知医療学院短期大学**

2017年度 授業評価レポート



2018/6/30

目次

■ 資料

1. 学生による授業評価アンケート設問項目
2. 学生による授業評価アンケートの回答方法
3. 学生による授業評価アンケートの実施要項
4. 学生による授業評価アンケートの実施要領

■ 授業評価レポート

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 心の理解 | 23. 運動学Ⅱ（体幹・下肢） |
| 2. 現代社会の理解 | 24. 運動学実習（PT） |
| 3. 情報処理 | 25. 運動学実習（OT） |
| 4. 外国語1（英会話） | 26. 人間発達学 |
| 5. 外国語2（韓国語会話） | 27. 一般臨床医学 |
| 6. 外国語3（中国語会話） | 28. 公衆衛生学 |
| 7. 英文講読 | 29. 臨床心理学 |
| 8. 現代語コミュニケーション | 30. 内科学 |
| 9. 人間関係論 | 31. 整形外科学 |
| 10. レクリエーション | 32. 神経学 |
| 11. 健康運動とスポーツ | 33. 精神医学 |
| 12. 生物と環境 | 34. 小児科学 |
| 13. 生命の科学 | 35. 医療安全学救急医学 |
| 14. エネルギーのしくみ | 36. リハビリテーション概論 |
| 15. 解剖学 | 37. リハビリテーション倫理 |
| 16. 解剖学実習 | 38. 社会福祉学 |
| 17. 人体触察法実習（PT） | 39. 障害支援とアシスタンスドッグ |
| 18. 人体触察法実習（OT） | 40. 障がい者スポーツ演習 |
| 19. 生理学 | 41. 理学療法概論 |
| 20. 生理学実習 | 42. 理学療法研究法 |
| 21. 運動学総論 | 43. 臨床運動学（PT） |
| 22. 運動学Ⅰ（頭頸部・上肢） | 44. 運動療法総論 |

45. 検査測定法
46. 検査測定法実習
47. 理学療法評価法
48. 理学療法評価法実習
49. 中枢神経系障害理学療法治療学
50. 中枢神経系障害理学療法治療学実習
51. 整形外科系障害理学療法治療学
52. 整形外科系障害理学療法治療学実習
53. 内部疾患系障害理学療法治療学
54. 内部疾患系障害理学療法治療学実習
55. 小児疾患系障害理学療法治療学
56. 小児疾患系障害理学療法治療学実習
57. 老年期障害理学療法学
58. 日常生活活動学
59. 日常生活活動学実習
60. 義肢装具学
61. 義肢装具学実習
62. 物理療法学
63. 物理療法学実習
64. 理学療法特論Ⅰ（神経生理学的アプローチ）
65. 理学療法特論Ⅱ（関節運動学的アプローチ）
66. 理学療法特論Ⅲ（筋生理学的アプローチ）
67. 理学療法特論Ⅳ（スポーツ障害理学療法）
68. 理学療法特論Ⅴ（吸引喀痰法）
69. 生活環境論
70. 地域理学療法学
71. 地域理学療法学実習
72. 作業療法概論
73. 作業療法研究法
74. 臨床運動学（OT）
75. 基礎作業学
76. 基礎作業学実習
77. 作業療法評価法
78. 作業療法評価法実習
79. 身体障害作業評価学
80. 精神障害作業評価学
81. 発達障害作業評価学
82. 作業治療学理論
83. 作業療法治療学実習
84. 身体障害作業治療学Ⅰ
85. 身体障害作業治療学Ⅱ
86. 身体障害作業治療学実習
87. 精神障害作業治療学
88. 精神障害作業治療学実習
89. 発達障害作業治療学
90. 発達障害作業治療学実習
91. 老年期作業療法学
92. 日常生活作業学Ⅰ
93. 日常生活作業学Ⅱ
94. 日常生活作業学実習
95. 高次脳障害作業治療学
96. 義肢装具作業療法学
97. 義肢装具作業療法学実習
98. 作業科学
99. 人間作業モデル論
100. リハビリテーション関連機器
101. 地域作業療法学
102. 地域作業療法学実習
103. 就労支援学

2017年度 学生による授業評価実施要項

1. 実施目的
学生による授業評価アンケートは、FD&SD 委員会規程に基づいて行われ、アンケート結果を参考に授業の改善を図り、本学教育の質の一層の向上に資することを目的とする。
2. 実施方法
2017年度開講科目を対象として、授業毎でアンケートを実施する。
学生は、履修した科目のアンケートをweb（Google フォーム）で回答する。
3. アンケート内容
 - I 授業の内容について 5問
 - II 授業の方法について 5問
 - III 授業担当教員について 5問
 - IV あなたの受講態度について 3問
 - V あなたの学習態度について 2問
 - VI この授業についてのあなたの満足度 2問
 - VII 総合評価 2問
4. 調査結果の集計
調査結果の集計は、FD&SD 委員会が行う。
5. 調査結果の配布
実施した専任教員および非常勤講師には、個人集計結果ならびに全学集計結果に成績平均点分布表を添えて配布する。
6. 実施結果の公表
個人集計結果を除き、全学集計結果を本学ホームページにて公開する。

2017年度
FD&SD 委員会

学生による授業評価アンケートの実施要領

(2017年度各科目1回)

学生の皆さんへ

「学生による授業評価アンケート」への協力をお願い

FD&SD 委員会

本学では「授業の質」を高めることを目的として、毎学期末に「学生による授業評価アンケート」を実施しております。このアンケートが皆さんの成績評価に影響を与えることは決してありませんので、安心して率直な回答をお願いします。本学の授業を、より良いものにしていくために自分の意見を反映させるのだ、という気概を持って真剣に取り組んで下さるよう、ご協力をお願い致します。

実施科目：

全科目・全クラス

(但し、総合演習は国家試験対策であり、臨床実習は外部の指導者であり、いずれも評価項目に内容がそぐわないため、アンケートから除外する)

実施時期：

原則として授業の最後に実施します。

実施方法：

履修した科目を web (Google フォーム) で回答します。

オムニバス形式の授業の場合、担当教員別にアンケートは実施しません。

所要時間：

約 20 分程度

〈授業評価アンケート〉

I 授業の内容について

1. 授業の内容は、あなたにとって、興味深いものでしたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない
2. 授業の内容は、あなたにとって、理解しやすいものでしたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない
3. 授業の内容は、シラバス（講義概要）に沿ったものでしたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない
4. シラバスは、理解しやすい内容でしたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない
5. 授業の内容は、後輩にも推薦したいと思いましたが
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない

II 授業の方法について

6. 授業の進み具合は適切でしたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない
7. 授業中の教員の声は、明瞭で聞き取りやすいものでしたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない
8. 板書やモニター提示の量、文字の大きさ、書き方などは適切でしたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない
9. プリントやビデオなどの補助資料は授業の理解を助けてくれましたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない ⑥ 補助資料はなかった
10. 指定された教科書や参考図書、参考文献などの使用は適切でしたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない

III 授業担当教員について

11. 講義の準備を十分にしていたと思いますか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない
12. 意欲的に、熱意を持って取り組んでいましたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない
13. 授業の開始時間、終了時間をきちんと守っていましたか
① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ あまりそう思わない ⑤ そうは思わない

14. 私語など授業を妨げる行為に対して適切な対応をしましたか
①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらともいえない
④あまりそう思わない ⑤そうは思わない
15. 学生が質問、意見を述べられるような環境でしたか
①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらともいえない
④あまりそう思わない ⑤そうは思わない

IVあなたの受講態度について

16. この授業に対して熱心に取り組みましたか
①熱心に取り組んだ ②どちらかといえば熱心に取り組んだ ③どちらともいえない
④あまり熱心に取り組まなかった ⑤熱心に取り組まなかった
17. 理解できない点などを質問しましたか
①その場で授業担当教員に質問した ②授業後に授業担当教員に質問した
③授業担当教員に質問していない
18. シラバスに記載されている「学習到達目標」や「履修上の注意」を意識して学習に取り組みましたか
①取り組んだ ②どちらかといえば取り組んだ ③どちらともいえない
④あまり取り組まなかった ⑤取り組まなかった

Vあなたの学習態度について

19. この授業1回につき予習にどのくらいの時間をとりましたか (平均して算出してください)
1. 全くなし 2. 1時間未満 3. 1-2時間
4. 3-5時間 5. 6-10時間 6. 11-15時間 7. 16-20時間
20. この授業1回につき復習にどのくらいの時間をとりましたか (平均して算出してください)
1. 全くなし 2. 1時間未満 3. 1-2時間
4. 3-5時間 5. 6-10時間 6. 11-15時間 7. 16-20時間

VIこの授業についてのあなたの満足度

21. この授業を受けて、知識修得に満足していますか
①満足している ②どちらかといえば満足している ③どちらともいえない
④あまり満足していない ⑤満足していない
22. この授業を受けて、学習に達成感を得られましたか
①得られた ②どちらかといえば得られた ③どちらともいえない
④あまり得られなかった ⑤得られなかった

VII総合評価

23. この授業の総合評価を5段階でしてください。
① 良い ②どちらかといえば良い ③どちらともいえない ④どちらかといえば悪い ⑤悪い
24. この授業の良かった点・改善すべき点などを自由に書いてください。

科目名

1.心の理解

担当教員

山田 ゆかり

出席者数

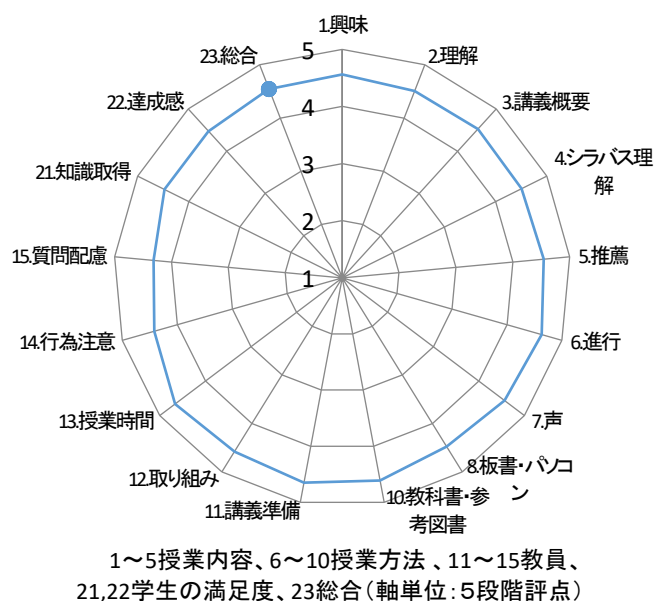
57名

◆集計データ結果について

今年度の授業評価結果においても、聴きやすい話し方、例示などによるわかりやすい説明、板書、使いやすいプリントの編集など、授業方法についての基本的な工夫が受け入れられた結果となっている。数値データに基づく円グラフを見ると、平均評定値は4.4~4.6と概ねバランスのとれた形であるが、項目16（質問配慮）の評価がやや低め（4.32）となっている。また、学生の授業態度についての項目18（質問）、項目19（予習・復習）については、依然として改善の余地があると思われる。授業を通しての実感としては、今年度は授業運営が比較的容易であり、授業後の小レポート等により、疑問・質問を把握し、対応することができたと考える。2専攻合同のクラスであるためか、学生個々のモチベーションに差があり、特に後方の席に着席する学生の理解度等を把握することが課題である。なお、本年度は受講66名に対し、回答者が57名とやや少ない点が結果にどのように影響したのか気になる点である。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「身近な例による説明がわかりやすい」「興味深い内容」「ためになった」「おもしろかった」等の肯定的な記述が多くあり、授業内容や方法については高く評価されているようである。一方で、授業中に「ホワイトボードが光って見にくいので、プリントをそのまま実物提示し穴埋めしてほしい」との指摘があり、これに関連した記述が2点あった。担当教員としては、板書を写すことよりも話を聴くことに注力してほしいこと、また、ホワイトボードがよく見える前方に着席するよう指示している。授業内容について、心理測定尺度の体験や実験的な要素を取り入れることが興味を引き起こすことにつながっているので、今後もこうした工夫を継続していく。



◆今後の改善に向けて

基本的には、今年度も現在の授業内容、授業方法が学生に受け入れられている結果となっており、今後もこれを継続していく。身近で具体的な例示による解説が授業の理解度を上げるポイントと考えている。また、モチベーションが高く理解力もある学生の満足度をさらに上げることと、理解力に課題があり、なかなか授業に集中できない学生を統制することのバランス図りつつ、学修意欲を引き出す工夫が必要となる。

教養基礎科目に対する学修意欲を引き出すために、将来の専門性や職務との関連、および「教養」としての位置づけについて積極的に説明している。これに加えて、シラバスに記載する「ディプロマポリシーとの関連」「学修到達目標」及び「履修上の注意」についてより詳細に繰り返し説明することにする。今後とも、より理解を助けるような教材を作成し、内容の解説を工夫するなどとともに、折にふれて、課題への取り組み方の助言を行い、積極的な予習・復習を促していきたい。

科目名

2.現代社会の理解

担当教員

王 昊凡

出席者数

49 名

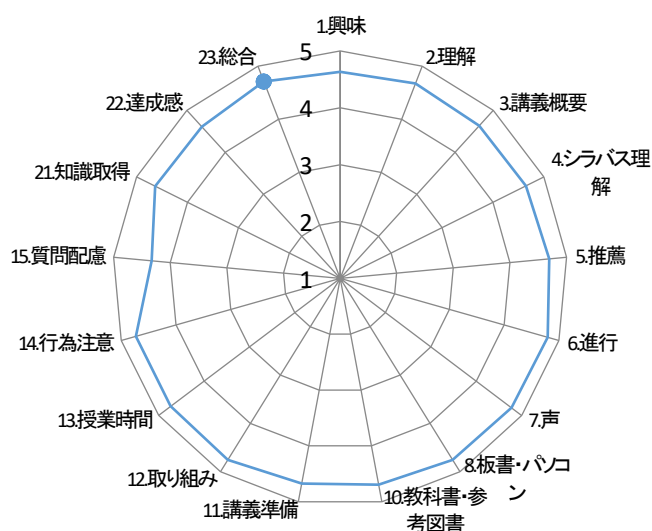
◆集計データ結果について

講義の進め方に関する質問であるQ1～15のうち、平均得点が4.5を下回っていたものはQ15の質問配慮であった。3以下の回答は、Q1、Q3、Q8、Q9、Q14がそれぞれ1名ずつ（いずれも「3」を回答）で、Q5、Q10、Q11が2名ずつ（いずれも「3」を回答）、Q13では3名が「3」を回答していた。Q15については、「1」の回答が1名、「3」の回答が7名であった。以上のことから、本講義の進め方に関する評価のうち、改善すべきものは質問配慮に関する項目であることがわかる。次に、Q16～Q20をみると、熱心に授業に取り組んだ受講者が多いものの、質問については「取り組まなかった／質問していない」が多く、また予習・復習時間に時間をあまり割いていないことも明らかになっている。Q17の質問については後述するが、予習・復習に関しては、本講義では日々のニュースに接し考えることや、講義のテーマについて他の受講生と話し合うことを指示しているものの、その履行率が低い可能性がある。

以上のことから、本講義で改善すべき点として①質問対応、②予習・復習の徹底があげられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記述欄については、肯定的評価が高かったように見受けられる。「社会の勉強の苦手意識が減った」という意見、「難しいと思っていたが、楽しかった」といったコメントを頂いた。なかには、「グループワークをしたらどうか」という提案もあった。講義中、問いかけについて、周りの人と話し合いながら自分の意見をコメントシートに記入するという課題を与えたことがあり、近似の方法をすでに採用している。今後の講義では、その延長線上で、今後何らかの形で導入してもよいかもかもしれない。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合（軸単位：5段階評点）

◆今後の改善に向けて

本講義で改善すべき点として①質問対応、②予習・復習の徹底があげられることはすでに述べたとおりであるが、それらの具体的な方法について考える。

まず①質問対応である。今回の講義では、受講生に毎回コメントシートを提出させており、実はその末尾に質問欄を設けている。また、講義担当者は授業開始前・終了後、できるだけ5分以上は教室に待機し、質問や連絡事項がある学生に対応している。それでも相対的に低い評価となった理由は、(1)講義という形式上、演習等と比べると、質問があっても即座に言えない状況がある、(2)受講生が多いので、気後れしてしまう、(3)質問の機会について十分知っていなかった、が想定される(1)及び(2)については講義担当者としての対応は困難だが、(3)については改善の余地があるので、今後は質問の機会があることをさらに積極的に周知したい。

次に②予習・復習についてだが、毎回の講義で、自戒に取り上げる題材について触れ、何らかの課題を与えることを試みたい。また、関連するニュースを集め、自らの意見を論理的に説明する課題など、予習・復習を前提とした授業運営や期末試験を実行したい。

科目名

3.情報処理

担当教員

齋藤 末広

出席者数

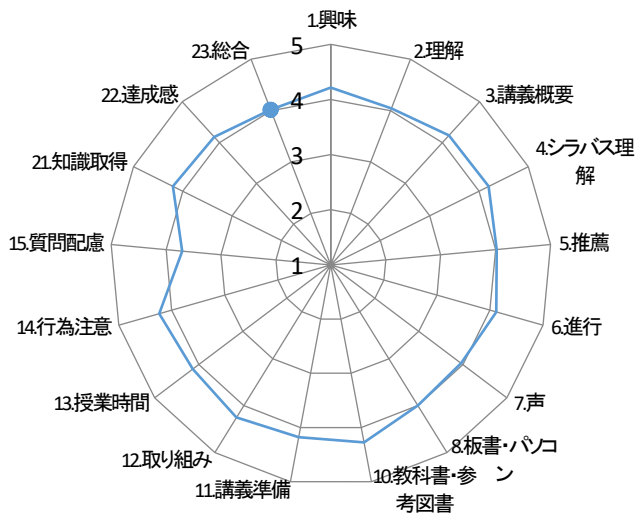
51 名

◆集計データ結果について

おおむね、問題なしかと思います。質問配慮がすこし学生の不満の多いので、こちらを来期は、フォローを充実したいと思います。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

課題の指示があやふやのところあり、改善の余地あります。個人情報の件から、サンプルデータを作るときは、必ず架空のもので行うように徹底します。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

授業満足度の向上、さらにパソコン技能の向上を目指して、以下の点を改善する。

- ・課題指示をもっと明確にする
- ・毎回の授業で最低限理解しなくてはいけないところを明確にして、分かったというところをはっきりさせる。
- ・タイピングができないと操作指示がついてこれなくなる。タイピング練習、操作練習を前倒しにやり、授業において行かれるということを減らす。

科目名

4.外国語1(英会話)

担当教員

ジェームス・ヒガ

出席者数

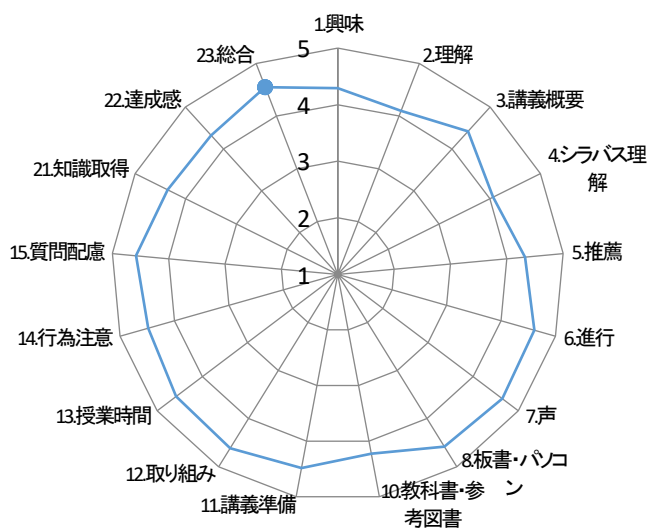
31名

◆集計データ結果について

Looking at the evaluation graph of the class, the majority of the students seemed to be satisfied with the lessons. In class, the students were able to interact with each other using mostly English and their attitude towards speaking English seemed very positive.

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

The students tried their best to understand the contents of the lessons and the lessons went smoothly. Unfortunately, not everyone was happy with the all-English approach the instructor took, as one student wrote; “説明も全部英語だから、英語苦手な人にとってはきつかった。” However, some students had a some encouraging words; “わかりやすいように丁寧に教えてもらえて、とても助かりました” and “わかりやすく何度も言い直してくれて良かったです。” In general, the students communicated and used the English they know and did very well. I appreciate the students’ honesty and the time they took to fill out the class evaluation.



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

Reading the student’s feedback of the class, maybe something should be done about giving instructions in only English. However, one objective is to have the students interact and help each other understand English and speaking Japanese by the instructor would defeat this purpose. One solution maybe is to, after giving the instructions in English, have one student repeat it in Japanese. This may work and may be tried net time.

科目名

5.外国語2(韓国語会話)

担当教員

金 春子

出席者数

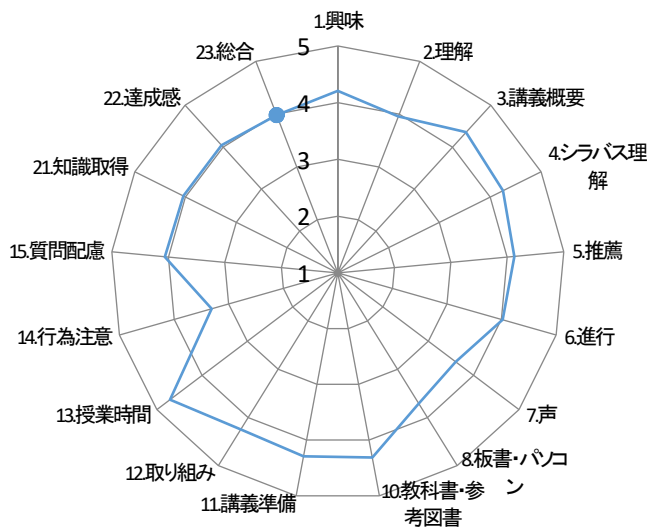
48 名

◆集計データ結果について

集計データで、思わしくない所は、注意喚起の不足と、ホワイトボードの書き込みが良くないところ
です。私も生徒たちに対して丁寧に、またきれいな文字で書かなければならないと私も反省している
ところです。生徒たちがわかりやすく、きれいな文字で書くように今後努力します。騒がしい生徒に対
しては、ある程度注意をしましたが、まだ足りなかったようです。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

多くの生徒が韓国語をわかったと書いてくれたので、私の努力が報われた思いです。生徒たちが韓国
語を学んだという達成感を感じてくれて、私も教えたという達成感を感じています。2か月の短い期間で
はありますが、少しでもわかってもらえてうれしいです。わかるということは素晴らしいです。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

今回、教科書を変更しました。日常生活
で直ぐに使える本を選びましたので、生徒
たちはとつきやすく、楽しかったのでは
ないかと思います。隣の二人での会話の時
は本当に楽しそうに会話をしています。今
後も多く取り入れていきたいと思ひます。
注意喚起ももっと多くするようにします。

科目名

6.外国語3(中国語会話)

担当教員

侯 英梅

出席者数

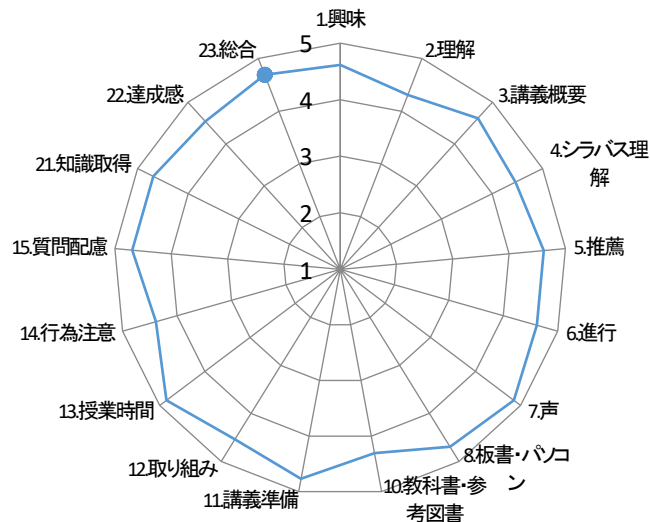
13名

◆集計データ結果について

評価から、全体としては高い評価をいただいたと思いますが、集計結果の各設問において、質問2「授業の内容はあなたにとって、理解しやすいものでしたか」の満足度が低かったです。質問9「プリントやビデオなどの補助資料は授業の理解を助けてましたか」の評価が多少低い印象でした。質問17「理解できない点などを質問しましたか」に対して、質問していないと回答した生徒さんの数は全員の半数を占めたことがわかりました。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

発音と日中文化について、楽しくわかりやすく学ぶことができましたと思います。特に発音について書いた生徒さんが多かったです。発音に関心を持っていることがわかりました。今後も生徒さんが意欲が持てるように更に分かる授業を目指していきたいです。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

- 生徒さんの理解状況やニーズを把握しながら授業を進めていくこととしたいです。
- 授業中に生徒さんに質問する時間を設け、生徒さんの理解度を確認しながら進めようとしています。
- 写真や動画などを補助資料の一部として取り入れながら、もっと分かりやすい授業にしたいです。
- 時間が限られていますが、発音以外にもう少し基礎会話に時間をかけて練習していきたいです。

科目名

7.英文講読

担当教員

丹羽 重信

出席者数

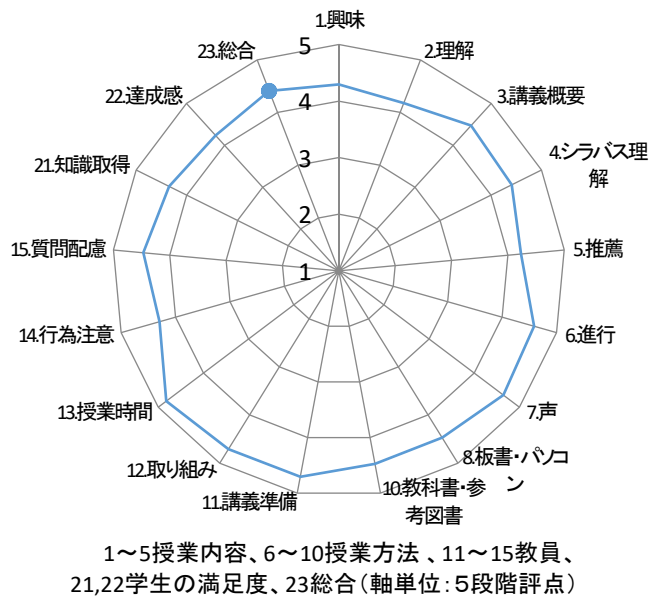
17名

◆集計データ結果について

総合評価は約4.4で、個別の項目も4.1から4.8までの間に収まった。「講義準備」,「取り組み」,「講義時間」といった講師側の項目が特に高い評価となったが、「興味」,「理解」,「達成感」といった受講生自身に関わる重要項目が平均より低い評価となっているのは残念である。大人数講義の時に低く出がちな「行為注意」は今回4.3近くあり、まずまずであった。医療のための難しい専門教科を学んでいる学生たちが、教養としての語学にあまり時間と労力を振り向けられないのは当然であって、「予習・復習は不要」とこちらからも伝えてあるので、その時間が極端に少ないのは致し方ない。英語に対する興味が消えてなくならないよう、つなぎとめることができれば良しとすべきだろう。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

例年通りであるが、「難しかった」という声と「分かりやすかった」という正反対の声とがあった。「楽しく授業を受けることができた。でも、内容が少し難しかった。もう少し易しい内容の問題が良かった」はそれを要約してくれている。英語の学力にバラツキがあり、小テストや最終試験でそれは確認できているので、驚きはしない結果である。講義内容に一定の水準を維持しなければならないので、「全員に分かりやすい」講義にすることは不可能だにご承知願いたい。「今までわからない所がわかるようになりました」という声があったのは、講師として非常にうれしいのだが、『自由記載』とはなっているにもかかわらず、不満の本心は書きにくいと思う学生もいるだろうから、割引して受け止めておかなければならない。



◆今後の改善に向けて

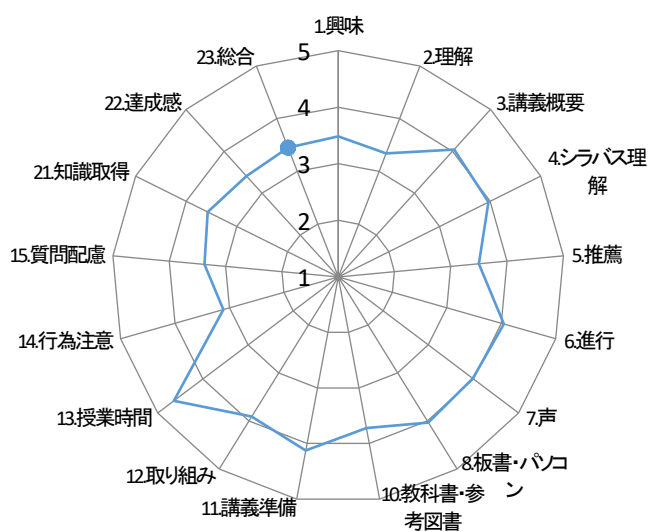
医療従事者と英語について考えさせられる話を聞いた。日本人で現在オーストラリアに暮らす女性が帰郷した際、体調がくずれ、名古屋市内のある病院で診察を受けた。診察に当たった医師に、オーストラリアに帰る必要があることを説明すると、その医師は「ああ、そうですか。それじゃあ、あちらの医師が分かるように症状を説明しておきましょう」と言って、即座に手紙を書いて渡してくれた。女性はその対応にとっても感謝したということだ。グローバル化した社会とはこういうものかと、その話を聞いた当方は感じ入った次第である。世間では大学の入試改革が唱えられ、英語は4技能(読む・聴く・話す・書く)を伸ばさなければならないという点で最も注目される教科となっている。学生の英語に対する関心をさらに高めるような内容を工夫していきたい。

◆集計データ結果について

講義内容に関してはおおむね4、授業運営に関しては3～3.5という評価であった。「現代語コミュニケーション」は教養科目の1つなので、学生に予習・復習は求めておらず、毎年、最初の講義で「専門科目の勉強に時間をさいてください」と言っている。「予習・復習なし」が90%だったのは、学生が講師の指示をよく守ったことになるのかもしれない。例年のことだが、「行為注意」つまり「私語に対する注意」が不足している（評価3）という結果が出ている。教授が2千人近い学生の前で講義ノートを淡々と読み上げ、それを学生が粛々と自分のノートに書きとるという東大法学部の授業は、確かに異常な光景かもしれない。奥の深い教室の造りが生徒の私語をさそうという要因もあるかと思われるが、これは気力の衰えた講師の言い訳にしかならないか・・・

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「授業中のお喋りがとてもうるさかったです。前の方に座っても後ろの方がうるさいから、先生の声が聞き辛いということがしばしばありました。それでも、先生の授業は楽しかったです。ありがとうございました。」という感想が代表的なものと言えるようだ。「とにかく喧しくて先生の話も聞き取りづらかったです。ちゃんと注意した方が良いと思います。」という厳しいお叱りは多く受けた。また、「何を学んで良いかわからなかった」という感想もかなりの数あり、目標や方法のあいまいな教養科目の難しさを思わないではいられない。「英語の新聞難しかったです」という声はあるが、「先生が最近のニュースのことなど色々なことを話してくれるのでよかったです」と歓迎されてもいるようだ。一方で、「伝記を読むことが好きなのでこの授業は楽しかったです。」や「笑顔が素敵でした」という声もあり、心の支えにしていきたい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

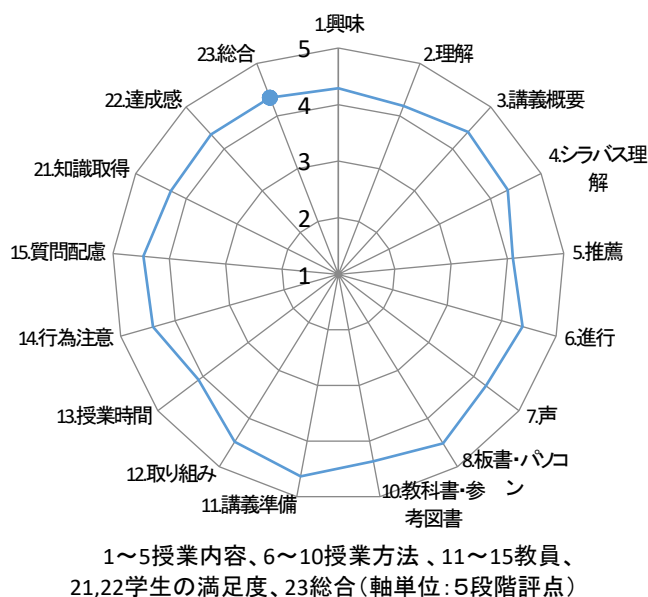
感想の集計結果には出てこなかったようだが、「敬語の使い方」に対する学生の関心は高いことが、今年の講義で分かってきた。「敬語の仕組み」は理解できても「敬語の応用」ができないという意見が授業中に多く出た。「社会人になったときに必要だろう」という先を考えた意見ばかりでなく、「アルバイト先でも注意されている」といった現在の実用面での必要もあるからのようなのである。英語に当てる時間をやや減らしてでも、「敬語」の学習と練習にあてる時間をもっと多くすることで、「現代語コミュニケーション」の講義に出席することの文字通りの意義を大きくしたいと考える。

◆集計データ結果について

「授業内容」、「授業方法」、「教員」、「学生の満足度」、「総合評価」に関する設問項目において、4～5の間の評価であったことから、比較的良かったといえよう。ただし、学生の受講態度の中の「質問」が少なかったこと、「予習・復習時間」が短時間であったことについては考慮する必要がある。小生としては、「質問」の多少によって授業内容の良し悪しが決まると一概にいけないのではないかと考える。なぜならば、今回も本授業に対する受講生の自由記載では、「分かりやすかった。」との記載が多く、そして「学生が発言しやすい環境でした。」といった記載があったことから、それ程、質問しなくても理解できたのではないかと推察されるからである。この点については、今後、受講生にその詳細を確認し、検証していく必要がある。「予習・復習時間」については、本授業が「集中講義」であったことから、その学習時間が少なくなってしまったことに基因しているともいえ、申し訳ないと思っている。そうした中でも、今後は、前述の学習活動の機会を増やすように工夫していきたい。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載の内容を全般的に見ると、「楽しかった」、「分かりやすかった」との記載が昨年度よりも多くなり、「授業は楽しく学ぶ」との小生の基本理念が、本年度の受講生に一層、伝わったことに喜びを感じるとともに感謝の意を表したい。また、昨年度と同様に、「人間関係が円滑に保てるコツや、コミュニケーションの取り方などが学べた。」、「人間関係について詳しく知れたのでとても良かったです。」、「人間関係は大事だと思いました。」などの記載から、本授業の到達目標を熟知し、学修できたと思われる。さらに、「これからの学習に役立てたいと思います。」、「これからの人生で参考になることが多かった。」、「人間関係において大切なことを学ぶことができたので、これからの人生に活かしていきたいと思いました。」といった記載もあり、本授業内容の有用性を実感できたものと推察される。このような肯定的意見が多かったものの、「もう少し私語を注意してほしいです。」、「授業が分かりやすくよかったです！ただ、後ろの人にも気づいてあげてください。」との指摘もあった。小生としては、私語を注意したり、後方に座っている受講生を注視していたつもりであったが、十分ではなかったようである。この点について、今後、一層、配慮していく意向である。



◆今後の改善に向けて

前述のような肯定的意見が、さらに多くの受講生から得られるように精進する。統計データ結果で「質問」が少なかったことについては、その原因を明確にし、問題点があれば、その改善に努める意向である。また、「予習・復習時間」が短時間であったことについては、本授業が「集中講義」であったことから、その学習時間を確保し難いということが主因になっているものといえよう。今後は、こうした中でも、毎回の授業の終わりにリフレクション(省察、振り返り)を行うなどの工夫をして、その学習活動の機会を増やすようにしたい。一方、受講生の自由記載の結果で、「もう少し私語を注意してほしいです。」、「後方に座っている人にも気づいてあげてください。」と記載されていたことについては、私語への対応や後方に座っている人への配慮が十分でなかったことによるものと考えられる。今後は、もう少し机間巡視を多くするなどして改善していく方針である。

科目名

10.レクリエーション

担当教員

加藤 真夕美

出席者数

65 名

◆集計データ結果について

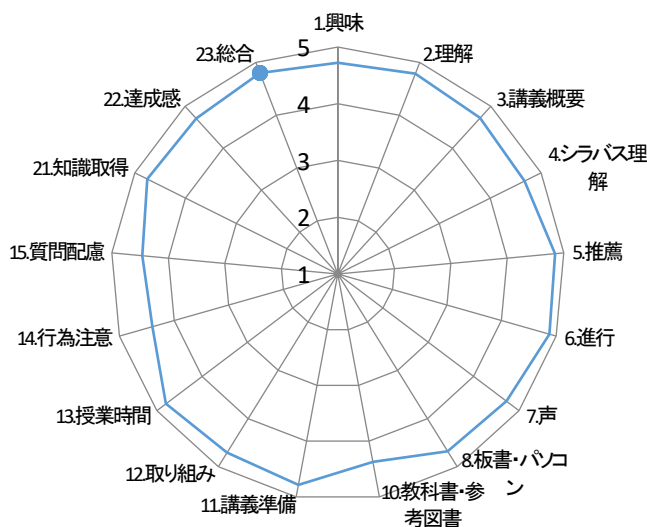
教員に対しては、レーダーチャートに示されているすべての項目で、平均が4.4～4.9の間にあり、バランスの良い評価であった。ほぼすべての学生が3点から5点と点数をつけているが、授業時間（13）・行為注意（14）・質問配慮（15）のみ各1名の学生が2点をつけていた。グループワークを主体とし、学生自身が企画し実践し、まとめ、発表するという学生主体の授業であったため、授業に参加しているという意識を持ちやすく、高評価につながったと思われる。一方で学生の進行によっては授業時間が短くなり（13）、まとまりがなくなる場面があり（14・15）、そこを不快に思った学生が2点をつけたと推測される。

学生自身の授業への取り組み（16・18）は概ね良く、自分たちで授業を創ろうとした姿勢が伺えた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「楽しかった」との意見がほとんどであった。その内訳は、「専攻の垣根を越えて仲良くなれた」「普段関わらないこと接する人ができた」という対人交流の拡大、「臨床でも使える知識」「レクのコツ」「障害のある人に対するレクの考え方」「意見を出し合ったり役割分担したりすることで積極性と協調性が学べた」という質的な成果が主であった。学生主体の授業という意図が十分に伝わったと感じている。

教員に対しては「一緒に授業作りをしている感じ」を肯定的に受け取った学生もいた一方で「もう少し私語を注意してほしい」「もうちょっと生徒を見てほしいと思う」との意見があり、今後の課題となった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

今年度初めて受け持った授業であり、手探りの中進めていった。実習科目ということで、アクティブラーニング的な要素を極力取り入れ、計画-実践-発表の一連の流れをすべてグループに委ねた。発表の評価は学生間の相互評価を主体とし、ルーブリックを取り入れた。前半と後半で希望のある学生にはグループ変更を申し出るよう伝え、1名が変更した。次年度も効果測定のため同じような授業構成とする予定だが、上記の記述で指摘にあった私語への対応などについては、学生が創り上げる授業であるということを常に伝え続けることで理解を浸透させていきたいと考えている。

科目名

11.健康運動とスポーツ

担当教員

鳥居 昭久

出席者数

63 名

◆集計データ結果について

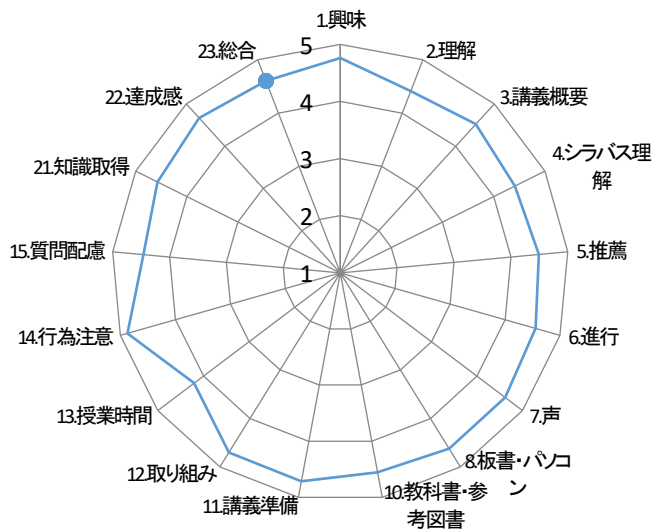
レーダーチャートを見る限り、バランスはとれていると考えられる。また、実技を多く取り入れたが、単に学生自身が体験するための実技ではなく、将来指導する立場での実技修得を目指しているため、受講態度については、かなり厳しく指導した。この点で、講義態度が悪い学生に対する指導は徹底して実施した結果が出ているかもしれない。

予習、復習をすることを多く求めて、課題についてもいくつか指定しているが、予習、復習時間が短いのが大変残念である。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

実技を多く取り入れたが、受講者の人数が多いために、十分に指導が生き渡らなかった点が残念である。その点で、学生にとっては消化不良の部分が多かったと感じる。また、グループによる実技を取り組ませているが、積極的な学生とそうでない学生との差が大きく、結果的に不満につながったことが推察される。

実技の前に、もしくは実技に伴って、色々な現場での話を織り交ぜているが、マニュアル的な学生にとっては、教科書以外の話を雑談と感じていることが誠に残念でたまらない。現状として、格言やことわざすらまともに理解できない学生にとって、比喩的な説明も難しい。この点で、初等教育からの学び直しを求めたい気持ちになる。また、解剖学、生理学、運動学などの基礎医学との関連性が理解できていない学生が多く、実技内容について来れていない可能性を感じている。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評価)

◆今後の改善に向けて

この科目は、必須にすべき内容が多いが、受講生が多いと内容的にも薄くなってしまい、そのあたりの工夫が必要であると感じた。しかし、セラピストとして基本的で必須な技術であり、この科目内容の修得をさせるための工夫を検討していく予定である。

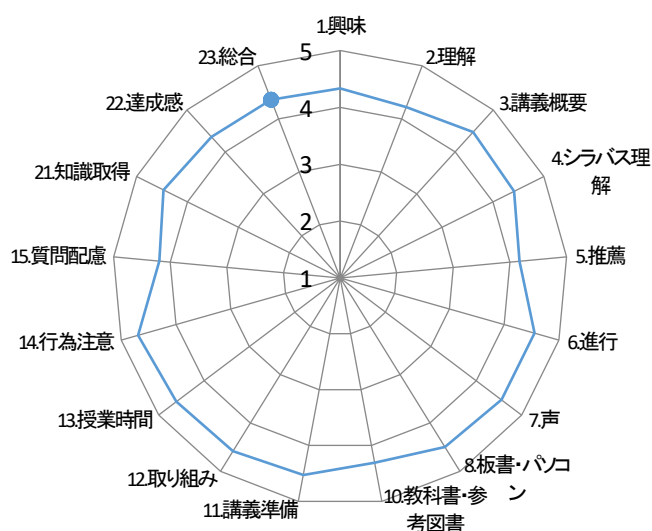
内容に対して、配当時間数が少なすぎると感じる。次年度以降、積極的な補講を考えている。

◆集計データ結果について

総合評価を含め、アンケート23項目すべてにおいて、評点の平均が4.0を上回っていることから、良好な講義であったと評価できる。アンケート項目を個別に見てみると、「知識取得」が4.5なのに対し「理解」が4.2であった。この講義自体、知識の習得よりも科学的な見方・考え方を身に付けることを目指しているため、「知識取得」より「理解」の平均値が低くなったことは、残念であった。また、「興味」、「達成感」についても今ひとつ物足りない数字である。学生が科学的な見方・考え方に、より一層コミットできるよう授業改善に向け、工夫を重ねたい。「質問配慮」についても4.2と平均が高くなり、今後、学生が質問しやすくなるよう考慮すべき必要がある。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「生物と環境」の授業では新聞やインターネットの記事などを資料として活用し、グループ・ディスカッションを行わせるなど、できるだけ学生に考えさせる授業を行っている。自由記載では、授業で新聞等の記事や写真を資料に使ったことについて、「現代の環境問題について詳しく知ることができた。」「時事問題がとても興味を持てる内容で楽しかった。」などの声があり、学生にとって効果的であったと考えられる。また、「グループワークで自分の考えにはない、他の人の意見を聞いて良かった。」などグループ・ディスカッションを取り入れたことも学生に好評であった。授業ではPowerPointを使用し、授業用プリントを用意しているが、授業用のプリントについては「わかりやすかった」という声が多く、PowerPointの利用についても「スライドや文字も見やすかった」の声が見られた。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

「生物と環境」の講義は、後期の途中から始まり、秋休みや冬休みで中断されている。そのため、本年度は昨年度の反省を踏まえ、講義と講義の途中に間が空いても、間延びしてまとまりがなくならないように、できるだけ1コマずつでも授業内容が完結できるように工夫した。しかし、実際にはそのとおりに行かず、講義の流れを作りにくかった。特に、学生にとって効果的な時期を見計らって、グループ・ディスカッションやまとめの発表をさせることが難しかった。来年度は、この点をさらに工夫をする必要がある。毎年行っている、新聞やインターネットの記事などの資料の活用、グループ・ディスカッションについては、学生にも評判が良く、授業への効果が実感できるので、このまま継続したい。

科目名

13.生命の科学

担当教員

石黒 茂

出席者数

69 名

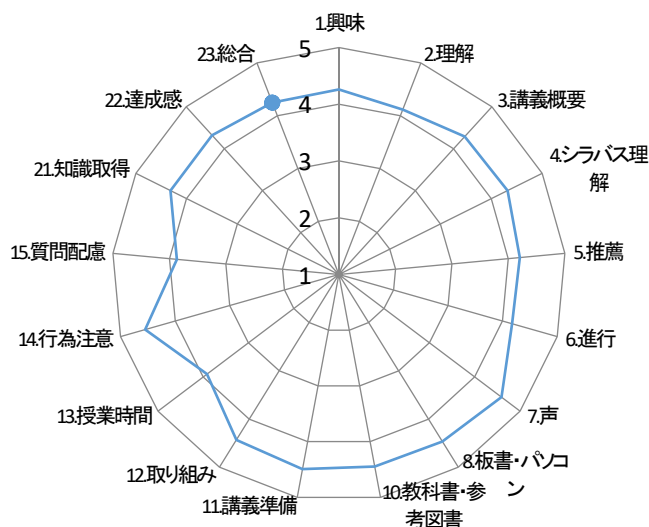
◆集計データ結果について

学生の実態に合わせ、生命についての概念形成に主眼を置き、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を行っている。昨年度のアンケート結果に基づき、評価方法も含めて授業内容の精選や指導方法の検討を進めた。また、ポートフォリオの記載内容の改良に努めた。その結果、総合評価では「良い」「どちらかといえば良い」が合わせて87.0%、「悪い」「どちらかといえば悪い」は合わせて1.4%であり、昨年度を上回る満足のいく結果であった。そして、「知識の習得」が「満足」「どちらかといえば満足」を合わせて89.8%で、昨年度より大幅に改善した。しかし、「授業外の学習」で復習を「全くしていない」と回答した者が34.8%存在するなど、個別に見ると今後に向け検討すべき課題も多々見られた。次年度に向け、アンケート結果を検討し、講義の改善をさらに進めたい。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

一番多かったのが、授業での学習を振り返らせ、学んだことを整理させるため、毎時間提出させているポートフォリオについてであった。ポートフォリオの作成にはそれなりの時間がかかるため、「難しかった」「大変だった」という声もあったが、「その日の復習ができてよかった」「復習が効率よくできた」「わからないところは返答してもらえよかった」などの肯定的な声もあり、アクティブ・ラーニングと同様に今後も継続していきたい。しかし、それに関わらず復習を「全くしていない」と答えた者が34.8%も存在するのは、ポートフォリオの作成を学習ととらえていない学生がいることの現れであり、この結果を今後の指導に生かしたい。一方、授業の方法については「動画やプリントなどの教材が理解を助ける」という意見が見られた。

授業の内容や説明については「わかりやすかった」などの肯定的な記載が多く見られたが、他方「ゆっくりやってほしい」「速いときはついていくのが大変だった」という記述もあった。学生の高校時代の理科の履修状況や学力差が多様化している今、学生全員のレベルに合った授業を行うのは難しいが、できるだけ平易に説明できるよう検討を進めたい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

授業のレベルを落とさずに多様な履修者を満足させることは容易でないが、シラバスの段階から学習内容や教材の検討を進め、今後もより多くの学生が満足できる授業に向け改善に努めたい。一方、学生の中には、高校までの暗記に頼るような学習方法から脱却できていない者が少なくない。そのため、授業にアクティブ・ラーニングを取り入れ、ポートフォリオで自分の学びを振り返らせ、自分で考え、考えをまとめることをさせているが、最後までその意義が分からずに終わっている者もいる。学生が医療短大でリハビリテーション科学を学ぶための基礎を作るには、初年次の授業で、学習に対する意識を切り変えることが重要である。そのための方策の検討も引き続き行っていきたい。

科目名

14.エネルギーのしくみ

担当教員

後藤 理夫

出席者数

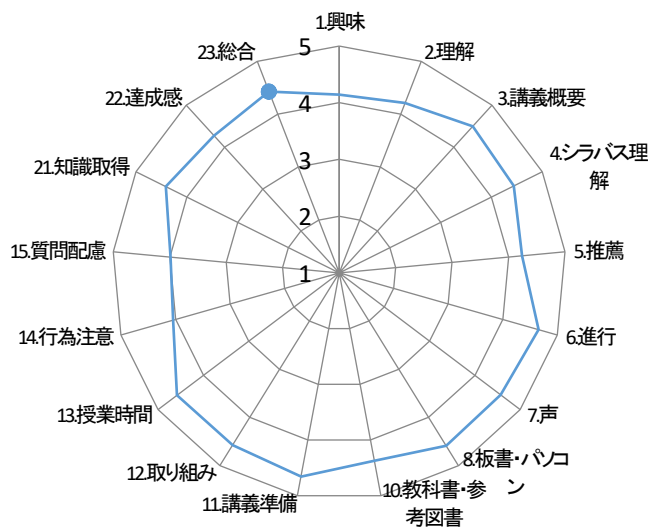
70 名

◆集計データ結果について

自由記載と連動していますが調査に対して約20%の学生が適当に当たり障りのない、好い評価回答しての結果だと受け止めます。最初の講義で「予習はしなくてよい、その分だけ復習に時間をかけてください」と伝えましたが予習した学生が40%、課題の提出率99%であるが復習0時間の学生が23%とデータでは示されていること等から判断しました。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

高等学校で物理を2単位で終わっている学生を主体にした講義であったが、それなりの手応えもあり学生も応えてくれました。がしかし、17名の学生が「特に無し」「なし」と記載している、丁度25%に相当する。楽天的な見方をすれば高校で受験科目として勉強してきた学生=30分で試験解答を終えた学生の10数名がここに相当していて、気楽に講座を受けた、特段の感想も無かった、と思います。



1~5授業内容、6~10授業方法、11~15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

とはいうものの、前項の続きになります
が10名弱の学生にとっては重荷になって
いるのも事実です。学生の意見にもありま
したが「日常生活との関連性」「絵図の多
様」「豆知識」などで講義の中に引き入れ
る工夫をしていきたい。

科目名

15.解剖学

担当教員

清島 大資

草川 裕也

出席者数

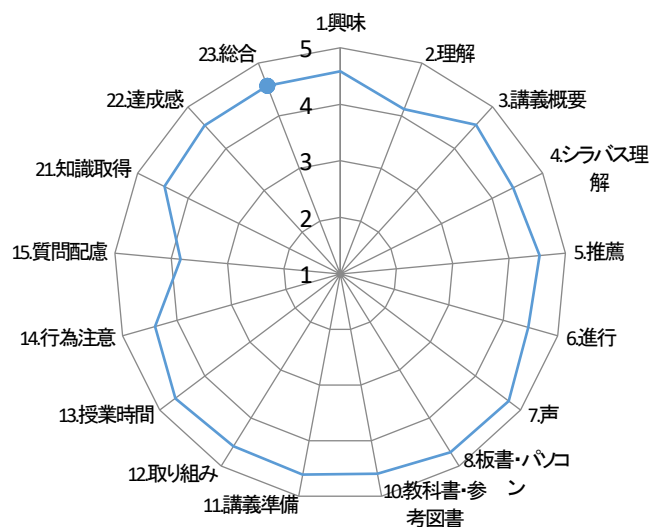
72 名

◆集計データ結果について

総合評価において、すべての学生での評価が5段階評価の4.5以上となっており、概ね評価は良好である。しかし、「理解」、「質問配慮」の項目においては、少し評価が低くなっている。自由記載に進むスピードが速くて追いつかなかった、勉強する量が多すぎてついていけなかったなどの指摘が見受けられたため、そのような学生への配慮がかけていたのではないかと考えられた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

この授業では前期で解剖学の全範囲を終えるため、予習・復習がしやすいように教科書に沿った授業を行った。また、期末テストへの学生の負担を減らすため、中間テストを実施した。さらに、授業後には必ず質問等の時間を設けるようにした。しかし、学生の意見として、「スピードが早すぎてついていだけで精一杯だった」等のコメントが見受けられた。かなりの学生が「授業スピードが速かった」と感じているようであった。毎回授業時、学生からの質問時間ではほとんど質問がでないため、学生自身で疑問に思うことややりたいことは発言してほしかったと思う。次年度は学習の習熟度を確認するためにも、小テストの導入を検討している。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

カリキュラムの都合上、前期で解剖学を終了させることを変更することができない。よって、教科書に沿った授業形態を大きく変えることは困難である。授業についてきやすくするため、①授業開始前にキーワードを配布し、予習・復習をしやすいようにする、②小テスト・中間試験を実施するなどの改善を図っていきたい。

解剖学は暗記になりやすいが、理解する授業を行っていきたい。

科目名

16.解剖学実習

担当教員

藤森 修

鳥居 昭久

木村 菜穂子

清島 大資

堀部 恭代

草川 裕也

出席者数

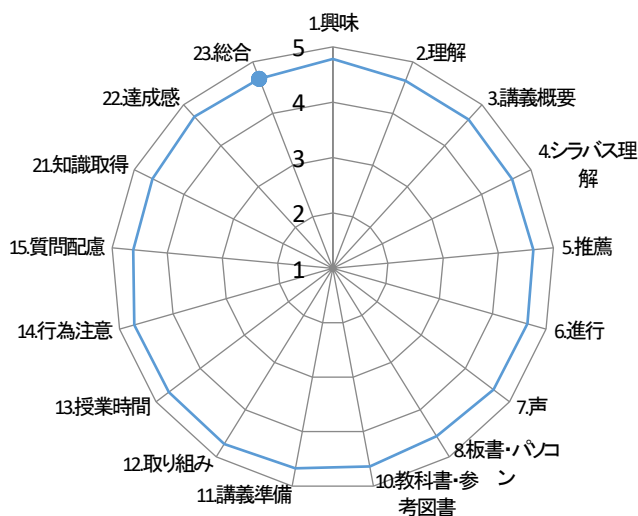
55 名

◆集計データ結果について

全体としてはバランスがとれていると感じる。しかし、自己学習時間が少ない者がいるのが残念である。この科目は、小テスト、課題、口頭試問など自己学習を十分にしなければならない内容が多く、自己学習が少ないことが最終的な成績に影響を与えていると推察される。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

骨学、筋学ともに、実物標本を観察する体験とその解説や背景についての説明を行ったが、この経験を通して解剖学の知識のみならず、医療倫理的思考を促すことを目的にしている。今回の自由記載にはそれらの効果と思われる結果が寄せられている。この結果は、この講義の成果があったことと推察される点である。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

自己学習が少ない学生が多いことから、課題の内容や方法を含めた自己学習を促す方策を検討する。

科目名

17.人体触察法実習(PT)

担当教員

松村 仁実

木村 菜穂子

清島 大資

山田 南欧美

出席者数

43 名

◆集計データ結果について

各項目とも4点以上の結果であり、大きく減点となるような項目はなかった。しかし、その中で「理解」と「進行」の項目では若干低めの点数であった。

この科目では、1年生の後期に開講され、お互いの体で筋を触察し投影する実習授業である。そのため、座学の書いて覚えるという学びとは異なる実技を学ぶ初めての授業形態であった。その結果、理解の仕方や進行に戸惑う部分があったことが反映された結果と考えた。また、触察の仕方のデモを行った後で、限られた時間の中で各学生が課題を実施するため、時間のかかる学生には進行の点で難しさがあったと考えられる。異なる進行状況の学生に対して必要に応じた指導を行うが、まずは触察できるためのポイントをその場で指導するため、全体の理解として不十分であったことが考えられた。

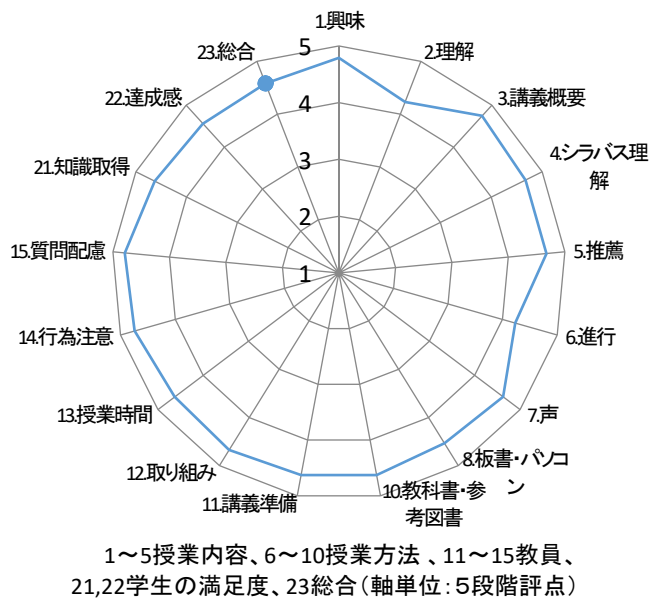
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

授業の内容に関しては、筋について理解が深まったとの意見が多くみられた反面、難しかったとの意見も多かった。実際に自身で確認し触ることが難しかったり、教員による指導の差が混乱した部分としてあったようだ。

授業時間数については、講義時間数に合わせ、必要とする範囲を絞って授業を構成してはいるが、時間をかけて学びたいや実技に充てる時間が少ない場面があったなどの意見もみられた。範囲の選定や授業時間の構成について検討が必要である。

小テストの実施については、大変さを挙げる一方で小テストの効果を認める意見もあった。また、小テストの結果を受け本試験に対する不安の声も見られた。小テストは日々の積み重ねを促すために実施し評価に大きく反映させているが、学生の意見を見ると効果的に行えていると考えられる。

教員に対しては、複数人数が担当する利点と欠点が挙げられていた。授業の形態を考えると複数人数で行うため、よりよい指導方法の検討が必要と考えられた。



◆今後の改善に向けて

授業内容の重要性は学生には伝わっていると考えられる。そのうえで理解をより深めるための工夫が必要である。小テストの実施は日々の取り組みを促し、知識の習得には必須である。今後も継続して行っていくが、成績における位置づけの説明を繰り返し、日々の取り組みにつながるようにしていく必要がある。

授業の構成としては、最低限必要と考える範囲を絞りこんでおり、関連した部分はなるべくまとめて授業を組んでいる。そのため、日によってはボリュームが多くなってしまいうこともある。全体的に配置を見直し、ボリュームの均等化も行っていく。

授業時間以外にも必要に応じ教員が質問などに対応はしているが、アナウンスを十分に行う必要がある。限られた時間の中で習得することは難しく、復習は必須である。そのために、復習が円滑に進められるような授業方法を検討し、学生提示することも必要と考える。

科目名

18.人体触察法実習(OT)

担当教員

堀部 恭代

草川 裕也

出席者数

25 名

◆集計データ結果について

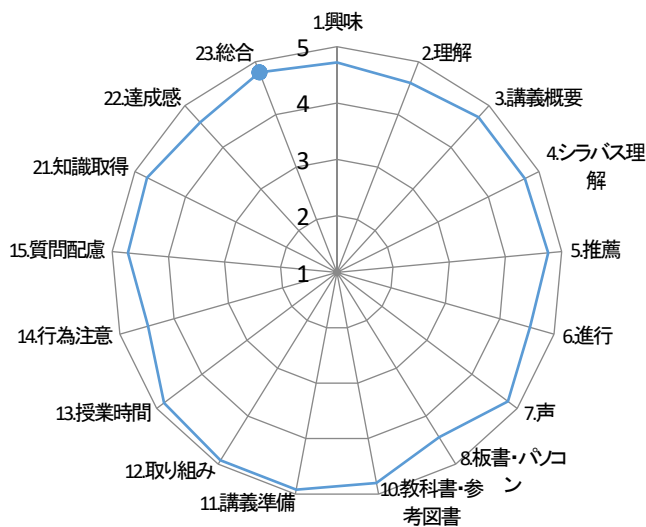
平均して、4.7と高い数値であり好評価であったと言える。特に値が高かった項目は「授業準備」「取り組み」であり、教員の授業に対する姿勢についての評価が高かった。また、「興味」「知識習得」の項目も高かった。座学で学んだ知識を活かすことのできる授業であるため学生の興味が高く、それが知識の習得に繋がったものと思われる。

反対に値が低かった項目は「板書・パソコン」「行為注意」であった。本授業は筋の書き方を口頭で説明しながら代表学生の体表に示す形式をとっており、板書・パソコンを使用していないこと、また、各学生で進行具合にばらつきがあり、早く終わった学生が時間を持て余すことがあることから、このような評価になったと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「回数を重ねるうちに骨や筋に触れるようになり楽しかったし達成感がありました。」「直接触りながら教えてくださるので理解しやすかった。」「筆記では全く覚えられなかった起始停止が実際描くことで覚えられるようになった。もっと授業数を増やしてもいいと思いました。」など、概ね肯定的なコメントが多くみられた。触察に関する知識や技術が習得できている様子が授業中にも確認でき、授業の到達目標が概ね達成できていることが伺えた。

反対に否定的なコメントとしては「先生の説明がすごくわかりやすかったですが、量がとても多いのが大変でした。」「進むペースを遅くして欲しい」などがあり、授業で取り扱う知識の多さについてのコメントがみられた。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

本授業は全身の筋について理解を深めるというよりも、少ない筋でも正確に理解し、イメージをつけてもらうことに重きを置いている。そのため、授業中に取り扱う筋の数を極力少なくし、教員のデモンストレーションに割く時間を短くし、学生たちが各自で筋を描く時間を長く取るように配慮している。

しかしながら、進行具合にばらつきがあり、授業時間内に課題が終えられない者もいる。このことから授業で取り扱う筋について再度見直すと共に、ペースが遅い学生には最低限描かなくてはならない課題を設け、ペースが速い学生にはさらに着手するよい課題を設けるなど、課題に幅を持たせる工夫が必要であると思われる。

また、ペースが遅い学生が、授業時間内・授業時間外を問わず自ら進んで質問ができるような促しも重要であると思われる。

科目名

19.生理学

担当教員

宮津 真寿美

出席者数

72 名

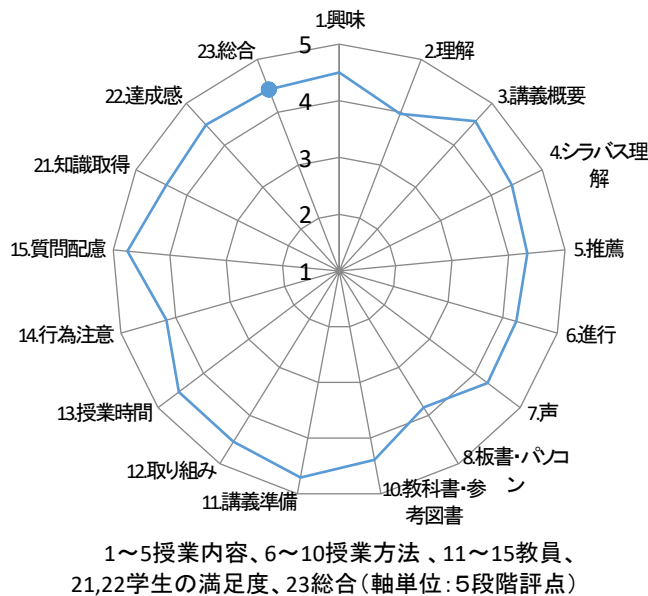
◆集計データ結果について

集計データでは、総合点が4.4で、高評価でした。しかし、項目別で見ると、2. 理解、8. 板書・パソコンが、4点を下回っている。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

授業は、学生の能動的な学習と、教員からの解説講義を組合せ、知識の正確な理解を目指した。具体的には、①予習課題、②予習課題をもとにしたグループワーク、③質問受付、説明、④最後にスライドを使ったまとめと次回授業の概説、⑤次回の授業前に、前回の範囲の小テスト、という構成で行った。

自由記載では、良かった点として、予習課題、グループワーク、質問のしやすさ、スライドを使った解説、小テストなど、それぞれについて好評であった。特に、質問がしやすかった、説明が丁寧だったとの意見が多かった。悪かった点として、一個一個説明してほしい、との意見があった。今年度は授業内での質問が少なく、説明する機会がなかったことからの意見であると考えた。



◆今後の改善に向けて

学生の能動的な学習を基に、授業を進めた。しかし、今年度は、グループワーク後の質問があまりなく、そのため説明する機会が少なかった。授業最後にスライドを使って、授業のまとめを行い、さらに、予習しやすいように次回の授業の概説を行ったが、スライドの授業になったとたん寝ている学生が多かった。予習課題の時点での理解の不足が原因の一つだと考える。予習課題を課す際には、キーワードやポイントを示した資料を配布している。ポイントを意識しながら学習しているかどうかを確認するようにしたい。

また、復習を促すことを目的に小テストを行った。小テストは学生からの評判がよく、今後も続けたいと思う。しかし、今年度は、小テスト中の不正行為を発見しており、それを許容するような雰囲気が一部であった。こちらの働きかけなどで、不正行為を許さないような環境で行うようにしたい。

科目名

20.生理学実習

担当教員

清島 大資

宮津 真寿美

堀部 恭代

清水 一輝

出席者数

62 名

◆集計データ結果について

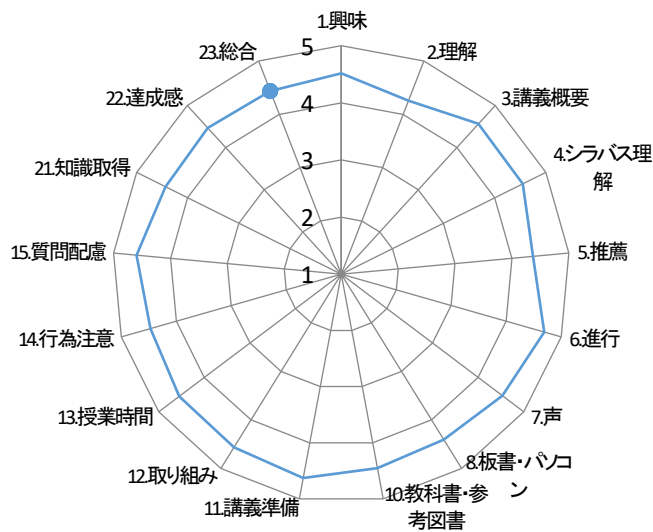
すべての項目において、5段階評点の4段階以上となっており、概ね評価は良好である。授業内容の理解が他に比べ、やや低い評価となっていた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

この授業では、前期の生理学で学習した内容を実際に体験するため、人だけでなく、実験動物を利用して複数の実験・実習を行い、その結果を解釈・考察することを目的に授業を行った。授業の最後には各項目の担当を決め、発表会を実施し、レポート記載が苦手な学生に対しても議論できるような場所を設けた。学生の意見からも、「実際に体験し、より知識を深めることができた」等のコメントがあった。その反面、グループで実験・実習を行うため、実験・実習に積極的に参加する学生とそうでない学生がおり、学生からも参加しない学生がいると負担が大きくなる等のコメントがあった。しかし、担当教員の人数を考えると、グループの人数を大きく減らすことは難しい。実験・実習へ参加しない学生に対しては、教員からも注意するが、学生自身で注意しあえるような環境を作ってほしい。

◆今後の改善に向けて

学生の実験・実習への参加意欲を高めるため、生理学で学んだどの知識を活用するかなどキーワードを実験・実習前に説明するなど工夫を図っていきたい。学生から提出されたレポートに関しても、できる限り丁寧にフィードバックを行い、正常な人体の構造と機能について理解し、説明できるように工夫を図っていきたい。少ない人数で対応できるような実習方法の検討も図っていきたい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

科目名

21.運動学総論

担当教員

齊藤 誠

出席者数

73 名

◆集計データ結果について

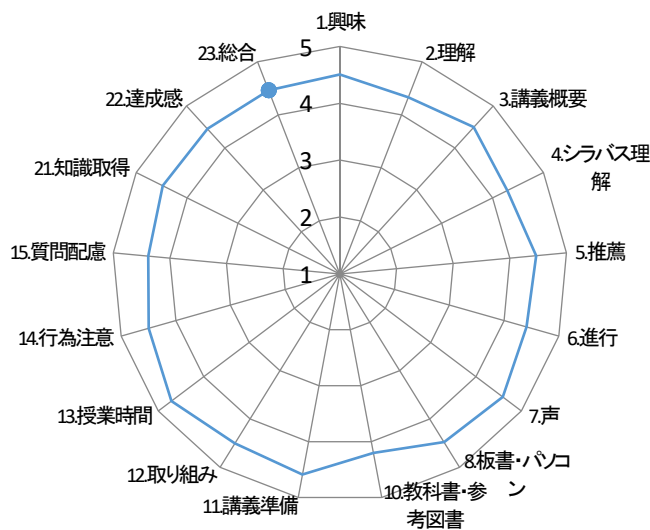
平均的に4.3～4.5点程度の評価に落ち着いており、おおむね良好な結果であったと考えている。

「10. 指定された教科書や参考図書、参考文献などの使用は適切でしたか」との質問に対する評価は4.2点程度であり、やや低い結果となった。1年生前期の段階では指定図書とした「基礎運動学」はやや難解かと考え、講義プリントを中心に授業を展開したため点数が低下したと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

本講義は毎講義後にリアクションペーパーを提出させ、指摘のあった質問事項に関する解説を次の講義時に行うようにした。自由記載においても、「リアクションペーパーが良かった」、「次の時間に解説してくれるのがわかりやすかった」といった主旨のコメントが多く寄せられたため、今後も継続していきたい。

少数意見ではあるが、スライド資料が見にくいとの指摘があった。図や表などのレイアウトは工夫の余地が多くあると思うので、明快な資料作成を心がけていきたい。しかし、フォントの大きさなどはかなり大きなポイントにしており、スペース上限界に近いと思われる。教室の座り方などを指導することで解決を図っていきたい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

上記に記載したように、本講義では指定図書ではなく講義プリントを中心に授業を展開した。学生からも「わかりやすかった」との意見が多く、講義内容自体は問題なかったと考える。しかし本来であれば指定図書を読解し自己学習を促すレベルまで引き上げることが理想であると思われる。わかりやすく、理解させることのみ重点を置くのではなく、専門書を読解するための教育も併せて行っていく必要があると感じた。

今後は学生の興味を喚起して自己学習を促すことも念頭に置いて、講義展開をしていきたい。

科目名

22.運動学 I (頭頸部・上肢)

担当教員

山下 英美

出席者数

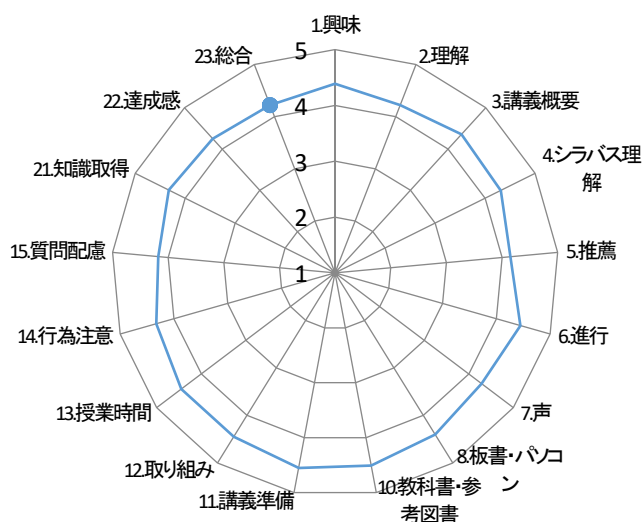
67 名

◆集計データ結果について

全体的に4点前半であり、どちらかといえば良いという評価であった。そのなかでも「教科書・参考図書の利用」は4.5点と高評価であったが「質問配慮」は4.1点であり、改善が必要であると考えられる。学生の取り組みは「目標などを意識して取り組んだか」は75%がどちらかといえば取り組んだ・取り組んだであり、「熱心に取り組んだか」は80%以上がどちらかといえば取り組んだ・取り組んだであった。1年生の基礎医学系の科目であったが、熱心に取り組んだことが伺われる。しかし予習・復習に1～2時間かけていた学生がそれぞれ約20%・約30%いる一方で、全くしなかったものがそれぞれ約25%・約15%みられ、個人差が大きいと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

20名ほどから「わかりやすかった」との記載があった。具体的には「骨模型を使った説明」「プリント等の資料」「キネシオロジー等教科書のページを画面に映して解説」などによりわかりやすかったとの記載が複数みられ、授業の工夫が反映された結果となった。また、「私語をしている人への注意が多く、授業が中断したのが気になった」といった記載が複数見られた一方、「騒がしい空気を注意して良かった」「叱るときはもっと言っても大丈夫だと思う」といった記載もあり、授業中の学生への注意に関しては難しいものがあると感じる。一部ではあるが、「最後の授業の手の変形の仕組みが授業で習ったことと結びついて凄く面白かった」というような記載もあり、運動学を理解する喜びを感じてもらえたかと思う。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

学生の理解を促すための工夫を、引き続き行っていきたい。また、授業態度の悪い学生に対する注意の仕方について、検討を重ねていきたい。

科目名

23.運動学Ⅱ(体幹・下肢)

担当教員

山田 南欧美

臼井 晴信

宮津 真寿美

出席者数

67名

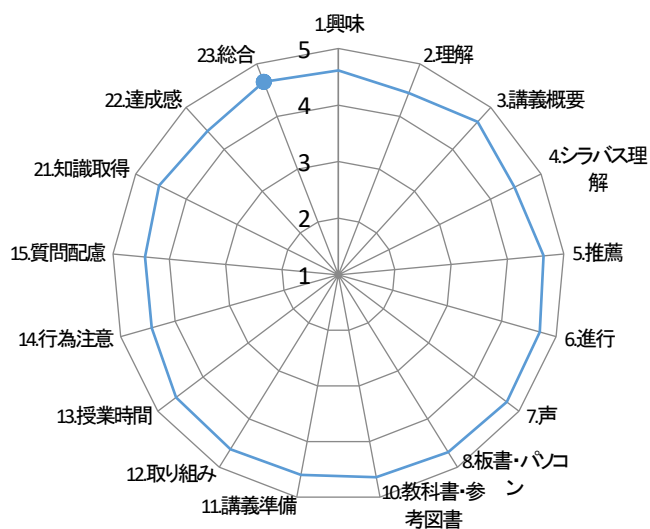
◆集計データ結果について

全ての質問項目において、アンケート結果が4点以上であり、達成感4.4点、総合評価で4.6点という結果であったことから、学生から本授業に対して高い評価を受けることができたと考えられる。本授業では、これから学ぶ理学療法学・作業療法学の基盤となる運動学について、机上の勉強にとどまらず、より実践的に学んでもらうために、毎授業で骨模型を用いて、講義を実施した。また、体幹の授業では、肺の模型を作製することで、実際の呼吸のイメージを習得できるよう工夫をした。さらに、最終講義においては、骨模型を用いたグループ学習を行い、グループ内での討論および他グループに向けての発表を実施した。これらの参加型の授業形態が、上記のような高評価につながったと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

多くの学生が、骨模型や風船を用いた肺モデルを使って授業を実施したことが、理解を深めることにつながったとコメントしていた。運動学は、3次元的な理解が不可欠なものであり、実際に骨模型に触れながら学ぶことで、理解しやすくなることができたと考えられる。また、学生たちが本授業に取り組みやすいよう、配布資料も図を多くしたり、書き込み型にしたりと工夫をした。自由記載に「プリントが見やすかった」との意見も多数あり、資料の内容についても、高い評価を得ることができた。

ただ、「グループ発表での準備時間が短かった」、「小テストのやり方があまり良くないと感じた」との否定的な意見もあった。グループ発表においては、前回授業までの総復習が課題となっており、日頃から復習を行っていることを前提に授業時間内で準備をするという形式にしていた。復習が十分に行えていれば、おそらく準備時間が短くても対応可能ではないかと考えるが、次年度の学生の反応を伺いながら、最適な方法を選択する。小テストについては、担当教員が複数いることで、それぞれの作成方法が異なっていたことから、来年度は統一する必要があるか、検討していく。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

本年度の評価が高かったことから、授業形態・授業内容については、来年度以降も継続して行っていく予定である。運動学は、今後の課程の基盤となる科目であり、本授業内で十分に理解を深めておくことが、今後の学生の学力に直結すると考える。引き続き、参加型、実習型の授業を行い、質問しやすい環境を作る傍ら、アウトプットさせる機会も多く持たせ、理解を深めていく手助けをしていく。また、学生から挙げたグループ学習および小テストについての改善点を教員3名で事前に協議し、学生のモチベーションを高めることのできるようなアプローチ方法を検討していく。予習・復習の内容についても的確な内容を指示することで、何をすべきかを明らかにし、取り組みやすい工夫をしていく。

科目名

24.運動学実習(PT)

担当教員

松村 仁実

臼井 晴信

山田 南欧美

出席者数

38 名

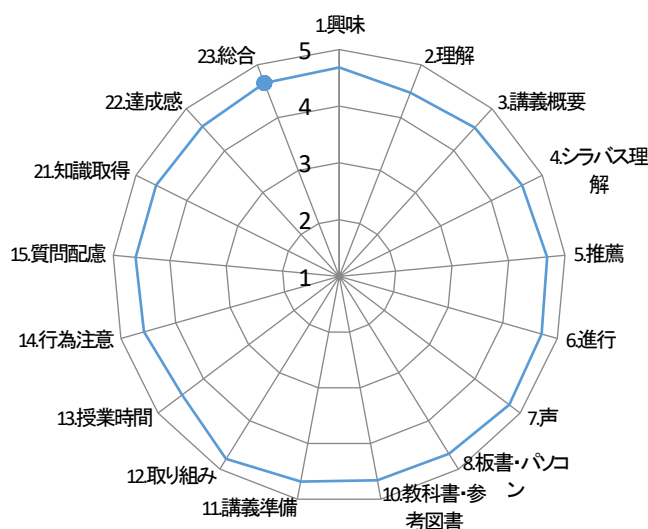
◆集計データ結果について

おおむね4点台半ば以上であり、大きく課題となるような項目は見受けられなかった。学生の取り組みに関しても熱心に取り組みができていた。しかし、質問の項目では、2割弱の学生が質問していないという結果であった。実習科目であり、グループによる課題実施であったため、全員が質問をしなくてもよい状態であったことが要因の一つと考えられる。予習復習の時間については、事前に実習課題を調べるなどが必要であるが、2割弱の学生が予習をしていない結果も確認できた。実習後はレポート課題の提出があり、必要に応じ再提出を求めていたが、復習時間を確保できていない学生もいたことがわかる。グループ学習は、学生によって取り組みに大きく違いが出ている可能性も考えられた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

実習に必要な機器を扱い操作できることが勉強になったとの意見が見られた。実際にデータを取ることで機械の特性などの理解につながったと考えられる。また、授業によって、学生自身が考えること、レポート作成することを通して参加する意味を理解できたとの意見が見られた。また、授業を通して達成感を感じたとの意見もあった。一方で、グループワークの難しさを挙げる学生もいた。

実習課題を6題設定したが、実習期間が短いためレポートをまとめる点で苦労したとの意見も見られた。一方で、レポートの修正では直し方がわからないとの意見があったが、教員への質問やディスカッションという機会をうまく作れなかったことが原因の一つと考えられる。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

なるべく多くの実習課題を体験とそれをレポートとしてまとめる作業を通し、自身で考え問題を解決する過程を学ぶことも課題である。開講期間が決まっているため、1課題ずつ進行するという事はカリキュラム的にも困難である。したがって、複数課題の同時進行になるが、グループワークのため課題の負担に偏りが生じると考えられ、今後は多くの学生が積極的に参加する工夫が必要である。グループの人数調整をし、各課題において学生が様々な役割を担うことができる配慮が必要である。

レポートが完成するまでは再提出を課しているが、課題の理解や思考過程を整理するうえで必要な時間である。その際、教員への質問やグループ内、あるいは教員とのディスカッションが不可欠であり、その必要性をしっかりと説明することで適切な修正や課題への理解が深まると考えられる。授業ガイダンスや実習課題の開始に伴って、繰り返し説明し対応していきたい。

科目名

25.運動学実習(OT)

担当教員

草川 裕也

清水 一輝

出席者数

27名

◆集計データ結果について

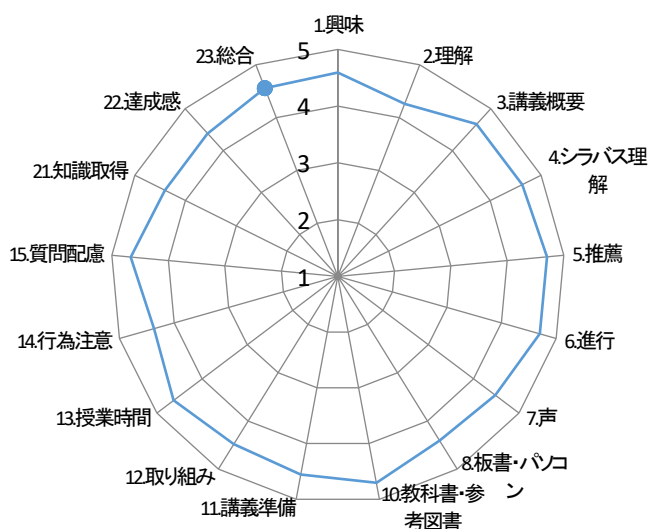
すべての項目について5段階中4以上となり、良好な結果であった。しかし、「理解」と「行為注意」の項目においては、他の項目と比べるとやや低い評価となった。本授業は、動作分析とレポート作成が主であり、レポートを通して理解度を確認した。次の項目で述べるが、自由記載の内容を見る限り、レポートの考察を書き上げることに苦労したとのことであった。実習での体験や観察内容と運動学的知識を結びつけて、観察された現象がなぜ生じたのかを考えることに難渋しているようであった。観察が十分にできなかったり、十分に考えてレポートを書いていなかったり、運動学に関する知識が十分に定着していなかったりする様子が見取れた。

また、シラバス記載の目標等に対する意識が低く、授業終了時に毎回次回の実習内容の予習を行うよう促したり、シラバスに予習範囲を記載したりしたが、予習していない学生がいたことは残念であるが、多くの学生が実習やレポート作成に関して質問できていたことは非常に良かった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

レポート指導に関しては「よかった」との評価であった。開講期間中にすべてのレポート課題を完成させることができない学生がほとんどであり、学生にとって大変だったのではないかと思うが、レポート作成を通して、疑問点を検討したり、教員に質問したり、学生が個別に必要な対応を取ることができたこと、また教員も個別に不十分な点を説明できたりしたことが効果的であったと考える。パソコンや専門用語を使用しながら、体験したことをよく検討してレポートを作成するという作業は良い経験になったと思われる。

ただし、「レポートの考察の指摘の理解が難しかった。」との意見もあり、レポートのやりとりのみに留まらず、顔を合わせた丁寧な個別指導も必要であると考え。必要に応じて、個別指導も行っていきたい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評価)

◆今後の改善に向けて

上述の通り、体験とレポート作成という授業の内容については適切と考える。しかし、「理解」の項目の評価が低い一方で、自由記載を見る限りでは理解できなかったとのコメントもあるため、理解度は学生によって様々であり、全体の理解度が増すように進行していく必要があると考える。運動学の知識を利用して観察内容について深く考察するという流れにおいて、ポイントとなる点をしっかりと説明する必要があるため、運動学の知識の復習や観察ポイントについての講義の実施について検討していく。

また、予習の必要性や毎回の授業の目標を授業毎にしっかりと説明する必要がある。

さらに、評価が低かった授業を妨げる行為に対する注意は徹底していきたい。

科目名

26.人間発達学

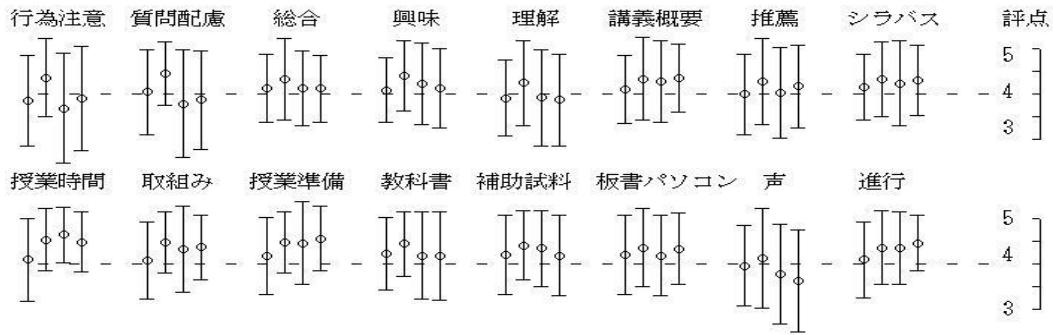
担当教員

伊藤 宗之

出席者数

66 名

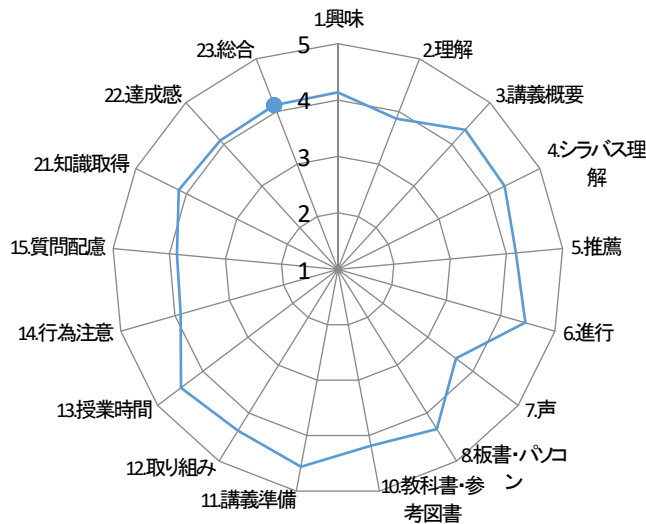
◆集計データ結果について（各評価項目について左から右へ平成26～29年度にかけて平均とばらつき）



◆学生の自由記載の内容を検討した結果

短所：何言ってるのか分からない時がある。プリントも分かりにくい。プリントに沿ってない時があったので気になりました。小テストがプリントにも講義にもゆってないことがたまにでてたりしていたのでわからなかった。先生の声があまり聞こえませんでした。小テストが少し難しすぎるように思えました。テスト形式の改善。先生が小テストの答えを全部言ってしまっはテストにならないと思います。小テストの点数を全員開示しても問題ないと思います。時々どの部分の内容を言っているのかわからなかったです。聞き取りやすい声で話して欲しかったです。プリントをもう少しわかりやすくしてほしい。

長所：資料や画像を多く提示してくださり分かりやすかったです。小児のことに興味があるので面白い授業でした。お疲れ様でした。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合（軸単位：5段階評点）

◆今後の改善に向けて

この科目は新年度には担当講師が交代します。長い間お世話になりました。

科目名

27.一般臨床医学

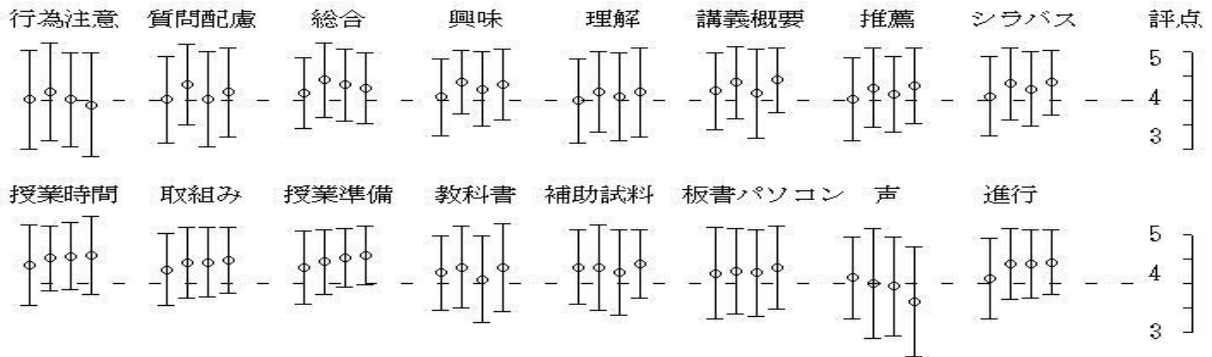
担当教員

伊藤 宗之

出席者数

53 名

◆集計データ結果について（各評価項目について左から右へ4年間の推移、破線はレベル4を示す）



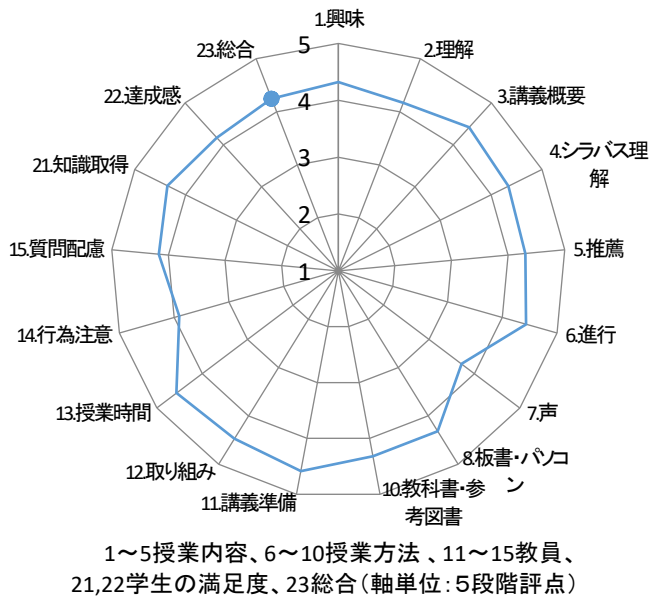
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

短所：話が飛びすぎて、今どこの部分を説明されているのか分からないことがあった。授業時間の延長が少し多かったです。声が聞き取りづらかったです。プリントのまとめ方を少し変えてほしかったです。難しい。教科書がない分、スライドで画像などを見ることが出来たが、全体的な内容が理解しづらかった。声が聞き取りやすいところと聞き取りにくいところがあります。プリントのどのことを喋っているのか分からない。急に飛ばしてるとこもあって、答えがあやふやな所も多々ありました。

長所：毎回のプリントに小テスト形式の問題を作ってくれてわかりやすかった。パワーポイントが大きくて完結でわかりやすかったです。

◆今後の改善に向けて

この科目は新年度は担当講師が交代します。長い間お世話になりました。



科目名

28.公衆衛生学

担当教員

杉山 成司

出席者数

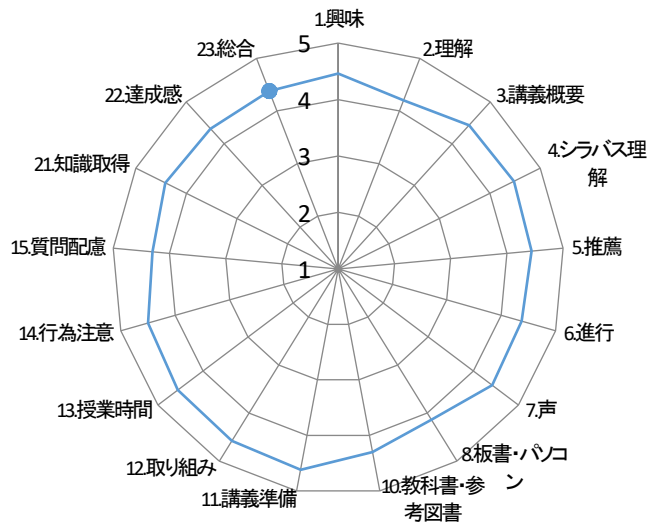
50 名

◆集計データ結果について

日常生活において、日頃からいかに健康を維持し疾病予防をして行くか、その課題に取り組む上で公衆衛生的手法は極めて重要である。しかし、学生の医学的知識はまだ不足しており、身の回りにある多くの医療問題に対して興味を持ち辛いことがひしひしと伝わってくる。そこで、当学では教科書に沿いながらも、なるべく現代において看過できない医学・社会学的問題を提起し、学生が親しみを持って課題に打ち込めるよう工夫し、学生同士で議論を繰り広げられるよう時間配分をした。学生自身も問題認識を共有することができ、授業への関心度は大幅にアップし、場合によっては楽しみながらの講義となった。集計データはその一端を伺わせるものとする。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

危惧していたこととは違って、学生も授業内容に興味、共感を持つことができたようで、かなり積極的に課題に取り組み想定以上の成果を上げた者が多かった。こちらの意図したことがある程度浸透したのではと感じている。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

学生自ら、現在の社会に起こっているさまざまな医療問題に注意を払うよう、意識して取り組んできた授業であり、今後も積極的に進める予定であったが、残念ながら今年度が最終講義となった。

科目名

29.臨床心理学

担当教員

山田 ゆかり

出席者数

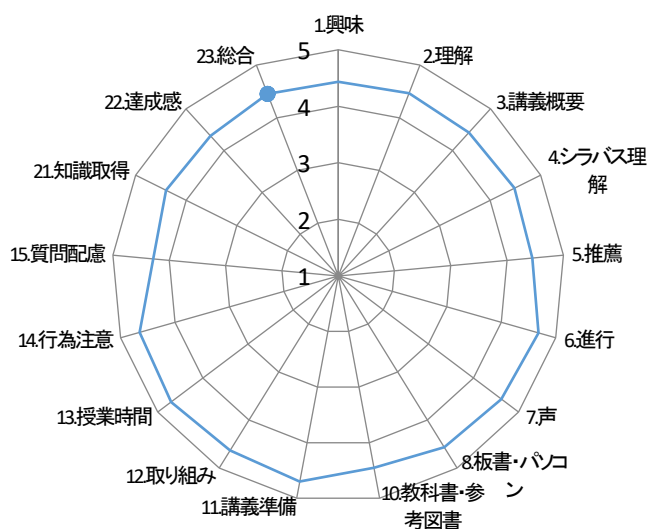
60 名

◆集計データ結果について

身近な例示を多用した解説、明確な板書、使いやすいワークブック形式の教材作成など、基本的な授業方法の工夫が効果を上げている。レーダーチャートは、評定値がほぼ4.5前後の概ねバランスのとれた形となっているが、「15. 質問を述べられるような環境だったか(4.28)」がやや低くなっている。出席カードを兼ねたリアクションペーパーや小レポートに、質問があれば書いてもらい、次回の講義開始時に対応しているが、当該授業時間中の質問対応に一定のニーズがあるとも考えられる。もう少し、双方向で議論することへのニーズを確認したい。分からない点を確認する必要を減らすような授業内容を心掛けていることが「質問が出ない」ことに関連しているかもしれない。授業開始前の30分程度をオフィスアワーとしてなるべく待機するようにしているので、この時間を利用するよう指導していきたい。また、授業内容・方法についての評価結果は概ね問題ないが、「予習」「復習」はわずかしが行われていない。授業外学修を促す働きかけは今後も継続する課題である。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

出席60名で、65コメント(うち、「特になし」の記述11)が得られた。例年のように、心理アセスメントについての体験的学修を評価する意見のほか、「理学療法士、作業療法士として大切な内容だった」「患者の理解、症例に即した対応など役に立つ内容だった」といった将来に役立つとする意見があった。また、「わかりやすかった」「面白かった」「興味が持てた」など授業内容、方法について多くの肯定的な意見が寄せられた。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

基本的には、現在の授業内容や授業方法が学生に支持され受け入れられている結果となった。本年度から教室環境が改善し、提示装置等も使いやすくなったので、テキスト、プリント、板書と合わせてより分かりやすい授業方法と内容の充実を図っていく。前述したように、質問への対応(授業中に議論を促す働きかけ)については課題があるので、具体的な改善方法を検討し実行していきたい。また、予習・復習を促す指導はまだ不足しているので、授業の到達目標と履修上の注意を常に意識させるような働きかけを継続していく。

科目名

30.内科学

担当教員

杉山 成司

出席者数

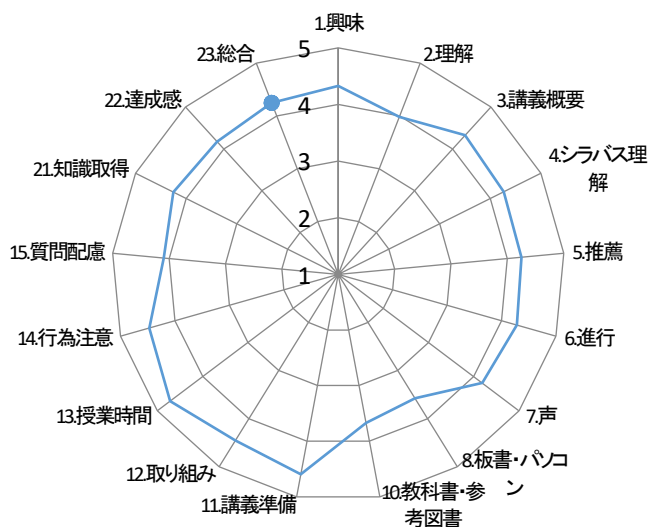
64 名

◆集計データ結果について

内科学は守備範囲が広い。そのため、全体として概括的で散漫な内容にならないよう、症候学、循環器系、呼吸器系、消化器系・肝胆道系、代謝・内分泌系などに力点をおいて講義をした。これらの疾患病態を取り上げて行くと、必然的に感染症や腎泌尿器疾患など他の領域とも深く係わってくることになり、それらの関連性を意識した、より複合的な理解を目指した授業に心掛けた。学生はまだまだ医療を立体的に理解することはできないが、テスト結果などから窺えることは、徐々にではあるがそういった視点、姿勢が形成されつつあるようであり、集積データからもそのように感じている。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

毎年、学生から「教科書」をもっと使用してほしいとの要望があるが、実際には学生用プリント作成時には教科書から図・表・記載を多数引用している。加えて、与えられた教科書による説明文では内容把握がかなり難しいことも多く、実践医療に即した理解度を高めるよう、多くの書籍、資料から抽出してプリント作成しており、学生がやや誤った認識をしている可能性は否めない。ただ、教科書の重要性、活用も機会あるごとに説いており、今後とも学生にとってより有効的な講義法を試行して行きたい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

講義の教室は前後に長く、見やすさ、聴きやすさなどの観点から、一定の制約があるのも確かである。ただ、勉学への熱意、希望を持つなら、学生自身が受講方法を考えることも必要であり、それらの要請に対しては真摯に対応していく。

科目名

31.整形外科学

担当教員

山田 正人

出席者数

63 名

◆集計データ結果について

質問項目14及び15が他の項目に比較し評価が低かった。14については、2～3度強く注意はしたが著明な効果はなかった様に思われる。常識的な事項で、各個人の自発的なモラル向上を願うしか無いと思われる。

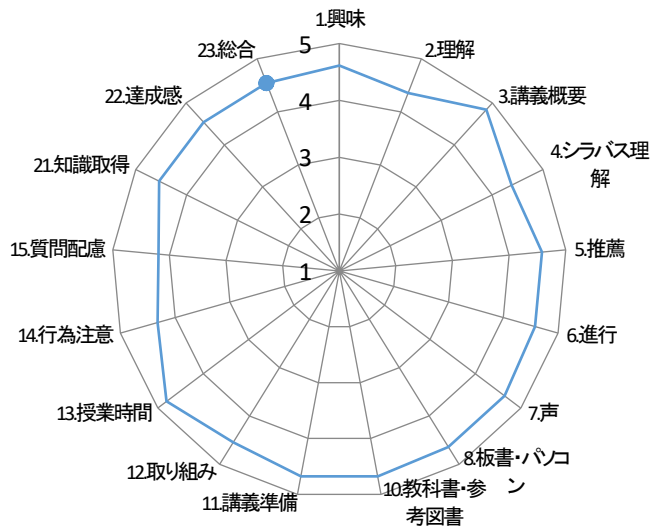
15についても、質問を促してもほとんど質問が出なく。全体的に予習・復習が著明に不足していると思う。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

学生により非常に差が見られる。各個人の能力及び学習意欲の差によると思われる。

学生の全体的な質の向上を図る事が第一と感ずる。

短大の2年でもあり、自分での創意工夫・積極性で改善出来る事も多いと思う。短所には耳を傾け改善を図るつもりである。



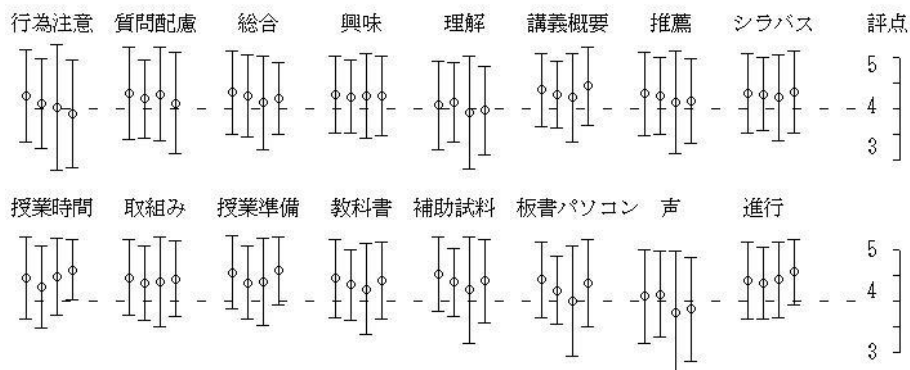
1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

例年に比較し、まだ受講の姿勢は良い方だったと思う。しかし、毎年度、感ずる事は同様で、まずは常勤・非常勤を問わず、全人格的な教育に力を入れる事が重要と感ずる。

私が述べる立場ではないと思うが、入試制度そのものの改善を図ると同時に、入学許可された学生のはずなので、学習意欲を増し、受身ではなく、積極的に自ら学ぶ姿勢が促される様な教育指導方針を再度熟考する必要性があると感じている。

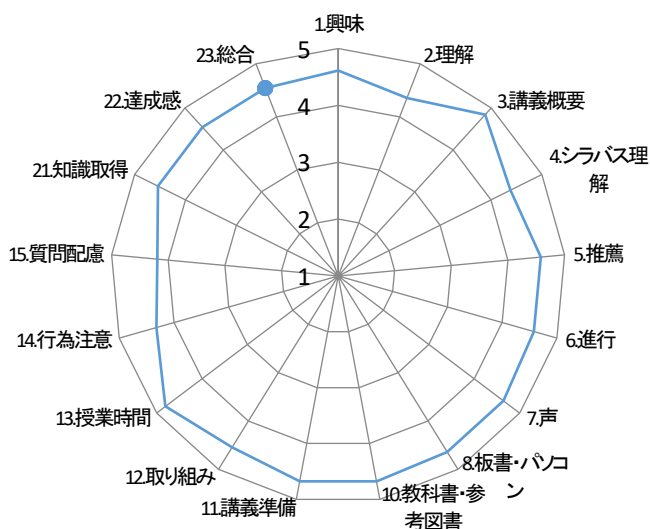
◆集計データ結果について



◆学生の自由記載の内容を検討した結果

短所：「声が聞き取りにくかった」「朝一という10問の問題を解きながら、先生の話聞くというは無理があると感じた」「朝一を行う意味が見出せなかった」「先生が何を喋っているのか、理解が難しい」「問題のうちの回答するものとしなないものを作るのはやめて欲しい」「内容をあっちこっちプリントを見るところが変わるので少しやりずらかった」「マイクがよくハウリングするので困りました」「授業がとても分かりにくい」「マイクの音を大きくしてほしい」「朝一とか小テストとか実践問題とか授業中にやらなければいけないことが多くて、授業内容に集中できなかったです」「話が飛ぶので、どこをやっているのか分からなくなる」

長所：「毎回小テストがあることで、内容を理解することができました」「毎回小テストがあることで、内容を理解することができました」「プリントやスライドがあってわかりやすかったです」「質問した時に丁寧に説明してくださったのでわかりやすかったです」



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

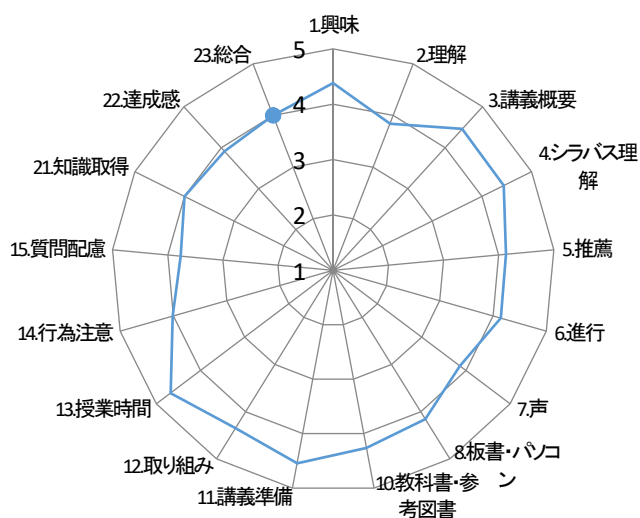
自由記載欄に現れる「朝一」とは、平成21年度教職員会議での推薦により始まり、朝9時始業ととも20分行う神経病学の基本テストだったが、当日の授業範囲とは無関係である。最近まで問題も回答も当日授業の確認テストとは別紙としてきたが、昨年からのプラットフォームに載せてしまったので独立性が薄れたのであろう。今回初めて「朝一」疑問視が噴出した。たかが20分とはいえ3本柱の1に数えてきた小職は残念である。とはいえ「朝一とか小テストとか実践問題とか授業中にやらなければいけないことが多くて、授業内容に集中できなかったです」は私自身が改変の度、実感していることで、答えをどの欄に記入すべきかプリントが複雑怪奇になったことは否めない。「朝一」は廃止します。スライドとプリントはさらに明解にします。小テストの配置を工夫します。拡声装置を多用します。

◆集計データ結果について

レーダーチャートの評価が4を切るものが、2「理解」、7「声」、15「質問配慮」、22「達成感」であった。精神医学は毎日の生活において必ずしも馴染みのあるものではなく、その診断学や治療論においては他の医療分野とも特徴を異にする。そのため、「理解」や「達成感」の評価が低かったのではないかと推察する。一方、質問16～20で示された学生側の取り組みを見ると、予習・復習時間、特に復習時間の短さを指摘することができる。授業を受けたその日の内に、教科書をもう一度読むなどして知識を確実なものにしてほしい。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

授業は、概ね分かりやすかったという意見が多かった。しかし、5人の講師による授業であり、授業のやり方、声の大きさ等に差があったという意見もみられた。これについては、講師間で連絡を密にするなどして改善を検討したい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、16～20学生の満足度、21～23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

今回の講義では、精神医学特有の症候学、診断学、治療論について理解を促すことを心がけてきた。この点については、今後も努力をしていきたい。学生諸君には、その効果を上げるためにも是非とも協力をお願いしたい。予習、復習にもう少し時間をとって、疑問点、理解のしづらいところを授業中、あるいは授業後に質問してほしい。そこでのディスカッションそれ自体が、精神医学の更なる理解に繋がるものと期待している。というのも、精神医学は人間同士のコミュニケーション、相互理解に基づくものであり、こういった双方向性の学習こそが重要だと考えるからである。

科目名

34.小児科学

担当教員

杉山 成司

出席者数

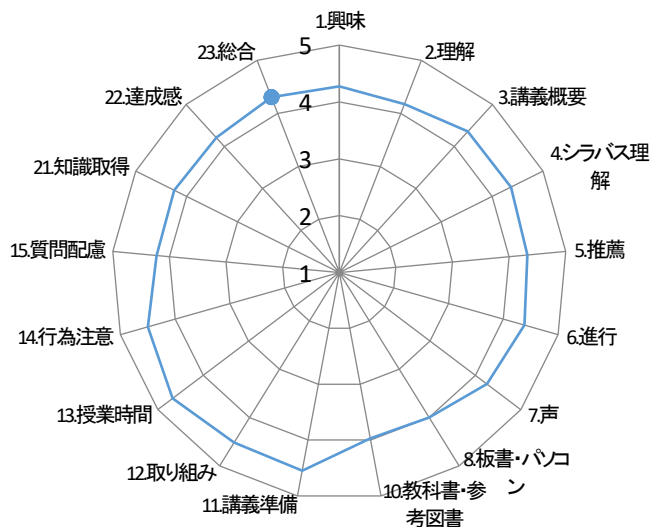
62 名

◆集計データ結果について

小児科学については、国試の出題が比較的少ないあるいはやや偏った傾向もあり、適格な設問は限られている印象がある。しかし、PT、OTにとって障害のある子どもを含め、子どもに接する機会は少なくなく、両親もわが子に対して適切な接し方を学んだ医療人を切望している。そこで、出生前小児科学、新生児学、感染症、奇形症候群、先天性代謝疾患、小児神経学、小児内分泌学、小児栄養学・水・電解質など、小児医療における基本病態ともいべき医学知識の習得は必須である。さらに本講座では、学生の将来を見据えて少し踏み込んだ内容でも講義を行っている。学生もそれに少しでも反応するならば、この講義は“成功”と言える。集計データではそれを感じる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

学生からはよく「教科書」をもっと使用してほしいとの要望があるが、本学で用いるプリントは、より理解を得やすいよう多くの書籍、資料を活用して作成しており、必ずしも難しいものではない。「プリントは理解しやすい」との評価も得ている。一方で、教科書の重要性は縷々説いており、自分に合った活用を積極的に心掛けてほしい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

現在使用の講義室は前後に長く、見やすさ、聴きやすさなどの点で一定の制約を受けていることは確かである。しかし、それで言い逃れするのではなく、勉学への熱意、希望を持つ者は、より前の席で受講するなり、授業中の私語を慎むなり、自らのさまざまな工夫、要望を期待したい。

科目名

35.医療安全学・救急医学

担当教員

舟橋 啓臣

出席者数

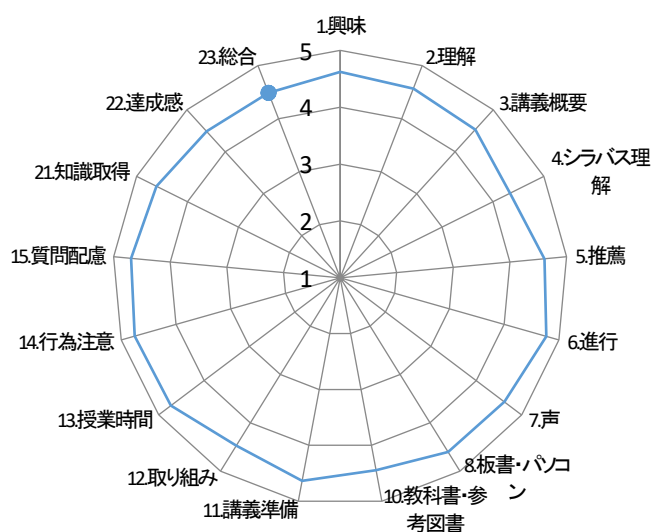
74 名

◆集計データ結果について

学生の評価はまあまあだったと思える。この講義を始めてすでに8年になるが、毎年、テスト結果を参照しながら内容をマイナーチェンジして改善を尽くしてきた。講義前約30分の雑談的に話しているものも、少しずつ変えてきているものの、講義以外で伝えたいことが山ほどあり、本音を言えば講義の時間と入れ替えたいくらいである。政治・経済問題についての常識、日本文学・古典の紐解き、優しい心の持ち方・・・など、昨今の若者に足りない常識とも言えるものを、彼らの心に届くようにゆっくりと丁寧に伝えられる時間があればよいのにと常々感じている。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自分で毎年重ねている工夫や改善が学生に伝わっていると感じた。講義では、できる限り実体験をもとに医療安全や救急の説明をしている。キーポイントは自分で作成したプリントにして毎回配布しており、それでもって出欠をとる代わりにしている。学生もそのやり方に違和感はないようであり、自由記載にも何も触れられていない。記載が多かったのは、講義前の話が良かった！と感じてくれたこと、毎回プリントを配ったこと、講義の進め方なども良かった、とする内容であった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

自分では毎年工夫と改善を重ね、学生にとって分かりやすく取り組みやすい内容にマイナーチェンジしてきており、これからは同じスタンスでやっていけば良いと感じた。質問や予習は今の講義方法ではほぼ無理であるが、復習をしてもらえば講義をする方にしてもらえばそれで満足である。もともと国家試験にはほとんど縁のない科目であるが、だからこそ何とか興味をもって話を聞いてくれるように工夫を重ねていくつもりである。医療人として何が必要・大切であるかを知らしめたいと常々強く感じている。

科目名

36.リハビリテーション概論

担当教員

鳥居 昭久

出席者数

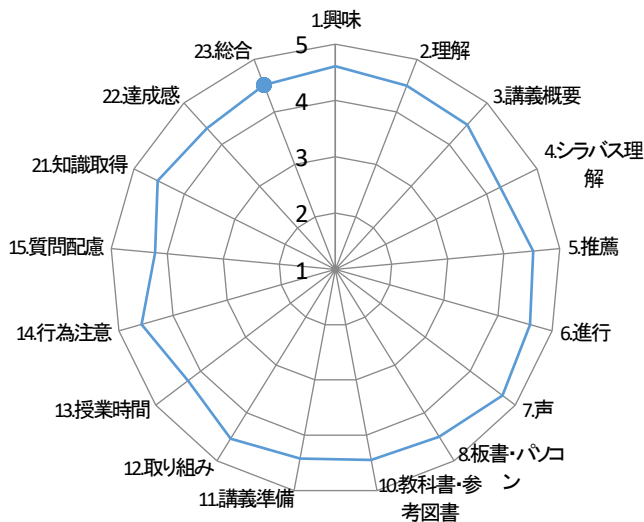
74 名

◆集計データ結果について

全体的な点数としては概ね及第点であろうと感じる。時間的な配分について若干の変更などがあり、やや点数が低い印象があるが、その他の点ではバランスはとれていると感じる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

リハビリテーションの概念、基本事項などについての理解を促すことはできたと感じる。また、医療人としての取り組み方や、リハビリテーションの理念などについて教科書以上の話をしていたつもりである。現在の若者が経験しづらい内容を含めて話題を提供した。講義内容に結びつけられない学生にとっては雑談と感じたかもしれないが、その点が残念でならない。医療人としての話や倫理的な話、そして、歴史的な話などをもっと多く取り入れて、学生たちにいろいろな側面で考えてもらいたいと思っている。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

基本的な講義内容、進行方法などについては、概ね現在の形を継続していこうと考えている。

講義内容に対して、当該科目の時間数が少なく、実際には実例を多く用いたグループディスカッションや、障がい体験などを取り入れたいと思っているが、現状では難しい。

◆集計データ結果について

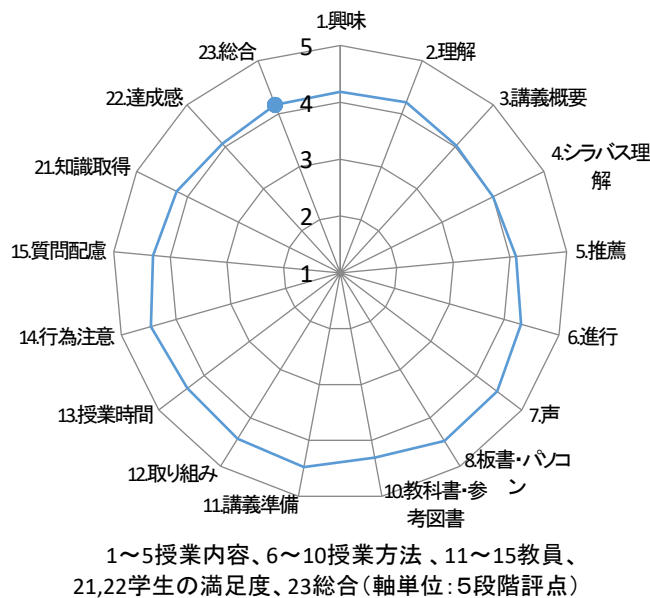
全体としてはバランスが取れていると思われる。予習、復習は特に課題を出しているわけではないので、時間が短いか、もしくは全くしていない学生が多いようである。しかし、本講義の内容は、今後医療人として真剣に取り組むべき内容である。その点では、大変残念な結果と言わざるを得ない。講義の受講態度などを振り返っても、自己学習の少なさが如実に表れてたと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

ある程度、予想はしていたが、大変残念な記載が少なくない。最終試験などを実施しない科目であり、受講時に各自がおおらかな気持ちで、しかし、真剣に取り組んで欲しいという願いがあったが、残念ながら学生には十分に伝わっていないことが計り知れた。

この講義は、医療人としての倫理的態度を客観的に検証し、自らが医療人として道徳的、倫理的に配慮でき、医療人としての相応しい素養を身に付けることを目的としている。しかし、この時間内でそれを十分に涵養することが出来なかったと思われた。一部の学生は、この講義の重要性を感じ、自らが医療人としてどう取り組むかを考えることができたとは思うことが推察されるが、そのことが唯一の救いであろうと思われた。

この講義は、試験などを実施せず、学生を追い立てるような課題は課していなかったが、この講義で聞いたことや見たことを自らの医療人としての経験の中で思い出されることを期待している。



◆今後の改善に向けて

この講義を通して、本学のディプロマポリシーの一つである「慈しみの心」を備え持ち、医療人としての倫理的素養が十分である卒業生を輩出することを目標としている。しかし、現状では、時間的にも限界があると思われる。一部の学生にしか、その効果は無く、一方で残念ながら、医療人として疑問を感じるような取り組み方で卒業してしまった者も少なくないと感じる。この点は教育としての限界であると感じる。

対象となる学生の知的レベルが低いのか、もしくは、3年間で、そこまでのレベルに向上させることが出来なかったためかは不明である。しかし、この講義そのものの存在価値を検証し、内容の工夫や時間数の検証、試験などの実施を検討すべきであろうと思われる。理学療法士、作業療法士の専門知識を持っていても、医療人としての基本的な倫理的素養が低い学生を卒業させることに疑問を感じるが、それを防ぐためにもこの講義において厳しい姿勢で教育に当たりたいと考える。

科目名

38.社会福祉学

担当教員

加藤 良子

出席者数

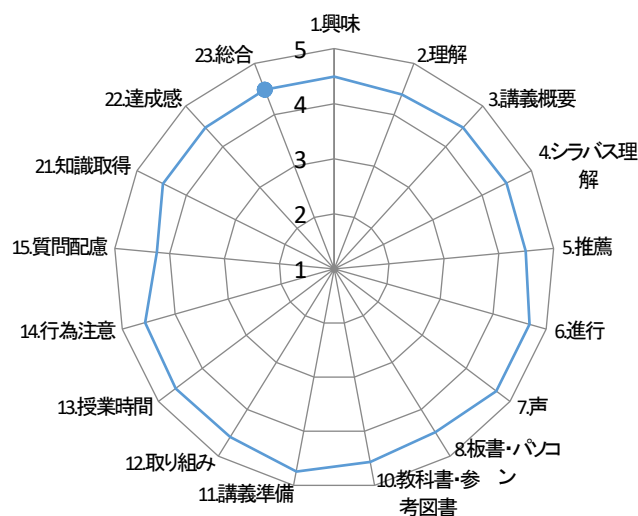
51 名

◆集計データ結果について

授業内容に対して「興味深い」「理解しやすい」は4.4～4.5、「後輩への推薦」4.5、「知識習得」「学習に達成感」4.5と概ね社会福祉学を学ぶことの意義は伝えられたと思われる。「質問配慮」が4.2となっているが毎回の振り返りシートで質問をしている学生がいたので、毎回次の講義時に解説を行ってきた。学生側の学習する姿勢には一定程度前向きの学生がいた結果であると思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

今まで詳しく社会福祉分野の学習を経験することなかった中で、この講義で、ある程度理解ができるようになった事を伺える記述が多くあった。具体的な事例を用いて解説したことやDVDによる実際の映像を用いたことが興味関心や近い将来の学生自身が使う社会保障・社会福祉制度をイメージできるようになったと思う。また、「ニュースを気にするようになった」という記述があったが、これは社会に関心を向けていく契機になったと評価できるものだと思う。制度と実際の生活を結びつけられるような講義内容を意識して行なったので、その点が評価されたと思われる。毎回の「振り返り問題」が学習の手助けになったことも、複数の記述があった。その反面、「資料が多い」ことをポジティブに捉えられる学生とネガティブに捉える学生がいた。また、教科書を用いつつ、プラス資料を使用してきたが、「もっと教科書を活用してほしい」という記述もあった。この点は講義内で説明していたものの、各自が予習・復習するときに学生が活用して欲しいと思う。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

今後も、社会福祉についてわかりやすく解説することに意識して講義を行うことが課題である。今年度でこの講義担当を終了するため、次の教員へ申し送っていききたい。

科目名

39.障害支援とアシスタンスドッグ

担当教員

有馬 もと

出席者数

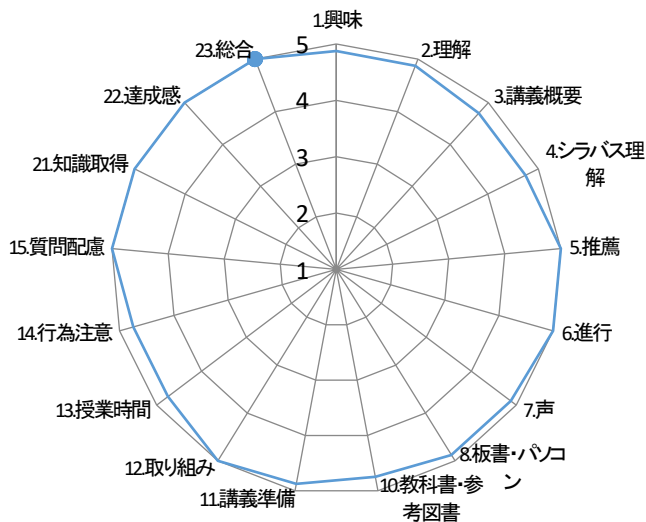
8名

◆集計データ結果について

理学療法、作業療法という分野からは縁遠く考えられがちな「聴導犬」「介助犬」についての授業のため、関心は高いが当初は補助犬に関する知識や関心が低いのが当然だと考えられる。しかし、2日間の授業を通じて、学生の専門分野との共通性、将来での関係性などへの理解が得られたと考えられる、学生の満足度では全体的に非常に高い評価を得られた。特に、訓練の実践やユーザーとしての体験など、共感を得られた。2日間に集約された授業とレポート提出のため、予習や復習といった工程がほとんどなく、その日にレポートのポイントとなる点を強調してご指導した。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

学生の実践と体験を多く導入した授業とした結果、全体的に評価が良かったが、学生の一人からさらにポイントを絞った授業の提案があった。授業中にレポートのポイントを繰り返し説明したが、さらにポイントを絞って説明したい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

授業中にレポートのポイントを何回か繰り返し講義したが、学生の一人からさらにポイントを絞った授業の提案があった。今後、さらにレポートのポイントを繰り返し解説する必要性を感じた。

また、体験と訓練に関する試行など学生本位の授業を通じて、補助犬への理解につなげていきたい。

科目名

40.障がい者スポーツ演習

担当教員

鳥居 昭久

加藤 真弓

出席者数

25 名

◆集計データ結果について

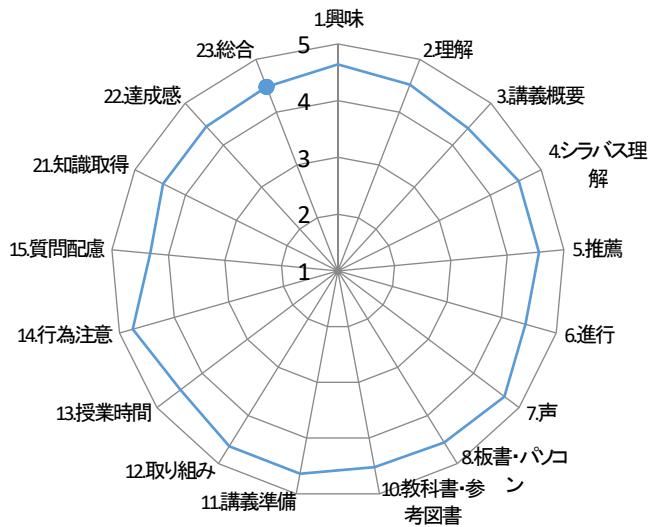
全体としては、集計データ、レーダーチャートなどから、概ねバランスがとれているように感じる。しかし、興味他で点数が低い学生がいたことは驚きである。この科目は、選択科目であり、また専門性の高い科目である。したがって、履修する段階で興味が低い者は受講すべきではないと感じてしまう。一方、受けてみたが興味を持てなかったとするならば、担当講師として真摯に反省したい。

講義への取り組みや、自己学習についても積極的な姿勢が欲しいと感じている。理学療法士や作業療法士としての専門性に加えて、プラスアルファの力を付けるように常日頃から学生には伝えている。その点でも、障がい者スポーツに関する知識技能は理学療法士や作業療法士が関われる分野として重要なものと考えられ、せつかくの機会にも関わらず消極的な取り組みであったことは残念でならない。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

毎度のことながら、時間変更についての意見が多い。他の科目との関係で、この科目は変更が多い。学生には大変迷惑をかけていることは承知しているが、学校全体の問題として対処したい。

そのほか、概ね良好な意見が寄せられているようで安心した。講師としては、もう少し多くの時間を使って、具体的に動けるレベルまでの教育を実施していけると理想的であると感じている。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合 (軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

時間設定など、学生の負担が少ない形で工夫したい。また、実際の技術的な効果を上げる方策を検討したい。

科目名

41.理学療法概論

担当教員

加藤 真弓

宮津 真寿美

出席者数

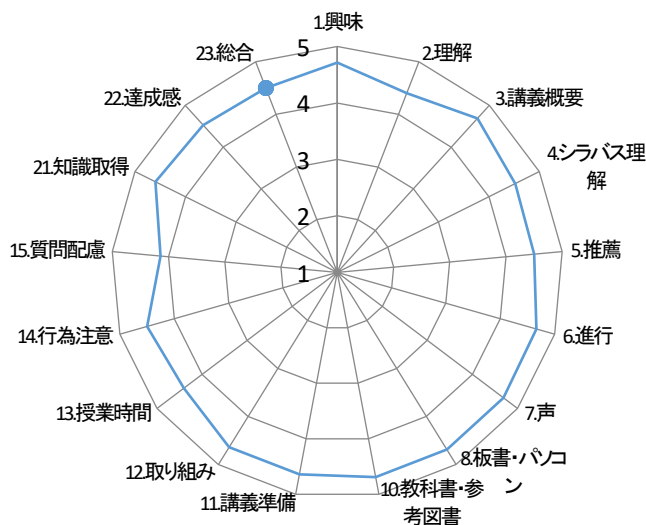
42 名

◆集計データ結果について

評価点の平均は4点台で概ね良好であったと考える。質問項目の中では、15「質問への配慮」が4.1と低く、17「理解できない点を質問したか」では約80%がしていないと回答した。授業時間中には質問の有無を問うていたが、質問はほとんどなかった。また、授業後の質問も同様であった。その一方で、16「熱心に取り組んだか」の質問では、取り組んだ、どちらかといえば取り組んだが約90%を占めたがこの点に矛盾を感じる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

肯定的な意見が多かった。授業中の学生さんの態度(全員ではないですが、反応がなく座っているだけに映っていた)からは、自由記載にあるような感想を持っているとは想像していなかった。結果としては良くなかった小テストであるが、小テストがあることで勉強ができたという前向きな意見がいくつかあった。小テストにおいて不正があったことが記載されていたが、その時に気が付くことができなかったことは、真面目に取り組んでいる学生に対し大変申し訳なく思う。一方で、そのような学生が医療の道に進もうとしていることは言語道断であるため、十分に注意を払い対応していくとともに、そのような学生に対しては厳重に処分する。また、疑いを含めてそのような行為に気がついた学生は、申し出て欲しい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

質問をしやすい環境づくりと振り返る時間を設けたいと考える。小テストを実施する際は、見回りの強化や環境の改善に取り組む。

科目名

理学療法研究法

担当教員

鳥居 昭久 加藤 真弓 宮津 真寿美 木村 菜穂子 松村 仁実
清島 大資 臼井 晴信 齊藤 誠

出席者数

38 名

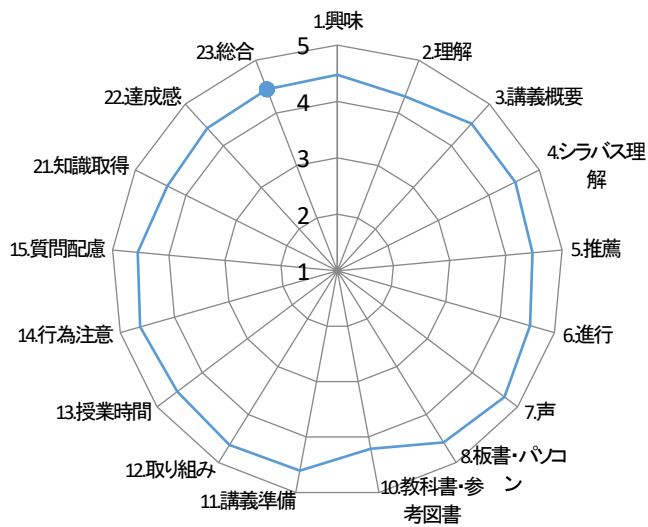
◆集計データ結果について

総合点が平均4.4点、また、各質問項目においても4点以上であり、学生の評価は良好である。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

本科目は、理学療法研究概論、基礎統計学、研究倫理を学修する講義と、指導教員の元で研究計画の立案までの過程を学修する演習がある。

講義の部分では、「分かりやすかった」というコメントが多い。研究倫理の講義を早く行って欲しかった、という意見がある。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

来年度は、研究倫理の時期を早めたいと思う。

科目名

43.臨床運動学(PT)

担当教員

木村 菜穂子

松村 仁実

出席者数

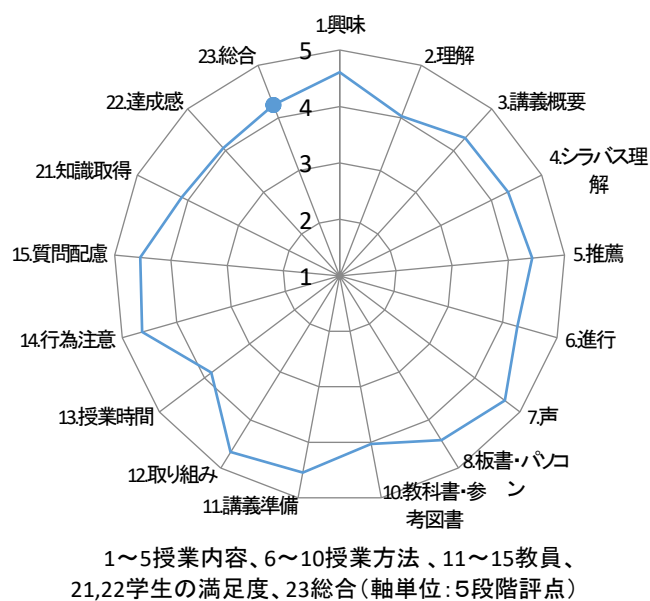
33 名

◆集計データ結果について

おおむね4点台という結果であった。その中で授業時間が3.8点と特に低かった。動作を観察や分析することに初めて取り組む点を見ると、観察動作を限って行っているが、十分な時間を確保できなかったためと考えられる。次いで、理解、達成感、教科書については4.0点台と低い得点であった。限られた時間の中で理解できたという意識を持つことが難しかったと思われる。また、基本的な事項についてはプリントにまとめて配布し、ほかは実技形式で進化した点で教科書の得点も高くはなかったと考える。オリエンテーションで、臨床運動学の必要性などを説明をしたが、学生が目標を持ち、熱心に取り組めていないという結果をみると、到達目標の理解が不十分だったことが考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

グループワークによって授業を展開したことに対して、意見交換や発表することなど肯定的な意見が多かった。また、質問しやすかったとの記載もあり、グループワークの間に教員が巡回していることで対応できたと考えられる。授業の内容の重要性や必要性を感じた記載も多く見られたが、内容の難しさから授業時間の短さや授業の延長に対する記載も見られた。時間的な制約の中で、必要に応じ授業時間を延長してしまうことも何度かあったことは改善すべき事項と考える。一方で答えを求めたり、資料としてほしいなどの意見もあり、臨床的思考を十分に意識させることにつなげられなかったと考えられる記載も多く見られた。



◆今後の改善に向けて

まずは、学生が授業に対して目標を持ち熱心に取り組むことができるように、十分なオリエンテーションが必要だと考える。今回は初回の授業で、一緒に考えながら進めた。しかし、毎回の授業においても要点を繰り返すことなどが必要と考えられる。目標の確認ができることで達成しやすくなると考えられる。グループワークによる進行は、観察や分析において意見交換、情報共有、新たな視点を持つなど有効であると考える、今後も継続していきたい。授業時間については、観察する動作をさらに絞るか、あるいは着目部分を集約するなどの工夫が考えられる。または着目ポイントなどの提示することで時間短縮の改善が見込める。しかし、グループワークの良さを半減させない工夫が必要であり、考える部分と提示する部分をより詳細に詰めておくなどが考えられる。

科目名

44.運動療法総論

担当教員

松村 仁実

出席者数

36 名

◆集計データ結果について

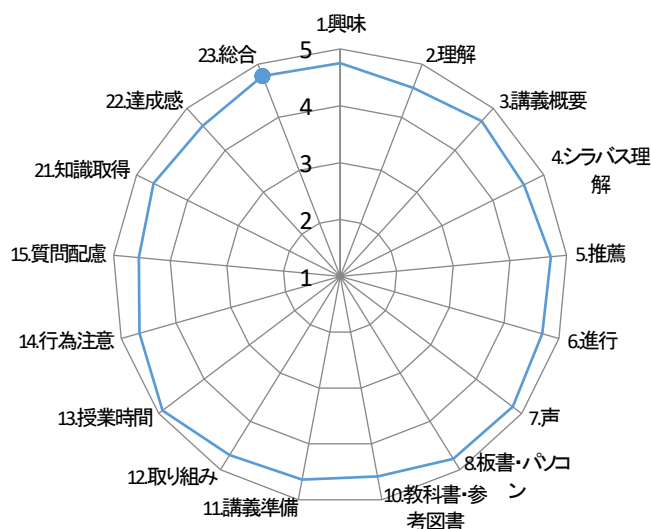
おおむね4.5点以上であり、バランスの良い授業展開ができていたと考える。学生の多くは熱心に取り組んでいたが、質問に関しては約半数がしていなかった。また、予習や復習が全くない学生が10名前後見受けられ、授業に向けた取り組み姿勢の点で改善すべき項目がある。

今年度は、毎回の授業終了時に該当時間の内容を確認する小テストを実施した。授業時間での熱心さにつながる一方、復習に時間を割かない学生が出た要因の1つと考えられる。しかし、確認テストと小テストの両方を同一時間に実施するとなると90分の授業時間を考えると大幅に削られることになる可能性があり現実的ではない。小テストは効果的であると考えるが方法の検討が課題となる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

授業時間での確認の小テストの実施についての意見が多数見られた。難しいという意見や理解度の確認ができたという内容までであった。授業内容を踏まえて確認や応用するような問題を作成したが、応用部分が難しいと感じたと思われる。小テスト実施の前に振り返りの時間を設けることもあったが、その中で覚えるのが大変だったとの意見も見られた。授業で理解するというよりは、まとめてから覚えることが大事という認識である学生もいることがわかる。内容によって覚えることと理解すること両方があるため、覚えることは覚え、理解することは理解するという使い分けを含めて丁寧に説明する必要がある。

ほかには、わかりやすいとの意見もあげられていた。基本的な部分の説明に時間を割いた点が評価されていると考える。理解が速い学生にとっても満足できるような内容を含むことが課題でもある。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

意見が多くあった小テストではあるが、実施自体はよかった。どのタイミングで実施するとより効果的であるか検討課題である。授業の効果を把握するには、その時間内での確認テストとして実施し、復習時間を設け理解を促すことを考えると、次回以降での実施が効果的であり一長一短ある。小テストの実施は、時間内で理解を把握し、復習につなげるよう促し、次回以降の復習確認の小テストを実施することが効果的であるが、時間的に難しい。ほかの方法としては、小テストとは別に、調べもの課題などを設定し、自己学習を促すことも取り入れることでより一層の理解につなげていきたい。

わかりやすいとの意見もあったが、予習復習を実施しない学生も多い印象がある。知識の定着や理解を進めるためにも調べもの課題などの提示は効果的であると考え

◆集計データ結果について

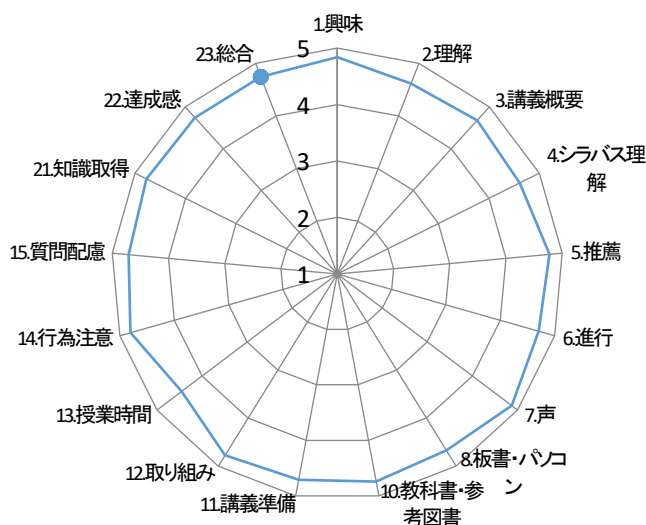
集計されたデータから、講義についてはすべての項目で4.5以上の回答でしたので、全体的には大きな問題はなかったかと思われまます。

毎回の講義で小テストを実施し、またシラバスにも各講義回に行うべき予習内容を記載した上で、予習してあることを前提とした講義内容、進行を意識したため、予習に対して多くの学生がしっかりと取り組んでおられたようです。また、実施内容もかなりボリュームがあるため、講義内での取り組みも十分にできていたという自己評価が多かったように感じます。ただ、復習は予習ほど時間を割いていない人もいたようで、結果として試験前にあわてた人も多かったように思います。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載では「分かりやすかった」など、思ったよりも良好な記載内容が多く、若干予想外でした。また、「臨床に必要な知識や技術が学べてよかった」などの記載から、実際の理学療法士の仕事内容に直結する講義内容に、かなり興味を持っていただけたのだと感じました。その思いがもう少し、講義中の行動に反映されると、より実りの多い講義になったのではないかと思います。

実技中心の内容であるため、できる限り多くの教員が関わり、その都度 実施→修正→再確認といったサイクルで学習できるように行っていますが、それらが「よかった」という評価に現れている反面、教員間での指示や修正のばらつきもあり、「答えが分からない」という記載もみられました。答えは1つではないことも多く、また条件や場合によって答えが異なる場合もあることは、講義中にも説明しましたが、今後、評価の対象となる患者さんは、一人ひとり異なる状態です。「単純に覚える」だけでは対応できないこと、自ら「考える」ことに結び付けることの重要性をさらに伝えていく必要があると感じます。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

自由記載にもあった「難しかった」「時間が足りない」などに対しては、講義内容や時間を変更することは困難です。ただ、授業時間が不足していると感じるのであれば、試験前だけでなく、復習の時間をしっかりととり、その中で教員にアドバイスを求めるなどの行動ができるよう、学生に働きかけていく必要があると感じています。

また、「小テストの勉強をきちんとしておくべきであった」との記載も見られました。正確な技術は、正しい理解が必須です。さらに毎回少しずつ取り組むことが重要になってきますので、それらがわかっただけのような働きかけをさらに重ねていかなければならないと思います。

技術の習得には、正しい理解と反復練習がとても重要です。試験に合格することだけを目標とせず、またこれらの評価方法を学ぶ中で、患者さんに対する接遇や気遣いを考えるきっかけになるような講義を心がけていきたいと思っています。

科目名

46.検査測定法実習

担当教員

木村 菜穂子

加藤 真弓

山田 南欧美

齊藤 誠

出席者数

39 名

◆集計データ結果について

検査測定法と同様、データの的には大きな問題はなかったようです。ただ、学生の一部には予習・復習を「まったく行っていない」と自己評価している人もあり、小テストの実施や予習を前提とした講義の組み立てを行っていたため、その理由が不明です。予習・復習の重要性は、講義の開始時や、講義中にも何度も皆さんに伝えたつもりでいましたが、理解していただけなかった方もいたようで、大変残念に思います。

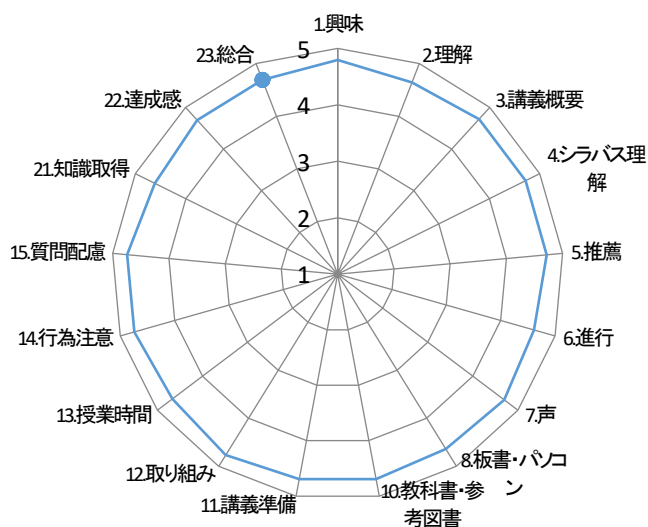
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

1年生の前期ではほとんどないため、「臨床的な内容」と捕らえ、興味を持って取り組んでいただけた様子が自由記載から伝わってきました。

また、例年同様の記載がありますが、「教員による指導内容の差」に関しては、実際に臨床で用いられる技術として、多少の個人差があるのは事実です。ですが、そういう場合にはできる限り統一した見解を提示できるよう、教員間で協議することを心がけていますので、その都度その旨を伝えていただきたいと思います。もう一点、「まずやり方を教えて欲しい」というご意見ですが、テキストを見れば、おおまかな実施方法は分かると考えています。ただし、それだけでは臨床で患者さんの評価に用いることは不可能だということも分かっています。そのため、初回講義で説明したように「予習により疑問点を明確にする→講義中に疑問点を解消する→復習によって繰り返し練習する」というサイクルを重要視しています。講義中にその時間を確保するためには、全ての手技を1つずつ丁寧に説明する、ということ是不可能ですが、質問に対しては全ての教員が理解できるまで対応するつもりで取り組んでいます。

◆今後の改善に向けて

自由記載に「質問しやすい環境であった」という意見が多く見られました。ただし、集計データで「講義中に質問したか」との問いに対し、教名ではありますが「質問していない」と答えた学生が存在することから、この環境をうまく利用できたかどうかは学生により異なる可能性が高いということになります。「質問していない」と答えた学生の皆さんにとって、「質問しづらい環境」であったのか、「意欲的に取り組めなかった」のかはこのデータだけでは判断できませんが、何らかの対策が必要な可能性はあるかと考えています。しかし、学習内容はいつでも「誰か」から与えられるものではありません。大学生として、「自ら学ぶ」ということをもう一歩意識していただきたいと思います。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

科目名

47.理学療法評価法

担当教員

臼井 晴信

出席者数

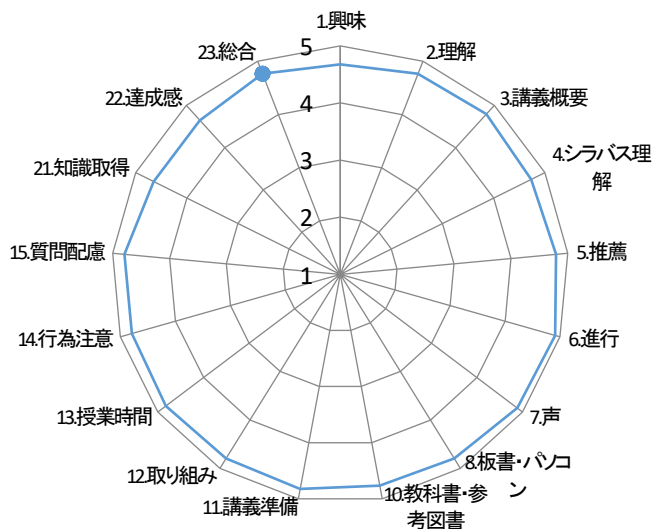
34 名

◆集計データ結果について

本科目はグループワークを中心に臨床での理学療法士像をイメージできるような構成を心掛けた。グループワークのテーマや課題などの仕掛け、振り返りのレポートとフィードバックなどを密に準備して講義を行った。その結果、授業評価では授業の進行、講義準備などの項目をはじめ高い評価であった。また、授業中の学生の様子も熱心に取り組んでおり、授業評価でも熱心に取り組んだという学生が多かったことが印象的であった。理学療法士の臨床像を形成する上で重要な科目であるが、予習・復習に費やす時間が少ないことは気になる点であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

グループワークを中心に授業を行ったため様々な意見があると思ったが、グループワークが良かったという意見が多かった。特に「臨床のイメージがついた」「他の人の意見が聞けて考える機会になった」という点は学習効果として目標としていた点であったため、授業構成が適切であったと考える。グループワークに好意的な意見が多かった理由は、ディスカッションを行うことに積極的な学年であったことも考えられる。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

今後も今年度の講義形態を続けていきたいと考えている。臨床現場でのイメージをつけられるように常に情報は充進していく。グループワークについては、個人や学年による差もあるため、効果的な学習が行えるように臨機応変に関わり方や仕掛け方を修正する。

科目名

48.理学療法評価法実習

担当教員

臼井 晴信

松村 仁実

齊藤 誠

出席者数

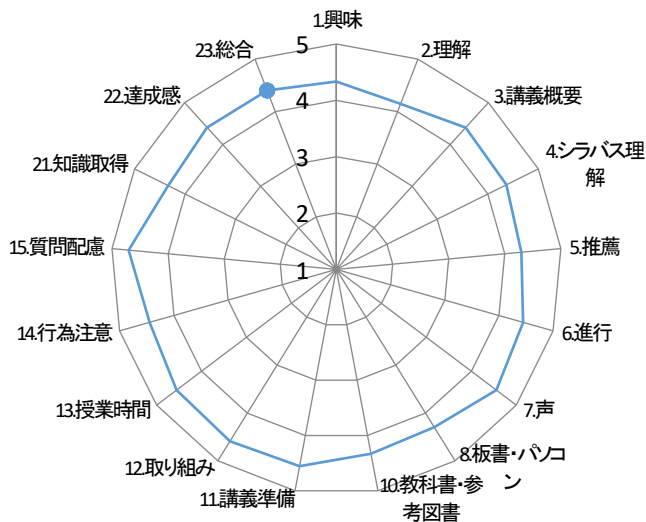
27 名

◆集計データ結果について

どの項目も平均して4.0-4.5点の間であった。授業内容の理解の項目が最も点数が低かった。グループワークを主体とした授業構成であったため、理解度に個人差があったものと思われる。本科目では授業中、授業時間が含まれて質問に来る学生が多かった。しかし、一度も質問していないという学生もいた。授業評価アンケートでは質問への配慮は高い点数がついていたので、学生自身の授業への取り組み方も個人差を大きくした要因であると思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

グループワークによる授業形式は、他の学生の意見を聞いたりできて勉強になったという意見が多かった。個人差は出てしまうが、学生間の相互作用により得られることも多いと思われる。3つの症例のうち、各グループ1つを発表するという形式であった。その点について各症例での違いを指摘する意見があった。各グループへの伝達事項や難易度などにあまり差が出ないような工夫を今後行うべきである。試験が実技なのに実技の練習がないという批判的意見もあった。本科目は臨床実習前の最後の授業であり、知識、技能、態度全てを含めた総復習の意味合いもある。そのため試験ではそれらすべての要素を評価される。以上のことはシラバスにも明記されているため上記意見は批判には値しないが、今後は以上のことを事前に念を入れて説明することとする。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

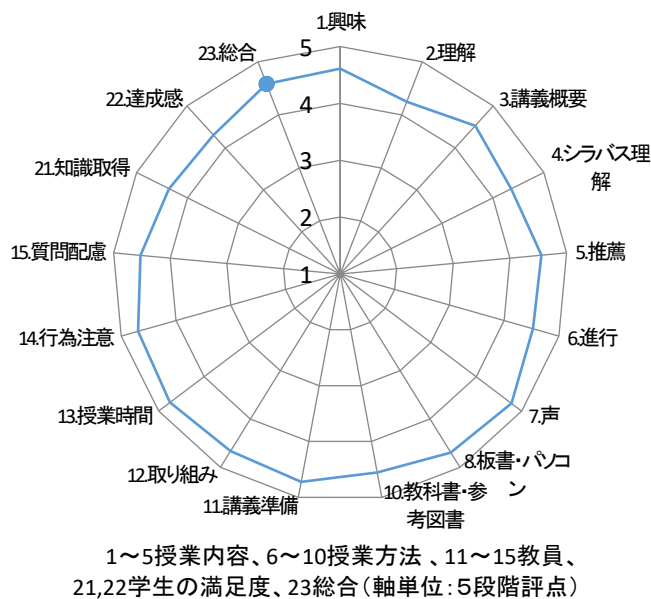
グループワークによる講義のため、関わり方に違いが生まれ、理解や習得にも個人差が大きくなる。本年度は、レポートに関しての個人差をできるだけ減らして臨床実習に臨めるように個別フィードバックの機会を充実させた。今後、臨床実習の形態や求められるものも変化していく。それらに合わせて授業構成を柔軟に変更し、対応していきたい。その上でできる限りグループ間や個人間の差が出ないように担当教員を中心に連携して取り組みたいと考える。

◆集計データ結果について

おおむね4.5点を超える点数であり、授業全体として大きな問題はなかったと考えられる。理解の部分での点数は若干低い結果となった。標本や患者像などなるべく具体的な例を提示することで学生の理解につながった反面、授業でのスライド、配布資料の見にくさ、話すスピードが十分でなかった部分があり、理解に影響した可能性が考えられる。毎回、小テストを実施したため、復習する機会を作り理解を高める取り組みを行った。しかし、理解につながる学生とそうではない学生がいたと考えられる。授業初回に目標の確認を行ったが、目的意識もなく受身的な学生が少なくないことは残念である。そのため、質問項目16～20の結果になっていると考える。この点について、初回のみではなく、授業過程の中で目標の再確認や自己点検ができるような声掛けが必要なかもしれない。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

具体例を多く用いたことで理解が深まったとの記載が多かった。多くの具体例を用いることで、概念の枠組みを理解することにつながれる可能性が考えられた。小テストの実施が、復習の機会になった点、定期的に学習する点など肯定的な記載が多く見られた。課題としての提示ではなかったが、自身で課題を見つけ復習する機会になった点は評価できる。小テストの返却を希望する記載もあった。振り返りや見直しに役立てる手段として活用できることがうかがえる。スライドや資料については、改善を求める記述がみられた。細かい図や白黒印刷による見にくさなどが考えられる。説明のポイントが資料からでは判断しづらく、知識の整理につながらなかったと考えられる。



◆今後の改善に向けて

具体例や標本など、見たりイメージできると理解につながりやすいため、その点は継続していきたい。より理解を深めることが学生の達成感の上昇につながると考えられる。そのため、今後も小テストを活用し、復習の機会としていきたい。小テストの内容も工夫し、理解すべきポイントにつながるような問題の作成が課題である。また、小テストを返却することで知識の整理と定着に生かせると考えられる。配布資料やスライドについては、図を大きくし視覚に訴えることが重要である。今後の資料作成において学生の手元にある状態を意識し作成する必要がある。授業での話すスピードは、学生の理解の様子を把握し、随時確認を入れることで、スピードの調節ができると考えられる。さらに、目標確認と達成状況の確認を随時行うことで学生の自己点検を促していきたいと考える。

科目名

50.中枢神経系障害理学療法治療学実習

担当教員

松村 仁実

加藤 真弓

出席者数

35 名

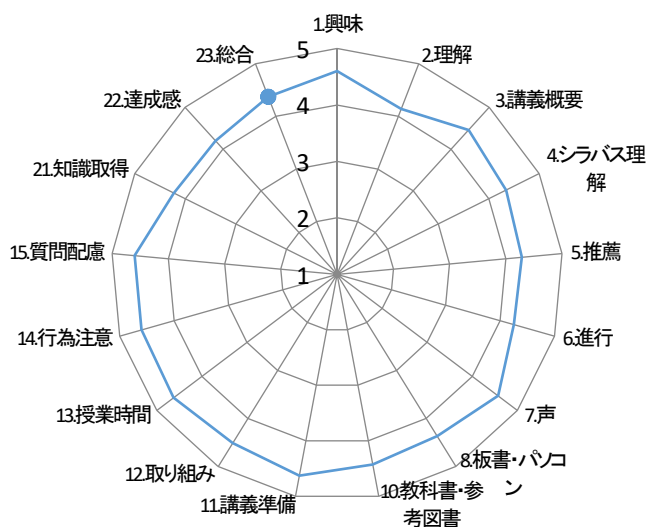
◆集計データ結果について

4点台と概ね良好と考えられる。「興味」の項目の点数が高めだった一方、「理解」、「達成感」、「知識取得」の項目は低い点数であった。興味は持ちつつも達成感にはつながらない学生がいたと考えられる。また、「教員」にかかわる複数の項目では、比較的高い点数であり、科目の重要性などは伝わっていると思われる。しかし、授業内容や授業方法の部分で若干低めの点数が並んでおり、内容や方法を改善する余地があり、「理解」、「達成感」、「知識取得」での効果を上げるために必要な部分であると考えられる。

学生の取り組みは、多くの学生が目標を意識し、質問をするなど熱心に取り組んだと評価している。予習・復習時間については、予習をする学生は6割、復習をする学生8.5割であり、理解をしようとする姿勢が感じられた。ただし、復習をしない学生が1割強いる事実も確認できた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

アクティブラーニングを取り入れ、グループワークを実施している。自由記載をみると、理解を深める方法として活かした学生とそうでない学生（講義や解説を増やしてほしい）がおり、グループワークと講義のバランスや方法の工夫が必要である。実習授業として、実技の体験・習得が必要であるが、体験に理解を深めただけでなく、臨床評価までイメージをつかめた学生がいた点はよかった。実習と講義を同一時間内で実施のため、学習環境の面で使用教室や使用教具において否定的な意見がいくつか見られた。授業の展開上、使用教室は限られるが、今後工夫すべき点である。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合（軸単位：5段階評点）

◆今後の改善に向けて

専門科目であるため、基礎知識の習得が前提となる。基礎科目の復習をしつつも積みあげ知識・技術の習得をする必要があるため、知識の伝達は必要不可欠である。一方、今回はグループワークを取り入れるなどアクティブラーニングも行った。結果としては、全員ではないが、理解が深まった学生もいた。グループワークの方法を工夫することにより、さらに多くの学生が理解し達成感を高めることができると考えられる。そのため、知識の伝達とアクティブラーニングをバランスよく取り入れるための方法を検討する必要がある。

復習をしない学生が2割弱いた。知識の定着には、復習は不可欠であるため、小テストの意義を整理し、学生にもその意義を説明し理解した上で授業に臨むように促す必要がある。

科目名

51.整形外科系障害理学療法治療学

担当教員

齊藤 誠

出席者数

36 名

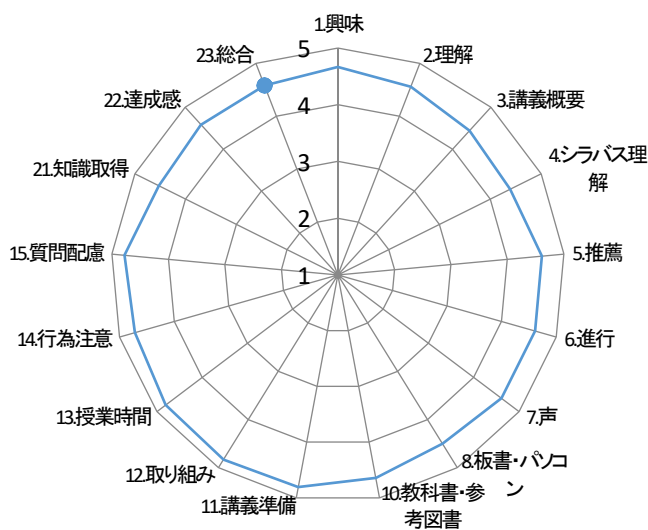
◆集計データ結果について

質問項目 3, 4 以外の項目に関しては平均点が4.5点を超過しており、良好な結果であったと考えている。他の項目と比較して平均点が低かった質問項目 3, 4 に関する自由記載はなく、各講義テーマもシラバスに則ったものであったため、点数が低かった理由はわからなかった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

おおむねポジティブな意見が多かったが、「講義の進みが早い」との指摘が数名から挙がった。毎講義後、記載させているリアクションペーパーにおいても同様の記載が散見されたが、2年後期の整形外科系障害理学療法治療学実習に向けて到達してほしい範囲があるため、講義のペースを変更することは難しい。講義中にも個別に対応するため、質問に来るように促したが、不十分であったと思われる。個別学習や質問に来やすい雰囲気を作るなどの工夫も必要かと思われる。

また、講義時に配布したプリントの量が多いとの指摘も挙がった。メモを取るスペースを多く確保すること、講義全体の流れが把握しやすいようにとの考えで、なるべく配布するようにしたが、今後は配布資料は必要最小限にとどめた方が良いのかもしれない。



1~5授業内容、6~10授業方法、11~15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

予習、復習の時間が「全くない」と回答した者が最も多かった(予習:26名,復習:14名)ことは、反省すべき事柄であると考えている。各講義後にリアクションペーパーを配布し、その日にわからなかったことや疑問に思ったことを記載させた。そして次週の講義開始時に質問について解説するようにしたのだが、学生側の取り組みが全くなければボーっと解説を聞くだけで身にならないと思われる。自由記載ではリアクションペーパーを評価した学生も数名いたが…本当に身になっていたかは疑問である。講義と次週の講義の間に自己学習を促すツールとしてポートフォリオを採用したが、あまり効果的ではなかった様子であるため、次年度は定期的にポートフォリオをチェックし自己学習を促していきたい。今回は学生の理解に重点を置きすぎたように思うので、今後はグループワークや自己学習を通して学問を追求する魅力を少しでも伝えられるような講義展開を目指していきたい。

◆集計データ結果について

全項目において4.3点以上であったため、おおむね良好な結果であったと認識している。

ただし、知識取得や達成感といった項目がやや低評価であった点は反省すべきであると考えている。本講義では、講義後にレポートの提出を求め、添削を行う中で徐々に理学療法評価・治療に関する臨床推論能力を向上させるように取り組んだが、一部の学生は、十分な達成感を得られなかったようである。フィードバックの方法や取り組み方へのアドバイスなどを改善する必要があると感じた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

レポートの提出について途中で変更があったことに若干の不満があがった。基本的にはシラバスに則った評価基準を最初から提示し、基準は変更していない認識であったが、口頭のみでの説明となった部分もあり十分な理解が得られなかった可能性がある。また、レポートの書き方が最後までわからなかったという学生も少数いた。前期の整形外科系障害理学療法学でも反省点として挙げたが、講義時間と自己学習のみでは理解することが難しい学生に対してのフォローをどのように行うかが課題である。

また、講義の進め方がわからない、評価のやり方をもっと教えてほしいなどの意見もあった。整形外科領域に限らず、リハビリテーションの対象となる疾患は多く、講義時間などの兼ね合いから割愛せざるを得ない部分も多いが、デモンストレーションを行うなどイメージしやすい方法で行うなどの対策をとれば良かったと思った。

他の自由記載の内容としては、「整形外科疾患についての理解が得られただけでなく、毎週症例提示の問題をくれたため、実際の臨床のイメージが湧いた」、「自分で統合と解釈していくの、すごく面白かったです」など、高評価と思われる記載も多かった点はうれしく思う。

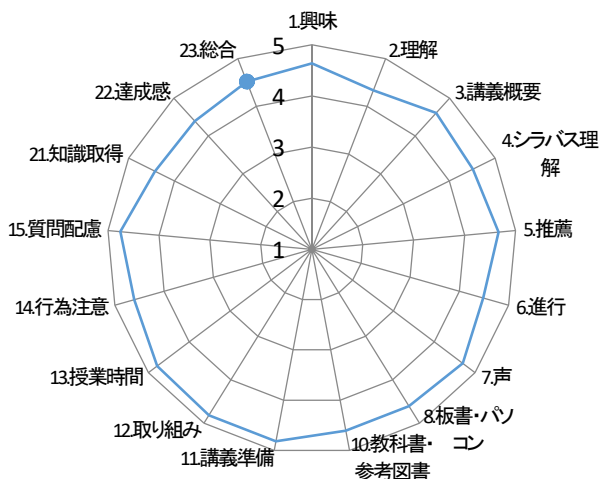
◆今後の改善に向けて

本講義は、講義前に症例を提示し、その症例に必要な評価や治療を考えていくProblem Based Learningの変法ともいわれているCase Based Learning (以下、CBL) の方法を用いて講義を行った。

前期に行った整形外科系障害理学療法治療学では、私が講義時にパワーポイントを用いて内容を説明し、学生は聴講する方法、いわゆる従来型の講義形式を採用した。結果としてはある程度の授業評価を得ることができたが、予習、復習の時間を取らなかつた学生が半数程度存在した。そのため、後期は学生の自己学習時間を増加させることを目的の一つとしてCBLを採用した。結果としては復習に3-5時間程度を費やす学生が最も多い結果となり、全体的な予習、復習時間が増加した。また、ケースの理学療法プログラムの立案をレポート課題として学生に課したため、講義時間内では実技練習や疾患学の復習に時間を割くことができた。

以上よりCBL形式の本講義は、ある程度の成果が認められたと認識している。来年度以降もCBL形式の原則は大きくは変更せずに講義を行っていききたい。

本講義での課題としては、症例を提示する難しさが考えられる。実際の症例を見たことがない学生にとって、文章に記載された症例(ペーパーペイシエント)からイメージを膨らませることは非常に困難であったと考えている。これに関しては実際の臨床現場とは異なるため、限界も多いが、動画や写真など具体的にイメージしやすい資料の作成などを行っていききたい。



1~5授業内容、6~10授業方法、11~15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

科目名

53.内部疾患系障害理学療法治療学

担当教員

臼井 晴信

宮津 真寿美

出席者数

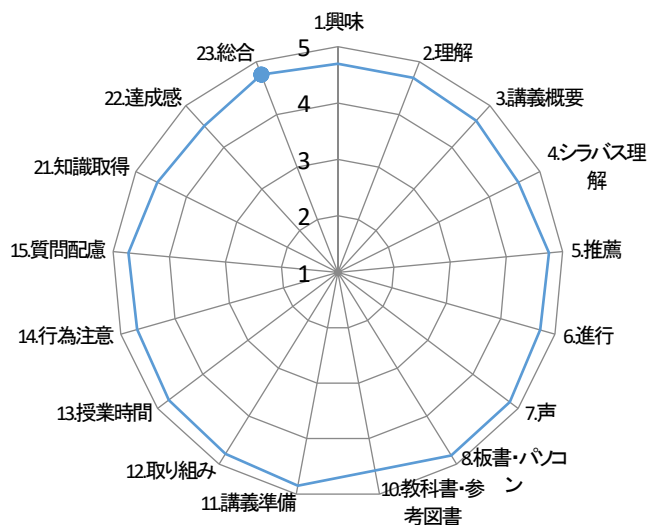
33 名

◆集計データ結果について

全ての項目で4.5を超えており満足度が高い講義だったと思われる。中でも進行や声、資料、準備などの授業構成に関する点では評価が特に高かったため十分準備をして講義を行ったことが伝わっていて安心した。内容は難しく理解度には個人差があったかもしれない。復習には多くの時間を費やした学生が多いが、予習に費やす時間は少なかった。予習を効果的に取り入れることが理解を促すことになるかもしれない。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

分かりやすかったという評価が多かった。基礎的な点を理解せずに応用的な内容は理解できないので、基礎的な点を特にわかりやすく伝えるように工夫した。授業の工夫として、学生が自分で考えながら進められるようにところどころに問題を提起した。自由記載の中には考えながら授業を受けられたという意見があり、講義で狙ったことが実践できており良かった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

授業時間に対して内容が多く、授業の進行が速かったと思われる。学生にじっくり考えながら学んで欲しいため、教員が一方的に話す時間を減らし、自分で考える時間を増やせるように改善したいと思う。

科目名

54.内部疾患系障害理学療法治療学実習

担当教員

臼井 晴信

宮津 真寿美

出席者数

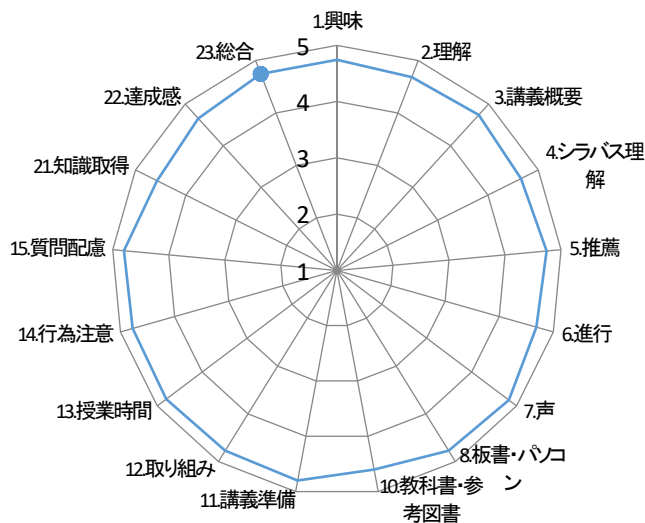
35 名

◆集計データ結果について

内部疾患系障害理学療法治療学と同様に復習時間は確保されているが、予習に時間が割けていないことがわかった。授業評価結果から、講義の内容や構成については概ね満足のものであったと思われるが、自己学習を促すような講義構成の工夫が必要であると考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

本実習では体力向上プログラムとして被験者に対する運動処方を行い、運動を実践しその効果を測定して発表を行った。以上の実習から運動による生理学的変化、対象者の評価結果の解釈と科学的根拠を持った運動処方、患者にあった運動の実践を学修する、考察したことをまとめ他者に分かるように発表するという狙いを狙っていた。学生からのコメントでは、実習や発表によりグループや自分で進んで学ぶことができたという意見が多く、講義の狙いを概ね達成できたと思われる。「被験者をやる気のある人にしてほしかった」とした意見が複数あったが、やる気のない患者に対してどのように運動を実践するかを考えることも実習のうちと考えていたため、少し狙いと外れた意見であった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

実習では多くの狙いをもって課題を設定したが、学生評価や提出されたレポートを見る限り学習目標を満足のいく程度に達成できたと考える。

体力向上プログラムは今年度の新たな取り組みであったが、今後も継続して実践しようと思う。学習の狙いと外れた意見が出た点については、講義中に修正すべきと考える。実習中やレポート課題を通してその都度学生と関りながら修正しようと思う。

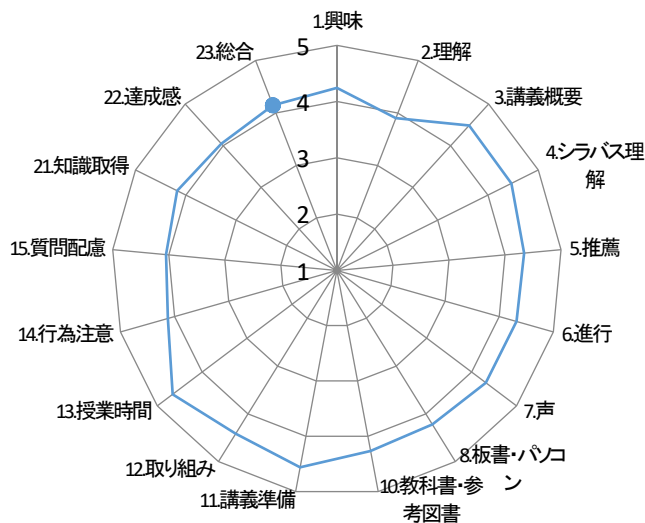
◆集計データ結果について

学生にとって馴染みの少ない小児領域であり、イメージを持ちにくい分野であると思われるが、概ね4前後の評価となっており、興味・関心を持ってもらうことができたと思う。

「理解」「達成感」「質問」の項目ではやや評価が低く、講義内で学生の理解度の確認をし、それに沿った補足等を行うことが必要であったと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

発達過程や治療場面の動画の使用、実際に乳幼児の姿勢を体験することを取り入れた。「動画をみることで実際にイメージしやすかった」「実際の動きをやって学べたのは良かった」との評価につながっているが、「資料に書いてないことを説明しているときに少しわかりにくかった」「スライドがプリントに載っていないのがあったので、全部あった方がわかりやすいと思った。」など、配布資料に関する不満があがっていた。学生にとってイメージを持ちにくい分野であり、知識、理解を深めるためには配布資料に詳細な部分まで掲載することや、ポイントとなる点を分かりやすく示すことが必要であったと考える。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

学生にとって馴染みの少ない小児領域であるため、まずはイメージや興味・関心をもってもらうことが重要であると考えます。その上で、さらに知識、理解を深められるような資料作り、講義進行が必要であると感じた。また理解度の確認のために復習小テストを実施していたが、集計データでは「理解」の項目がやや低い結果となっており、学生の理解度に合わせた補足ができていなかったと部分があったと思われるため、講義内でその点を強化できるような振り返り、まとめを行っていくことが必要であると考えます。

科目名

56.小児疾患系障害理学療法治療学実習

担当教員

多田 智美

出席者数

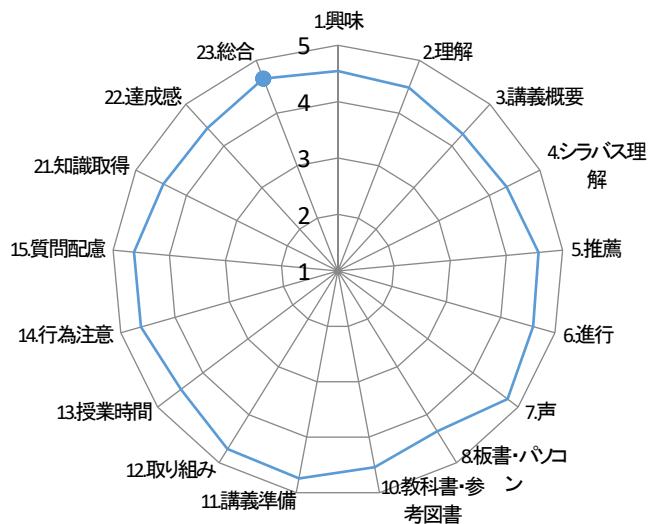
35 名

◆集計データ結果について

理学療法の中では小児部門はマイナーな科目であることは否めず、学生の興味を持続させることは難しい科目だと思われませんが、比較的多くの学生が集中を切らすことなく、授業に参加できたと思われるデータであったと思います。実技を多く取り入れて体で感じることで興味を持つこと、また、聞くだけの授業ではなく教科書の丸写しでもいいので、発表を取り入れることで、聞くだけの銃後湯にはならないように工夫をいたしました。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

通常はこの倍の時間数でお伝えする内容であるので、やや情報過多であったと思われます。その点は学生に負担感が生じてしまったかもしれません。ただ、学生が「楽しかった」という意見を鑑みると、小児理学療法に興味を持ち、学ぶことの面白さを感じてもらえたのであれば、比較的目指した授業となつたと思います。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

スライドの資料についての配布は、結局読まないことが多くなりますので今後も考えておりません。スライドを精選しスライドの量が減らす、また、書く時間を十分にとるように心がけたいと思います。実技は非常に好評であったと感じましたので、今後も継続する予定です。

科目名

57.老年期障害理学療法学

担当教員

木村 菜穂子

出席者数

40 名

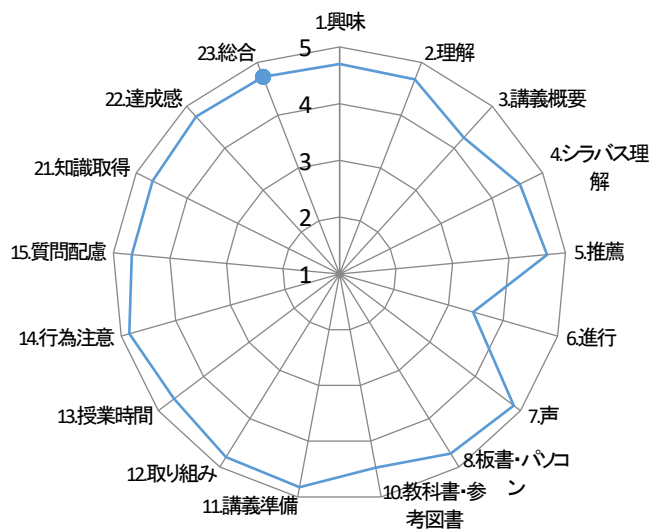
◆集計データ結果について

概ね、4以上でしたが、「進行」の部分は3.5程度とかなり低い評価となりました。これは、講義時間数と講義内容(量)が不一致となり、補講を実施した結果であると理解しています。また、学生自身の取り組み評価は、予習・復習の時間がほぼない人がほとんどでしたが、講義には意識を持って積極的に参加できていたとの結果が示されていました。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

データにもあったように、補講を実施したことに対する否定的なご意見が多く見られました。これは反省点だと思います。ただ、毎回の講義進行が遅すぎるため、というよりも、講義内容が多いということは理解されていたようで、「講義時間数が少ない・増やすべきだ」との意見もいくつか見られました。この講義内容の重要性は理解していただいた結果だと感じています。

各回の講義の進め方や講義内容をまとめたプリントの配布などは概ね好評であったと思われます。特に、「実例を出しての説明により、理解が進んだ」との記載がいくつかあり、とてもうれしく思います。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

講義の進め方や手法に関しては、現在行っている工夫を継続しながら、さらに学生に「理解してもらえ」講義を行っていただきたいと考えます。ただし、講義のスピードについては、所定時間内に終わるよう、講義内容全体を見直し、選択していく必要があるかと考えます。さらに、講義内容をさらに深めるような課題や最新のトピックスなどを提示していくことで、学生が「自ら学ぶ」というきっかけ作りをしていきたいと思っています。

科目名

58.日常生活活動学

担当教員

加藤 真弓

出席者数

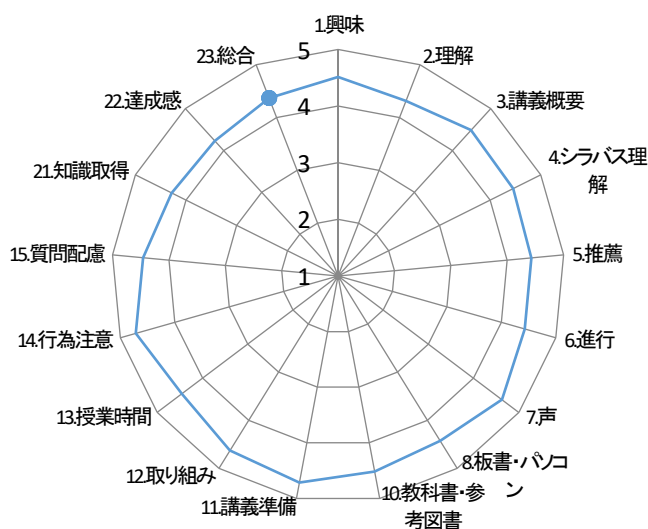
35 名

◆集計データ結果について

総合得点が4.3と概ね良好であったと考える。点数の低かった項目として、21「知識習得に満足していますか」、22「学修に達成感を得られましたか」が4.2であった。本講義ではグループワークを中心に行った。日常生活動作の工程分け、その際に必要となる心身機能の検討、起居動作のバリエーションの確認などである。個々人の動作で検討するため、一つの正解はなく、この場合はこう解釈するという例を示すようにした。また、一つの正解を導きだすのではなく、グループメンバーでディスカッションして多様性を理解することを目的としていた。明らかな正解のない課題に取り組んでいたため、知識修得、達成感で得点が低かったと思われる。他の理由としては、全グループが発表していなく、全員分のフィードバックができていないことが考えられた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

否定的な意見もあるが概ね肯定的な意見が多かった。肯定的な意見としては、グループワークとして、グループ内でのディスカッションを行った点である。しかし、グループで検討した結果を全てのグループが発表してそれに対してフィードバックする時間がなく、数グループのみであったことや、明確な一つの正解を示すことができないテーマであり例としてのみの提示であったため否定的な意見が出ていると考える。予習プリントを提示し、次回授業で扱う範囲について事前に教科書を読み、まとめることを行った。予習を全くおこなわなかったと回答した学生がいるが、提出遅延者はいたものの全員が提出していたにも関わらず、このように回答するということは、この授業評価アンケートの理解ができていないのか、教員が出した予習課題と自主的な予習とを区別しているのかの疑問である。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

日常生活動作は動作項目としては人間であれば行っている動作であるが、個人によって目的や方法は様々である。そのため、その多様性を理解することが、患者さんを疾患や身体機能障害のみで捉えることなく、生活背景や環境、個人の価値観等によって変化することを理解し、評価が行え、理学療法プログラムを立案することに繋がる。しかし、定期試験のための勉強となると、教えてもらった答え(単語や文章)を覚えることが勉強となってしまふ。実際に、この年の定期試験は、過去に出題された問題の答えを、誰かが作成し、それを覚えて解答している学生が例年よりも多かった。原因はいろいろと考えられるが、来年度も同様にグループワークを取り入れた。しかし、ひとつ例を取り上げ、それについて全員で検討し、それに対してフィードバックするなどの工夫もしていきたい。そして、授業の目的を理解してもらえよう、授業初回のオリエンテーションのみでなく、何度も繰り返し伝えていきたい。

◆集計データ結果について

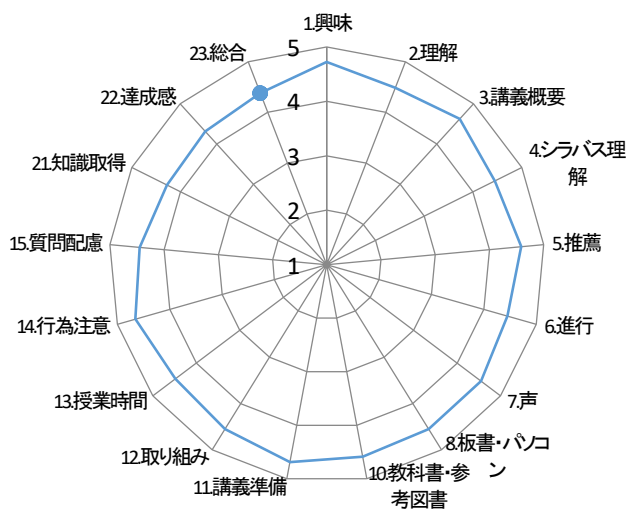
総合得点が4.3と概ね良好な結果と考える。点数の低かった項目として、日常生活活動学と同様に、21「知識習得に満足していますか」、22「学修に達成感を得られましたか」が4.2-4.3であった。本講義では、グループでの事例検討を中心に行った。一事例につきセルフケアおよび起居・移乗・移動動作を検討するのではなく、いずれか一つを検討し、発表を行う形式であった。検討時間は40～50分と短い時間とし、限られた時間内にただただすることなく進行し目標を達成する狙いがある。また、口頭のみディスカッションではなく、実際に体を動かし動作の誘導・介助の工夫や、方法の工夫を検討するよう指示し、取り組むようにしていた。そのため、時間的制約により検討が中途半端になっていた可能性が考えられる。また、疾患や障害のイメージができていないため、検討することが難しかった可能性も考えられた。教科書に沿っても説明を加えたが、あくまでも基本であり、運動学的な知識を応用し症例に応じた工夫も必要となるため、難しさを感じていることも理由の一つと考えられる。復習時間が全くない学生が17%おり、この学生と一致しているかは分からないが、復習小テスト結果が非常に悪い学生がいたことは残念である。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

グループワークを通して事例検討を行い、実技を進めたことは好評であったと考える。学生同士でまたは自分自身で考えることの楽しさや面白さ、また他者の意見に触れることによる視野の拡大を多くの学生が感じることができたのであれば、目的の一つは達成できたと考える。グループディスカッションでは、実際に動作を行い検討することを促したが、実勢できるグループとそうでないグループに分かれたことが残念であった。ディスカッションや動作確認していれば、それに対してフィードバックすることを伝えており、活発にディスカッションできていたグループにはフィードバックできていたが、沈黙の多いグループではフィードバックする材料がないため、ディスカッションを促す介入を行った。その後の実技練習に関しても同様である。個人の質問内容が、全体周知すべき事柄であればそのようにしたが、個人レベルで問題ないと破断した事柄は、あえて全体周知していない。そのことが、フィードバックの機会が少ない学生にとっては不満であった可能性がある。受け身ではなく、積極的に参加してもらいたいものである。動作誘導・介助の方法は、原則はあったとしても、対象者の機能の程度と環境により一律にはいかない。原則をしっかり抑え、運動学的に対象者に対応することを促していきたい。

◆今後の改善に向けて

疾患別の起居・移乗・移動動作、セルフケアの動作指導や介助法の図説が多いテキストに変更を検討する。それにより、個人での予習・復習がしやすくなると思われる。グループワークは継続し、ディスカッションが活発になるような工夫や介入方法を検討する。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

科目名

60.義肢装具学

担当教員

山田 南欧美

出席者数

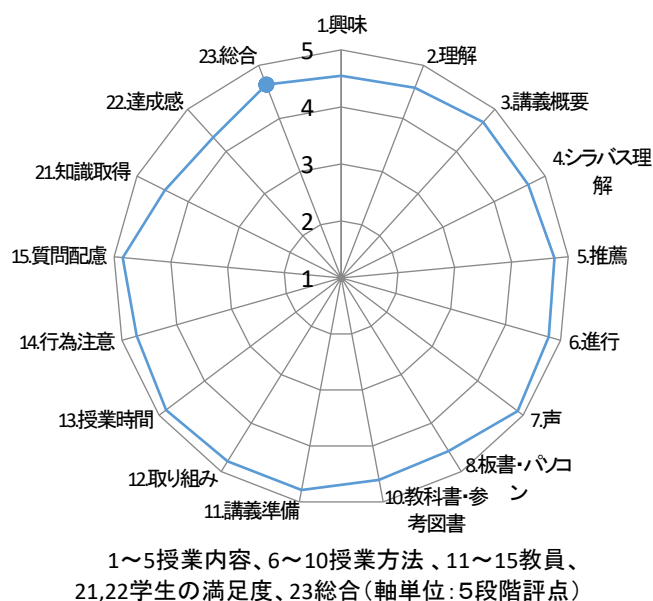
33 名

◆集計データ結果について

質問項目の全てにおいて、アンケート結果が4点以上であり、学生から高い評価を受けた。ただ、その中で「知識取得」で4.4点、「達成感」で4.3点とやや他の項目に比べて低い点数となっており、授業は良かったものの、結果として知識が身に付いたかについては不安感が残った学生がいたのではないかと考えられる。予習・復習の時間については、圧倒的に予習の時間が少ない結果となった。シラバス上では予習を促していたが、具体的な予習内容を提示していたわけではなく、何を勉強すれば良いかわからないことで、予習時間が減ってしまったのではないかと考える。また、前授業範囲を対象としたとした小テストを授業内に行っていたことから、復習の時間のほうが多くなっていたと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

本授業では、講義プリントを使用して講義を進めた。なるべくプリントを見ることで義肢装具のイメージが伝わるように作成したが、「プリントがわかりやすかった」との評価が多く、資料内容については問題がなかったと考える。本授業は覚える内容も多く、また、義肢装具そのものをイメージしながら勉強する必要があったため、写真等を載せた補助プリントを用いたり、学校の備品である義肢装具を実際に提示したりした。これに対し、「実際に義肢装具を見たことで理解が深まった」という意見が多く聞かれ、学生の取り組みを促すことができたと考える。一部の学生からは、本授業が「難しかった」との意見が挙がった。実際、2年生になって初めて学ぶ分野であり、新たに覚えることが多く、慣れない用語も多岐に渡るため、苦手意識を持ちやすい教科であると考えられる。



◆今後の改善に向けて

概ね、学生からの評価は良好であったので、来年度の講義方法も同様の形で行っていきたいと考える。覚える内容も多く、また実物をイメージしながら理解を深める必要があるため、引き続き、配布資料の内容を工夫したり、多くの実物に触れる機会を持てるように講義を進めていく。また、予習の時間も十分に取ってもらえるよう、予習内容をシラバスに明記し、また、授業内でも適宜指示をする。授業の内容が最終的に知識習得・達成感につながるよう、要所所でアウトプットの機会を作り、授業内容を理解できたかどうか、また、何がわかっていないのかを確認できるように促していく。そして、本教科における苦手意識をできる限り取り除き、義肢装具学実習の講義にスムーズに移行できるよう努めていく。

科目名

61.義肢装具学実習

担当教員

山田 南欧美

西井 千博

出席者数

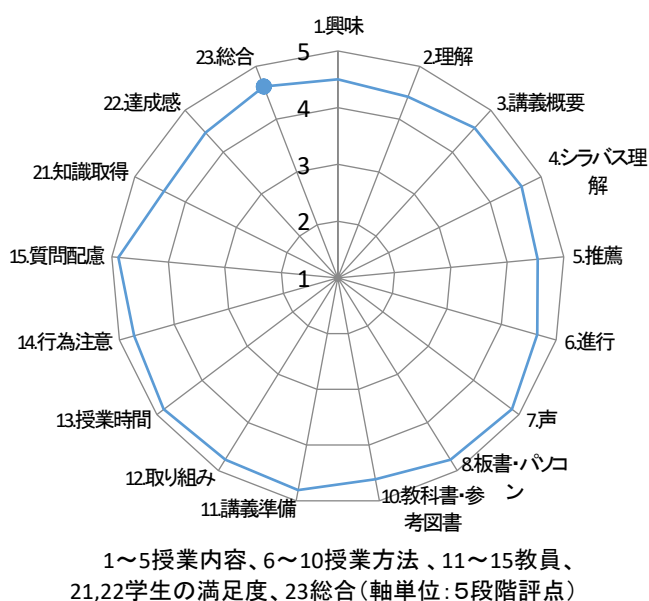
26 名

◆集計データ結果について

質問項目の全てにおいて、アンケート結果が4点以上であり、学生から高い評価を受けた。「理解」「知識取得」「達成感」の項目において、4.5点未満となっており、義肢装具学同様、授業は良かったものの、理解するには難しい部分もあり、結果として知識が身に付いたかについては不安感が残った学生がいたと考えられる。予習・復習の時間についても、義肢装具学同様、予習の時間が少ない結果であった。本授業においては小テストを実施しなかったが、毎回の授業内容の分量も多く、復習に時間をかけることで、予習まで手が回らなかった可能性が考えられる。ただ、すべての学生が熱心に取り組んだ（「どちらかといえば取り組んだ」も含む）と回答しており、本授業の重要性は皆理解をし、積極的に授業に取り組んでいたと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

本授業では、プリントを用いた講義のほか、グループワークや現役の義肢装具士による講義も行った。義肢装具士による講義においては、模擬義足の体験や義手体験、現在よく使われる義肢装具のデモンストレーション等も行ったため、学生からは「義肢装具士の話が聞けて良かった」「自分で体験できて良かった」というような意見が挙がり、本講義がとても有効であったことが伺える。「プリントがわかりやすかった」という意見も多くみられ、プリントをみることで義肢装具のイメージが伝わるよう工夫したことが評価されたと考える。本講義内容は、異常歩行等を理解するために3次的に理解を深める必要があり、工夫をこらしたプリントや、現役義肢装具士による講義が、学生のモチベーションや本授業の評価を高めたと考える。



◆今後の改善に向けて

概ね、学生からの評価は良好であったので、来年度の講義も同様の内容で進めていきたいと考える。義肢装具学で学んだ内容を、より臨床的にかつ3次的に理解を深める必要があるため、引き続き、配布資料の内容を工夫したり、グループワークや体験授業を取り入れることで、学修を促していく。また、予習の時間も十分に取ってもらえるよう、予習内容をシラバスに明記し、また、授業内でも適宜指示をする。授業の内容が最終的に知識習得・達成感につながるよう、要所要所でアウトプットの機会を作り、授業内容を理解できたかどうか、また、何がわかっていないのかを確認できるように促していく。本講義内容は、国家試験でも重要な分野であり、また、臨床に出た後も必要不可欠な分野であるため、授業内で十分に理解が深められるよう、フォローしていく。

科目名

62.物理療法学

担当教員

臼井 晴信

出席者数

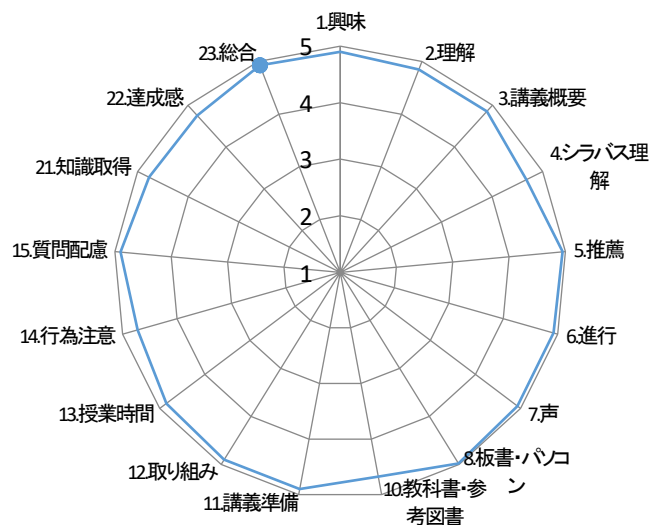
40 名

◆集計データ結果について

授業内容に関しては全ての項目で良い評価であった。特に資料や質問への配慮、授業構成などは評価が高かった。教科書の使用に関する項目は比較的评价が低かった。資料を基に講義を行った。資料に関する評価が高かったため、自主的な学習で教科書を活用できるように促すべきと思う。今年度の講義では小テストを取り入れ、物理療法学の理解に必要な生理学を復習してから講義に臨むように構成した。授業以外での学習時間を見ると、復習時間や予習の時間はやや少ないように感じた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

講義は物理療法の実演、体験を行い、自分の身体におこった反応を考察してから、授業を行うという構成で行った。自由記載の内容を見ると、この構成に関して理解しやすかった、良かったと記載している学生が多かった。また、最後の講義では模擬症例を用いて、実際にどのような物理療法を行うのかをグループワークで話し合い発表した。このグループワークも物理療法の理解につながったと感じている学生が多かった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

気になった点として、教科書を自分で調べたり、小テストの範囲外の内容を予習したりすることが少なかったように思う。また質問に来る学生も多いとは思わなかった。今後、疑問を持って自ら学ぼうとするような講義を行えるように工夫したいと思う。自由記載欄で記載が多かった、物理療法の体験および考察と症例検討に関しては今後も内容を充実させて取り入れていく。

科目名

63.物理療法学実習

担当教員

清島 大資

臼井 晴信

出席者数

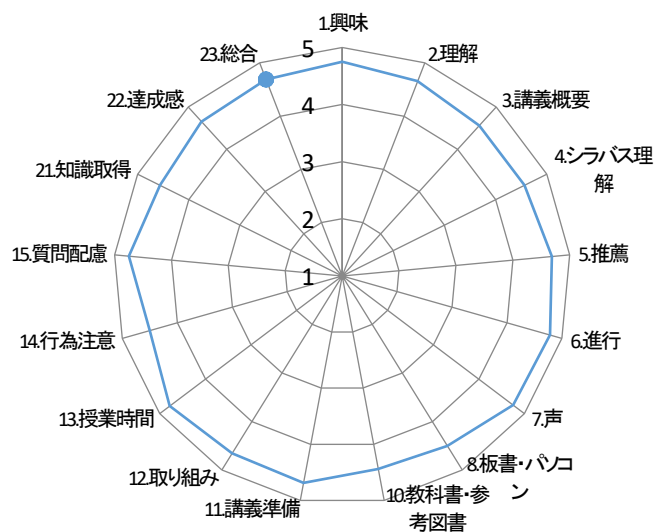
32 名

◆集計データ結果について

学生からの評価はほとんどの項目で平均4.5を超えており、講義としては良かったと思う。教科書使用の項目では平均4.5未満であった。実習科目のため、教科書を使った授業は行わないが、実習内容に教科書を使用しづらいと感じた学生がいたかもしれない。本科目は毎週実験を行った。実験の準備や毎週のレポートが課されていた。しかし、予習時間や復習時間はあまり多くの時間が割かれていなかった。レポートが円滑に進んだり授業時間中に作成できたとも考えられるが、学修意欲がわかなかった学生がいたとも推測される。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

多かった意見は「物理療法の機器に触れることができよかった」「考えるのが難しかったが理解するのにためになった」という意見であった。本実習の狙いは、物理療法による生理学的変化を考察することであり、物理療法機器の使い方を学び体験することではなかった。学生の自由記載の内容から考えると、狙った学習効果には個人差が大きかったのではないかと考える。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

学生が意欲的に学習したいと思わせるような実習内容を再検討する必要があると思われる。学習効果にはどうしても個人差が生じるが、それぞれの学生が効果的な学習ができるようにレポートのフィードバックや発表などの機会の活かし方を検証する。

科目名

64.理学療法特論 I (神経生理学的アプローチ)

担当教員

鳥居 昭久

加藤 真弓

高松 泰行

出席者数

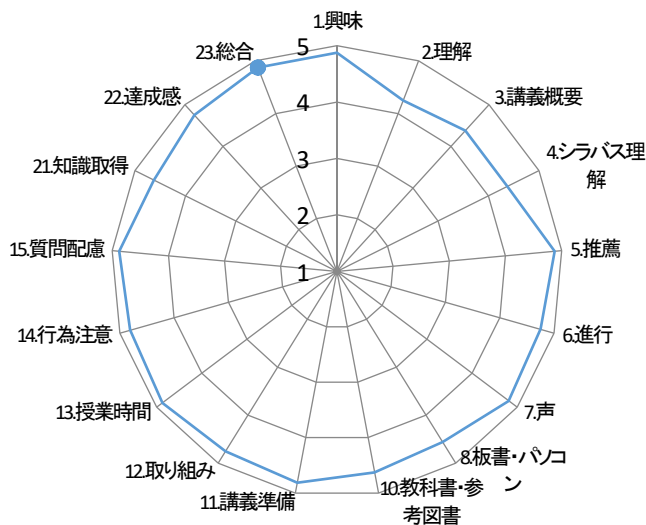
アプローチ) 名

◆集計データ結果について

多くの質問項目で4点台後半であり良好な結果と考える。点数の低い項目として、2「授業内容は理解しやすいものか」が4.2であった。動物実験や臨床研究データを示しながらのより専門的な講義であったことから、学生のもつ知識では難しいようであったかもしれない。その点については、今回学んだことを臨床に出てから改めて思い出し勉強していただきたい。全体的に良好な結果であった理由としては、本科目は選択科目であり興味関心のある学生が受講していること、臨床実習において理学療法の基本的な事項を学習した後であること、実技を取り入れていることなどが考えられた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

座学も実技も臨床に活かせる内容としたことが、関心を持って取り組むことに繋がったと考える。2年生までの講義では、治療手技は行っていなかったことと、臨床実習を終え、卒業・就職を間近に控えていたタイミングでの開講がより効果にしたと考える。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

外部講師を迎えての開講は今年度が初めてであったこともあるため、来年度も同様に実施したい。

科目名

65.理学療法特論Ⅱ（関節運動学的アプローチ）

担当教員

齊藤 誠

鈴木 惇也

出席者数

34 名

◆集計データ結果について

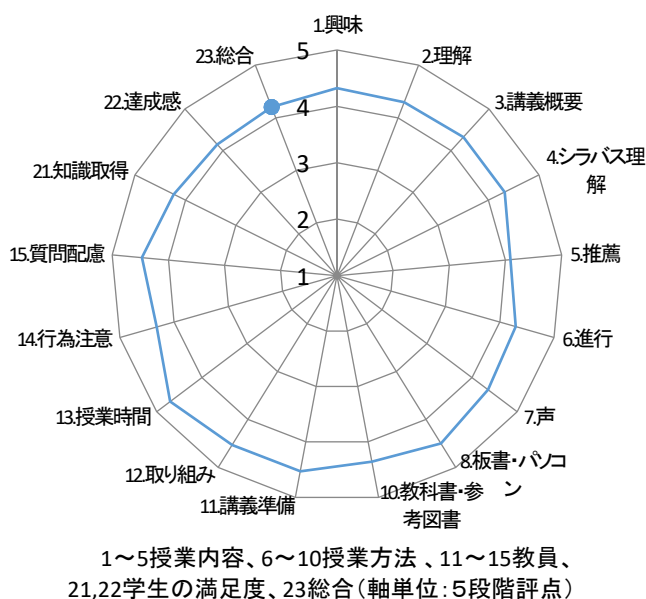
各項目とも平均して4点以上であり、おおむね良好な結果であったと認識している。

多くの受講者はポジティブな反応を示してくれたが、数名評価の低かった受講者も散見される。特に実技ばかりを行うと考えていた学生にとっては少々期待外れであった様子である。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

全体的な感想としては臨床に向けた講義であったと認識されたようであるが、「実技をもっと取り入れるべき」や「後半の講義は意味がない、評価法の授業を受けたいのではない」といった意見もあった。本講義の目標の1つとして臨床推論能力の向上を挙げており、実技を練習したところで実際の患者に適応する方法を知らなければ意味がないと考えている。

一部の学生に伝えることができなかったことは指導不足であり残念であるが、実技指導のみでは下記に記載する危険性があると考えため、講義内容の大幅な変更は考えていない。



◆今後の改善に向けて

講義の最後に行った発表では、ペーパーペイシエントを使用した評価・治療プログラムの立案を行ったが、関節運動学を考慮した評価・治療まで十分に指導することができなかったと考えている。

要因としては講義時間の短さや、グループワークを行う際に狙いを十分に説明していなかったことなどが考えられる。しかし、上記の項目にも記載した通り、実技を練習したところで実際の患者に適応する方法を知らなければ意味がないと考えているため、臨床推論に関する講義は今後も継続していきたい。

来年度以降は、評価から治療を行うまでのプロセスを理解させることを重視していきたい。疼痛や関節可動域制限の原因を考察しないまま手技を行うセラピストを養成しないように評価法と関連付けながら講義を展開していきたい。

最後に、学生に講義主旨が十分に伝わらなかった要因としてシラバスの記載内容が不十分であった可能性も考えられる。特に本講義は選択科目手であるため、シラバスの記載内容にはより一層注意していきたい。

科目名

66.理学療法特論Ⅲ(筋生理学的アプローチ)

担当教員

宮津 真寿美

川村 皓生

清島 大資

出席者数

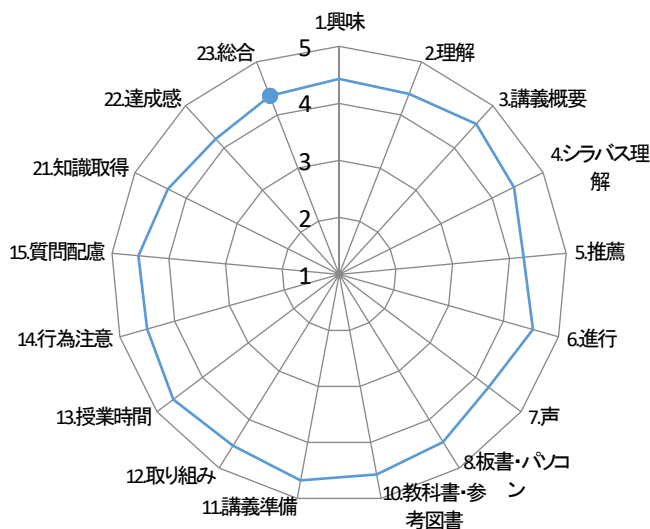
28 名

◆集計データ結果について

項目は4点以上で、学生からの評価は良好であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

本授業は、基礎的知識から、実技を含めた臨床的な内容を講義している。「国試対策になった」、「生理学の復習になった」という基礎的知識の内容から、「臨床で活用できる」などの臨床的内容まで、良好なコメントがあり、幅広い授業が展開できている。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

自由記載にあるように、スライドの文字、声の大きさ、課題の量などは検討していく必要がある。次年度に向けた課題としたいと考えている。

科目名

67.理学療法特論Ⅳ(スポーツ障害理学療法)

担当教員

鳥居 昭久

出席者数

14 名

◆集計データ結果について

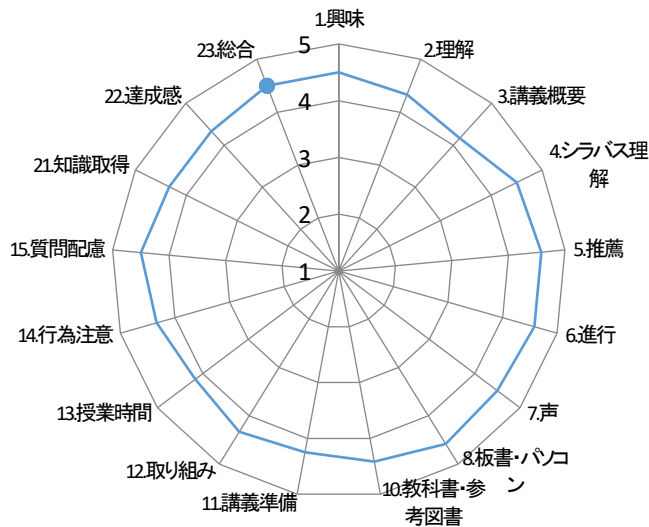
全体としては概ねバランスが取れていると思われる。

実際の講義の内容そのものは、学生の反応や力量を確認した上で、シラバス内容とは若干変更した部分もあるが、学生自身の取り組みは良好であったと思われる。この内容については、テキストなどに描かれているものに留まらず、臨床場面を想定しての実技を多く入れている。そのため、予習などは若干難しいことも少なくなかったと思うが、予想に反して、予習時間が有ったことが評価できる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

この講義の内容は、臨床に置いて直接応用できることを技術を身に付けることを目標に置いて実施した。そのため、教科書レベルの話ではなく、実際に学生自身が体験しながらの講義であった。学生のコメントからも、この点についての反応が多く寄せられており、それなりに効果が高い内容であったと思われる。

しかし、一方で、技術的な側面を修得するには時間的に、あまりに短く、消化不良な部分も少なくなかったと思われる。テーピングにしても、ストレッチングにしても、臨床現場で実際に使用できるレベルまで到達するにはかなりの時間の練習が必要であると考えられる。また、最終的に実技試験などを実施して、スキルレベルの確認をすることも必要だろうと思われたが、この短期間では物理的に不可能である。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

スキルトレーニングとしての場をある程度設ける必要があると思われる。しかし、3年生後期での開講ということも有り、負担が大きい試験や課題は課せにくい。ある程度、特定の技術に絞って集中して練習し、スキルレベルを向上させる工夫が必要と思われる。

科目名

68.理学療法特論Ⅴ(吸引・喀痰法)

担当教員

臼井 晴信

長井 多美子

出席者数

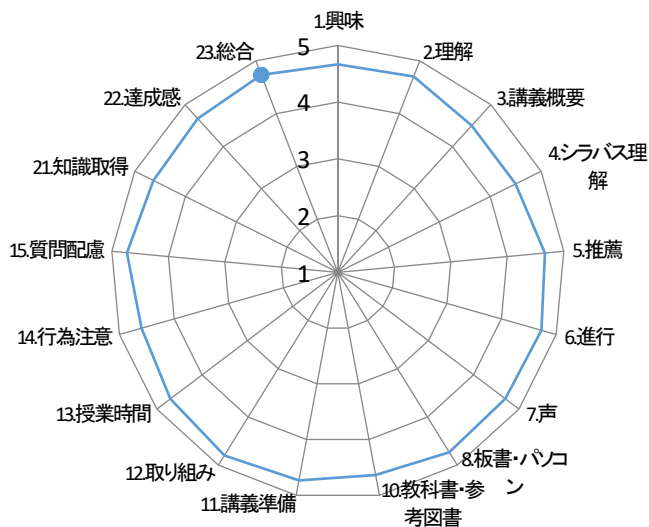
30名

◆集計データ結果について

良い評価であった。授業内容の評価は全ての項目で4.5を超えていた。また授業への取り組みについても積極的に取り組むことができたと答えている学生が多かった。一方、質問を全くしなかったと答えた学生もおり、主体的な学習を促すことができたかどうかはわからない。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

フィジカルアセスメントの実技と看護師による吸引の実技が印象深かったようである。実習後の講義と言うこともあり、興味を持って授業に参加できたと思われる。講義の中では国家試験に出るような知識がどのように臨床で活かされるかという点に重点を置いた。国家試験対策を行ったわけではないが、良くも悪くも結果的に試験対策になったようであった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

評価や吸引に関する実技はその他で学べる機会もないため今後も充実させていきたいと思う。そのためには自分自身の技術力をさらに向上させる必要があると思う。講義については主体的な学習ができるように工夫したい。

科目名

69.生活環境論

担当教員

木村 菜穂子

出席者数

31 名

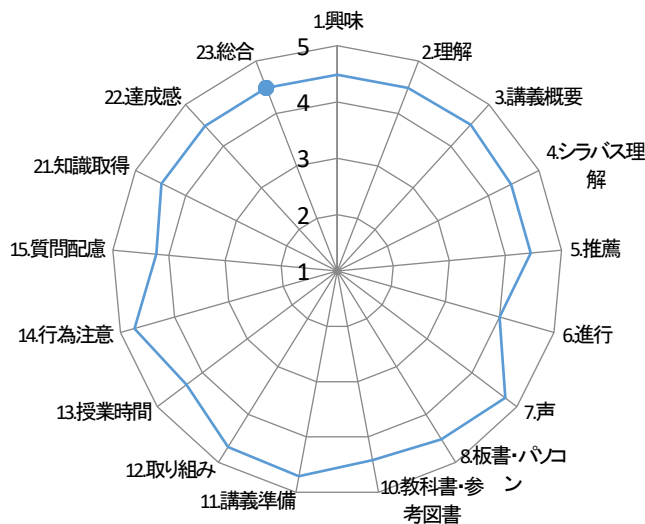
◆集計データ結果について

評価は概ね4以上となりました。しかし、「進行」が他に比べて低い評価となりました。講義時間数と伝えたい内容が一致していない点は、自分自身でも理解しています。特にグループワークはしっかりと考えていただきたい部分もあり、一部のグループにはかなり時間的な負担をかけたと思っています。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

比較的、興味を持って取り組んでいただけたのだと思えるような記述が多かったように思います。しかし、やはり「講義時間」に関しては、「もう少しゆとりのある計画でやって欲しい」などの意見も散見され、反省すべき点だと考えます。

ただ、自宅の住宅改修課題やグループワークも、実際に臨床で行っていくことを予測しながら、その難しさや重要性を理解していただけた部分もあり、とてもうれしく思います。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

今回の評価結果から、講義時間と講義内容の一致が、もっとも重要な改善点であると理解できます。講義内容をさらに精査し、より重要と思われる部分をピックアップしながら、受講される皆さんが興味を持ち、臨床や患者さんの生活環境を評価、改修していく上での視点を持つことができるよう、再度構成していきたいと思っています。

科目名

70.地域理学療法学

担当教員

木村 菜穂子

出席者数

35 名

◆集計データ結果について

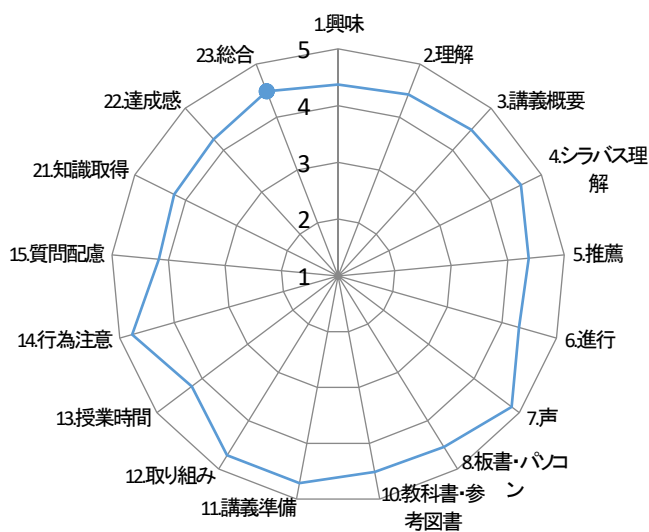
各項目、概ね4以上の評価となっていて、良かったと思います。各回の講義の進め方などは、学生の皆さんにとって大きな問題はなかったかと考えます。ただし、制度論中心の内容であるため、ボリュームも多く、全体的な時間配分がうまくいかなかった（補講の実施）のは、反省点だと思います。

学生の皆さん自身の評価では、「予習にかける時間がほぼない」という点が挙げられていますが、これも講義内容を考えると、こちらも予習できるような工夫をできなかったことが大きな原因かと思われる。ただ、「目標を持って取り組んだ」「熱心に取り組んだ」の点では、多くの皆さんが「取り組んだ・どちらかといえば取り組んだ」と評価しておられるため、講義内容の重要性は理解した上で、取り組んでいただけたのだと理解しています。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

多くの自由記載をありがとうございます。・授業プリントに関して、・教員自身の臨床経験を元にした説明、・分かりにくい部分を身近なたとえ話に変えての説明 などに良好な評価をいただけており、理解が難しいと考えられる講義内容をできるだけ興味を持っていただけるように、と考えて行っている工夫が、皆さんの理解に役に立ったのではないかと安心しています。

また、「地域理学療法に興味を持った」という記載が数名見られました。少しでもそう思っていたのなら、大変うれしく思います。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

介護保険の制度論が中心となる講義なので、理学療法士の仕事内容や治療技術と直結するイメージは持ちにくいと思います。しかし、今後は理学療法士が地域の中で担う役割はさらに大きく、重要なものとなります。現在の講義内容は、その基礎となるべきものです。ですから、必要となるであろう知識を分かりやすく皆さんに伝えることはもちろん、そこからできる限り、理学療法士が維持期・生活期にある患者さんや高齢者の方々に何ができるのか、を考えるきっかけとなるよう、今後も皆さんからいただいた意見を元に、講義内容や教授方法の見直しを続けて生きたいと思っています。

また、予習や復習の手助けになるような課題提示なども考えていけたらと思います。

科目名

71.地域理学療法学実習

担当教員

加藤 真弓

鳥居 昭久

臼井 晴信

松村 仁実

齊藤 誠

田原 靖子

出席者数

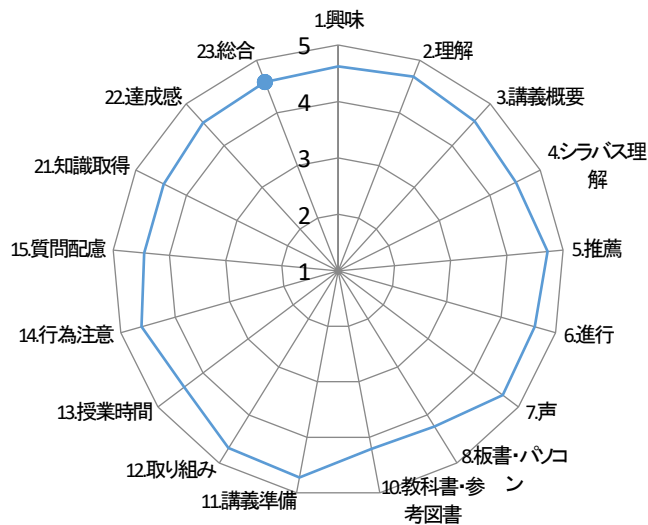
29 名

◆集計データ結果について

総合得点の平均が4.5であり、良好な結果であった。本科目は、保育園児および健康な高齢者を対象に学生が実習に取り組む実践的な活動であることが理由と考えられる。熱心に取り組んだかの質問には「熱心に取り組んだ」「どちらかといえば取り組んだ」の回答で100%であった。また、約80%が目標をもって取り組んでいたことはとても良かった。高齢者の介護予防領域に関しては、高齢者から学生に対する肯定的な意見が多く寄せられたことから、学生の取り組みに対する意識の高さがうかがえた。しかし、予習を行った学生は約20%しかいなかった。そのため、コミュニケーションは取ることはできても運動指導の介入に関しては十分ではなかった実情の理由が明確となった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

よかった意見として最も多かったのが、園児や高齢者との交流であった。単なる交流のみでなく、活動を通して、会話、相手との距離感、立ち位置、姿勢・態度、積極的な行動、主体的な行動、高齢者の特徴等を、まだまだ十分とは言えないが学ぶことができたと考える。さらに、身体機能測定や認知機能測定の経験も今後の臨床実習へとつながる機会になったと考える。また、1名の意見であるが、地域における理学療法士の役割が分かりましたとあった。地域における理学療法士へのニーズは高いため、この点についても学生に理解してもらえるようにしたい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

実際の場面では、目標をもって熱心に取り組む学生がほとんどであるが、事前準備が十分ではなかったことが課題である。学生自身が責任感を持ってより適切に取り組むためにも事前準備を促す工夫が必要である。

科目名

72.作業療法概論

担当教員

美和 千尋

山下 英美

出席者数

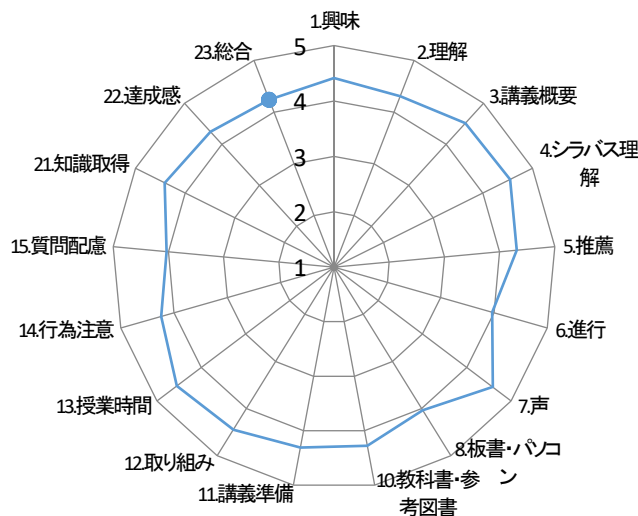
29 名

◆集計データ結果について

授業内容では、評価は全て、平均④「どちらかといえば、取り組めた」であった。1年生の始めの段階の講義として、内容を噛み砕いて説明したことが良かったと思われる。2教員で内容を話し合い、進めていったことが学生の理解につながったと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

学生の自由記載では、「教科書を読んだ後、先生がもう一度説明して下さるので分かりやすかった」「わからないことを聞きやすい環境だったのでよかった」「先生の説明がわかりやすかった」という良い点を指摘してくれた点と、「他に補助資料があると良かった」「私語をやめさせるように注意してほしい」「授業の進み具合が先生によって差があった」などの意見があった。学生の理解度など異なっていると思われた。今後、良い点は採用し、悪い点は改善したいと考える。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

授業内容の理解をさらに深めるためには、予習・復習を促す必要があると考える。今後は、まず教科書を一読して授業に臨むよう声かけし、学生の自由記載にもあったように、補助資料を準備し授業中に大切なところの板書を行いながら資料への書き込みを促し、復習としてそれを整理するような授業の構造を作ることにより、理解をさらに助ける工夫を行っていきたい。

科目名

73.作業療法研究法

担当教員

美和 千尋

加藤 真夕美

山下 英美

横山 剛

堀部 恭代

草川 裕也

清水 一輝

飯田 満希子

出席者数

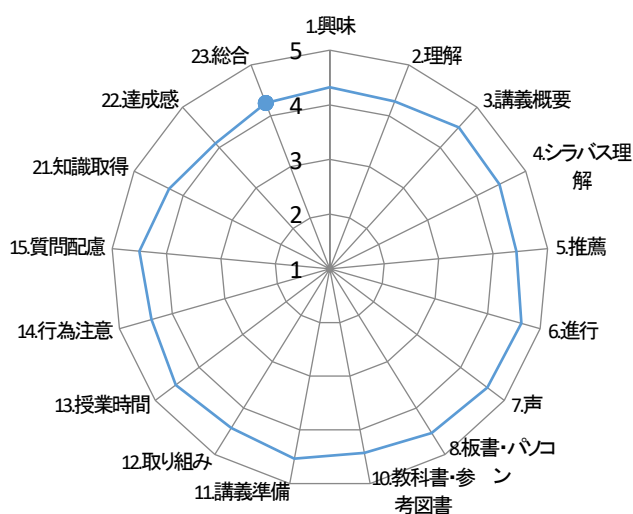
28 名

◆集計データ結果について

評価は全て、平均④「どちらかといえば、取り組んだ」であった。ただ、「総合」「興味」「達成感」など評価がやや低いため、この点は今後は考慮する必要がある。評価が高かったのは、授業を教員に割り振って、個々の先生の研究について講義してもらって行ったことが要因であると思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載については、1) 良い点では、「わかりやすくて良かった」「文献の探し方が良かった」「興味が持てた」「統計のやり方が全くわからなかったが、1つ1つわかりやすく教えてもらえて良かったです。」などであった。反面、「難しかった」「プリントがほしい」であった。良い点はこれから進め、悪い点は改善していきたいと思う。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

- 教員の研究テーマを授業で報告すること、倫理書類の書き方を重要視して行った。以下今後の重要とする要点を述べる。
1. 研究で理解が困難な統計学の指導の工夫をする。
 2. 卒業研究の計画を具体的に話す。
 3. 教員の研究テーマの講義の充実を図る。

科目名

74.臨床運動学(OT)

担当教員

加藤 真夕美

出席者数

28名

◆集計データ結果について

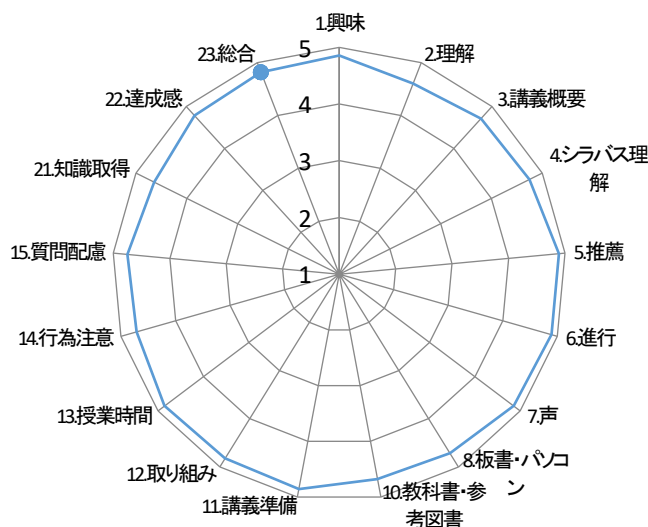
すべての項目で平均4.6点以上であり、バランスのとれた評価であった。本講義の工夫としては①教科書をしっかり読む習慣をつけるために、教科書のガイドとなるようなレジュメを作成すること ②体験学習を多く取り入れて「体で理解する」仕掛けを用意すること ③学生的心声を授業中に積極的に拾うこと ④授業の一部に上級生にも参加してもらい、臨床家になるという意識を高めること の4点である。②について、本授業は講義という形式の授業であるが、疑似体験しながらそれに関する知識をその都度入れていくことにより、共感的に対象者を理解することを推進している。

学生自身の取り組み姿勢としては「熱心に取り組んだ」「どちらかといえば熱心に取り組んだ」と答えた学生が100%であり、学生の意欲を引き出すような授業を展開できていたと考えている。一方予習時間、復習時間ともに「全くなし」「1時間未満」が多く、自宅学習に結びついていないことが示された。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

昨年度の授業評価では「教科書の図の説明を授業でもう少ししてほしい」「先輩の事例をもっとやりたかった」との声が挙がったため、実際の動作と照らし合わせながら解説をより丁寧なことを心がけ、上級生との模擬練習では複数事例の体験ができるよう時間配分を修正した。

その結果、本年度は「丁寧に教えてくださりわかりやすかった」「トランスファーなど実践的なことを丁寧に教えて頂き役に立った」「三年生に模擬患者を演じてもらうことで緊張感を持ち取り組むことができ、自分の弱みを自覚することができた」との声が多く挙げられた。一方、1名のみ「理解が難しかった」との意見があった。具体的なことがら記載されていないため、授業全般への感想と思われるが、おそらく運動学全般に苦手意識を抱いている学生であろうと思われる。学生個別に対する支援が更に必要である。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

この授業の役割として、1年次の運動学(総論・上肢・下肢)がいかに関臨床活動に結びついているかを理解すること、臨床実習において求められる「動作分析」の基礎を押さえること、臨床実習の場で実践できるよう最低限の移動介助技術を身につけること、の3点を意識している。そのためには授業外での予習・復習時間をいかに確保するよう促せるか、が次年度の課題である。毎週授業内で提示している課題のチェック方法を見直し、学生が「自分はよく勉強している」と達成感を抱くことができるような支援方法を検討していきたい。

科目名

75.基礎作業学

担当教員

加藤 真夕美

出席者数

31名

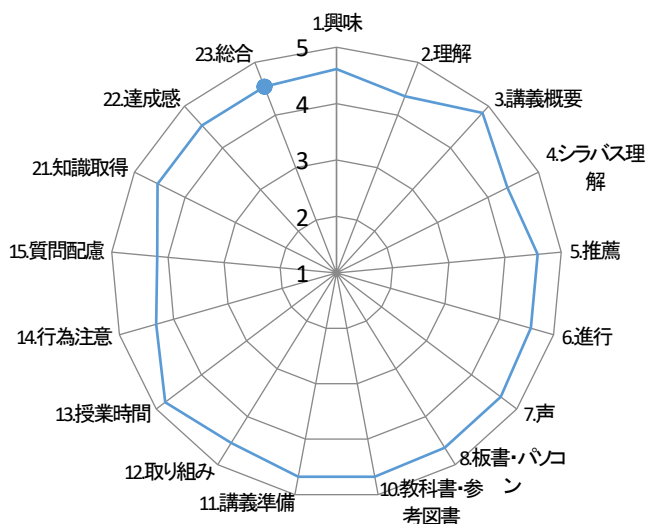
◆集計データ結果について

教員に対しては、レーダーチャートに示されているすべての項目で、平均が4.2~4.8の間にあり、バランスの良い評価であった。ほぼすべての学生が3点から5点と点数をつけているが、進行(6)のみ2名の学生が2点をつけており、学生間で感じ方が分かれるところであった。教科書の内容を基本とし、関連する演習を多用したことがバランスの良い評価に繋がったと考えている。

一方学生自身の振り返りでは、予習(19)・復習(20)時間が少ないわりに、授業に対する取り組み(16)は熱心あるいはどちらかと言えば熱心に取り組んだと答えた学生ばかりであった。演習は授業内で完結させたものが多く、授業内で提出できなかった学生のみを持ち帰り課題としていたため、自宅学習の伸びにつながらなかったと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

すべて肯定的なコメントであった。「折り紙が楽しかった」「文献を読んでまとめた授業が好きだった」と、内容に関する意見や、「クラスメイトの新しい考えを知ることができた」「自分自身で考えることが多かった」「作業の知識を得ることができた」という方法論に関する意見まで、非常に具体的に記述されているコメントが多かった。グループでの演習を多用し、自分や身近な他者に知識を引きよせながら様々なことを考え、実践してもらったことが、学生の知的好奇心を喚起したと思われる。「自分が作業療法士になりたいのか不安に思ったが、この授業を受けてやはりなりたいたいと改めて感じる事ができた」とのコメントは、教科担当として勇気づけられた。



1~5授業内容、6~10授業方法、11~15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

今年度初めて担当したため非常に悩み、試行錯誤した授業であった。作業療法の基礎的な学習では、概念的なことがらが教科書に羅列されており、ともするとわかりにくくなってしまう。そこをいかに極力分かりやすい言葉で、簡略化して伝えるかに腐心した。学生にはその意図が伝わったようだが、本質がしっかり伝わったのかは不安が残る。これから専門科目を学ぶ彼らの学習過程を見守り、必要なことをこの授業に反映させていきたいと思う。

科目名

76.基礎作業学実習

担当教員

横山 剛

加藤 真夕美

森下 章生

古山 晴香

出席者数

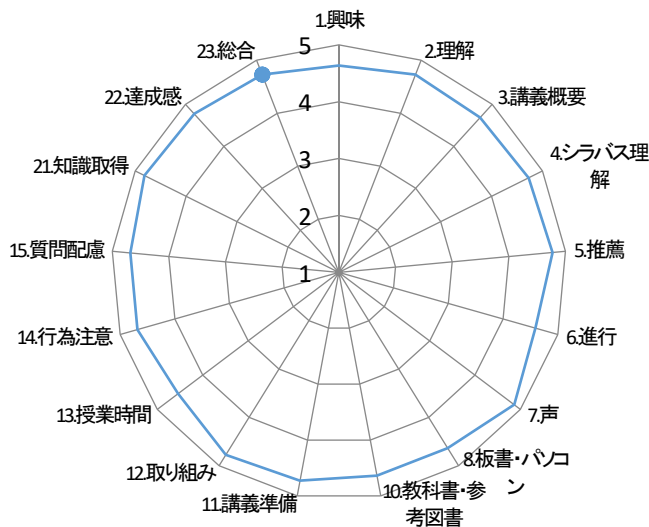
22 名

◆集計データ結果について

設問のほとんどの項目で4～5点であり、概ね意図したことが授業で行えたのだと考えている。実習科目であるので、予習、復習の項目では1～2点となっていた。今後検討が必要であろう。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

概ね好評であったことがうかがわれる。楽しんで学習するといった経験が学生には少ないのかもしれないが、新しいことにチャレンジし、知識や技術を身につけることが1年次前・後期に亘って行えた事は非常に有意義であろうと考えられる。他の科目についても同様な感想や意見を持つことが可能となるにはどうしたら良いか、今後の検討課題である。また、臨床につながるような講義を含めたのであるが、それをきちんと受け取り臨床をイメージしようとしているが学生がいたことは何よりであった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

学生が楽しんでいる要因についてを探り、そのような要因を盛り込んで授業計画を立案していくことが今後の課題である。

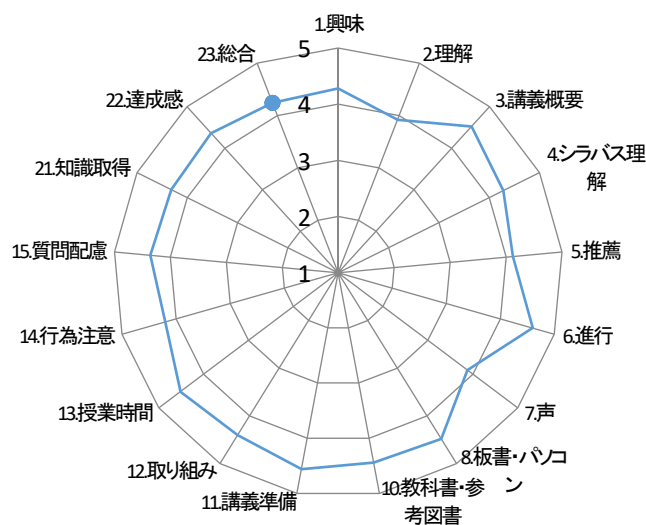
◆集計データ結果について

平均して4.0から4.5程度の評価であった。その中で4.0以下であった項目は、2.理解、7.声であった。

2.理解に関しては、自由記載で「何をしたら良いかわからない事があった」などの意見があったことや自分たちで課題を学習してもらう機会を設けたことから、このような結果になったと思われる。7.声に関しては自由記載でも指摘する声があったため、今後配慮が必要であると思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

肯定的な意見としては、「実際に評価をして、理解が深まりました」「作業療法で観察すべき点が多くあることに気づきました」など、評価の実践からの学びがあった様子がうかがえる。それに加え、「話し合いが多くてよかった」と、学生同士で話し合うことでより理解が深まったのではないと思われる。その一方で、「次に何をすればいいのかわからなかった」と、学習をして欲しい内容が教員がうまく伝えられていないと思われるコメントがあることや、「プリントが多かった」など、理解を促せるような資料の提示が適切ではなかった可能性がある。他にも、「私語を注意して欲しかった」との要望もあった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

本講義では、作業療法評価について、各領域で共通する対象者を捉える時の考え方(インクルージョンや障害学といった内容)や面接や観察の評価について、グループワークでの学びや実践を通した学びを中心に構成した。肯定的な意見でもあったように、そのような形がより良い学びになったと思われる。今後も継続して同様の形式で行なっていきたいと考える。しかし、それを補助するような教員からの問題提起や資料作成が不十分であった可能性がある。学生主体で学べる環境を整えられるよう、授業の構成や資料の再検討を行っていききたい。

科目名

78.作業療法評価法実習

担当教員

横山 剛

山下 英美

出席者数

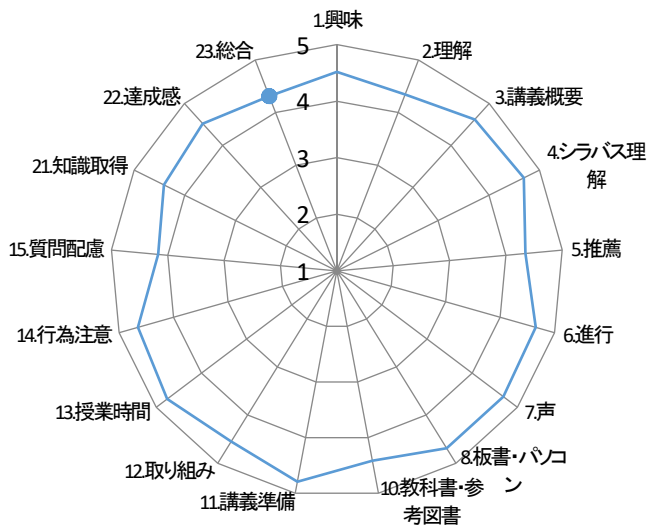
29 名

◆集計データ結果について

概ね4～5点の範囲の結果であったが、復習・予習の項目で点数が低いことが分かる。各自にスーパーバイズする時間を確保するようにしていたはずなので、予習や復習をまったくしていない、といった学生の認識は誤っていると考える。この事についての認識の違いがどこから起こるのかについて把握し対処することは今後の課題である。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

概ね好評のようであるが、一部授業の進め方などについてのコメントがあった。直接フィードバックをする機会があったので、本来はその時間内でコメントするなどが必要であろうと考えられる。こういったコメントをする学生が話しやすくする事も授業計画に盛り込んでいくこと必要だと考える。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

学生と授業担当者、授業担当者間での認識を互いに理解しあっていくことが今後の課題である。

科目名

79.身体障害作業評価学

担当教員

加藤 真夕美

出席者数

29 名

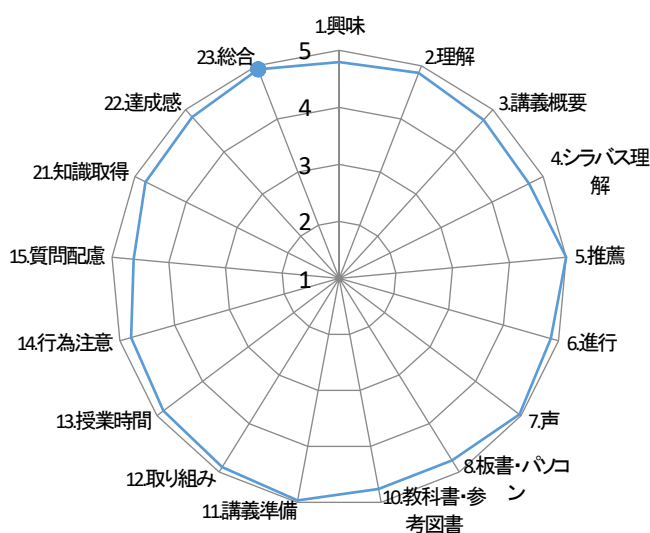
◆集計データ結果について

教員に対しては、レーダーチャートに示されているすべての項目で、平均が4.6～5の間にあり、良い評価であった。これから身体障害領域の作業療法を学ぶ中で欠かすことのできない基礎科目であるがゆえに、分かりやすく、簡潔に、しかも要点を落とさぬように細心の注意を払いながら授業を行っている。毎年マイナーチェンジしている資料は、学生の学習のガイドとなるよう、該当教科書のページを付記している。これらの努力が学生に伝わり、学生も興味を持ってくれたのだと思う。また、毎年批判の出る声の大きさ（7）については今年度は平均5であった。今年度はどの教室でもマイクを使用することを心掛けており、功を奏したと一安心している。

一方、学生自身の振り返りでは予習（19）・復習（20）時間は、課題のボリュームに見合った数値であった。授業中は熱心に取り組めた（16・18）学生が多かったようである。毎回自宅学習課題を課し、課題に対するコメントを返し、授業の初めには小テストを行っていたため多くの学生が集中して取り組めたのだと思う。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「難しい内容」で「ペースが早い」ことに不満を抱いた学生が数名、一方で難しく早い「わかりやすかった」とコメントした学生が多数いた。分かりやすさの根拠は「課題と小テストがあった」こと、そのレポートへのフィードバック内容、「イラストを使った説明」「声の聞き取りやすさ」「良い環境」であった。教員の工夫が学生にはしっかり伝わっていたようである。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合（軸単位：5段階評点）

◆今後の改善に向けて

膨大な量の内容を、限られた時間数の中で教授するのは限度があるため、どうしても駆け足になる。それを学生には伝えた上で、予習・復習課題を出し、翌週には小テストを行っている。課題と小テスト対策に臨む前に教科書の該当ページをしっかりと読み込むようにと伝えているが、どれほどの学生が教科書を読み込んだのか、疑問ではある。おそらく上記の評価で「難しい」「ペースが早い」ことに不満を感じている学生はそれが十分にできていなかったと思われる。それらの学生がこれから専門科目を学ぶ中で興味を失わないよう、レポートのやりとりを通して更に個別にそのような学生を早期発見し、個別対応していきたいと考えている。

科目名

80.精神障害作業評価学

担当教員

横山 剛

出席者数

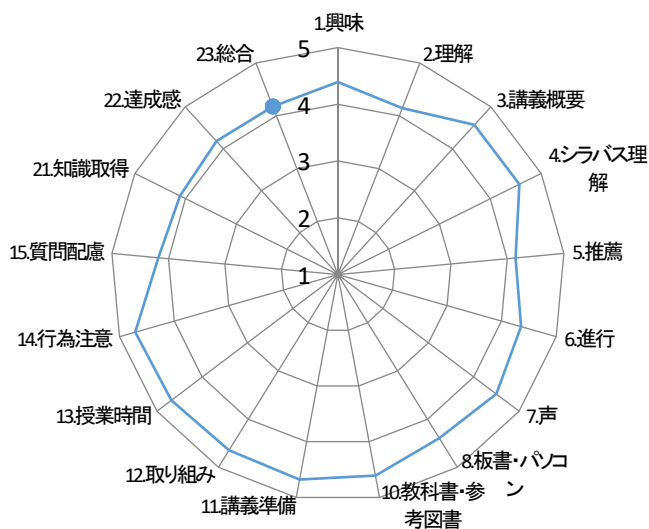
28 名

◆集計データ結果について

概ね4～5点であって意図した授業となったと考えている。復習予習に関してはかなり低い得点であるため、確かな学生の課題を設定することが必要であろうと考えている。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

難しい、といった意見があったが、難しいことが分かった、というようにに理解している。教科書を丸暗記して臨床実習で通用するはずもないため、自身が分からないことを“自身が分かるように努力する”ことを奨励してきた。是非とも今後も取り組んでいただきたいと願っている。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

かなり焦点を絞って授業計画立案し実施していくことが課題であろう。

科目名

81.発達障害作業評価学

担当教員

五十嵐 剛

出席者数

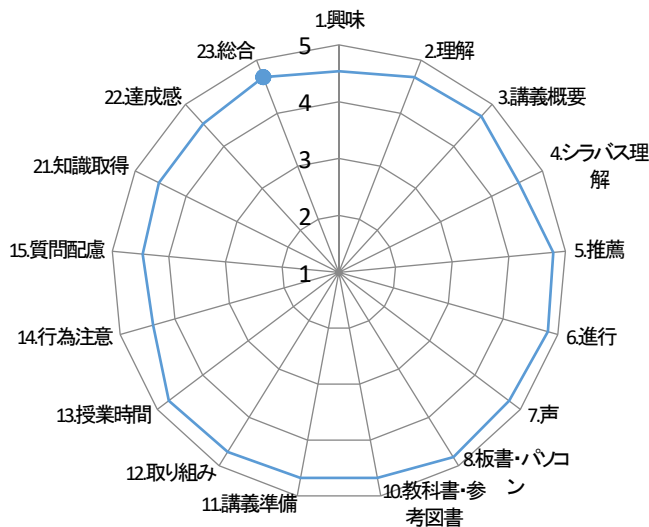
28 名

◆集計データ結果について

概ね4.5点以上となっており、学生にとって概ね満足のできる授業だったのではないかとと思われる。今年度から教科書を変更したが、教科書・参考図書の項目点も比較的高く、良い方向に作用したのではないかと考える。行為注意については、他の項目と比較すると低めの点となった。注意するほどの授業を妨げる行為は無かったように思われるが、極力学生の態度にも目を向け、他の学生の学習の妨げとなるような行為が無いよう注意をしたい。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「分かりやすかった」との意見が多かった。スライド資料は例年使用しているものだが、最新の情報を盛り込めるように更新していきたい。また、実演による説明やビデオも好評価であった。「教科書が絵がついていて読みやすかった」との意見もあった。実習地の少ない発達障害領域の授業であるため、学生がよりイメージを持ちやすくなるよう、イラストや図を多用した教科書に変更した効果があったように思われる。その他「発達障害には興味が無かったが、授業をきいて少し興味を持てた」とのコメントもあり嬉しく思う。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合 (軸単位: 5段階評点)

◆今後の改善に向けて

ネガティブな評価は聞かれなかったため、基本的には今の講義スタイルを継続していきたい。将来多くの学生が発達領域に関われるよう、学生が興味を持てる講義を心掛けていきたい。

科目名

82.作業治療学理論

担当教員

美和 千尋

出席者数

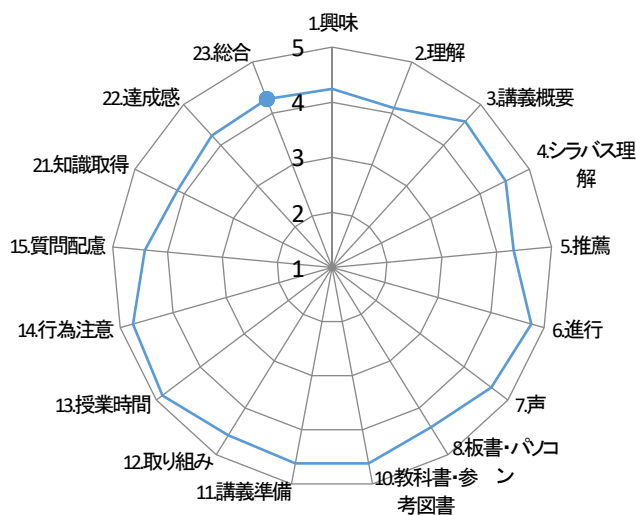
29 名

◆集計データ結果について

難しい授業内容であったが、評価は全て、平均④「どちらかといえば、取り組めた」であった。理論のモデルをグループごとに行ったことが、自主的に授業に取り組めたと考える。積極的に学生に自主的に行うことが評価される授業のように思われた。また、自分でまとめることにより、参加している意識が高まると考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載については、1) 良い点では、「わかりやすくて良かった」「班での発表が良かった」「パワーポイントにまとめることでわかりやすかった」「沢山の知識を得る事が出来た」などであった。反面、「難しいです」「教科書の内容が堅苦しく感じて、理解が難しかった」「パワポを制作する時間がもう少し欲しかった」であった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

作業療法の理論を歴史的、構造的に教えた。また、各モデルについてグループで調べる形で行った。以下、今後、改善する点を記入する。

1. 資料、パワーポイントなどの工夫をして行う。
2. 難解な部分においては時間をかけて説明する。
3. 班ごとの時間を多めにとって行う。

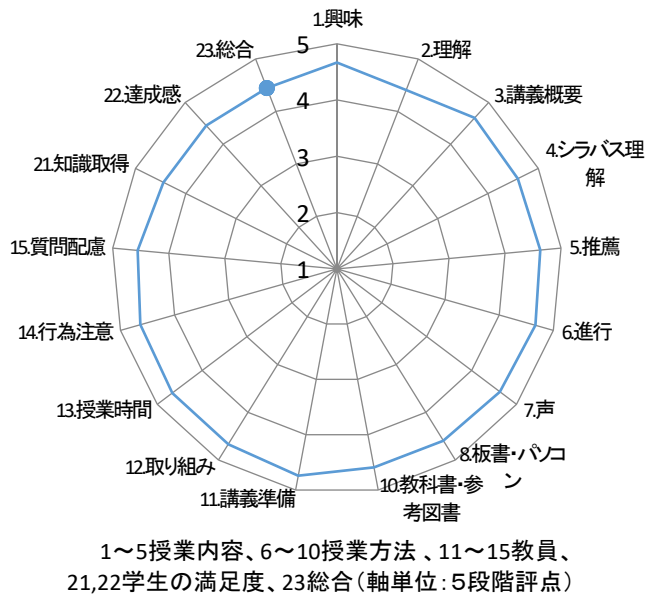
◆集計データ結果について

平均して4.5を上回っていることから高評価であったと言える。中でも、「興味」の項目が高かった。本授業の到達目標の一つとして臨床実習のイメージをつけ、学生自らが実習準備に取り組めるようになることを掲げている。開講時期を10月～12月に設定したことで、学生が臨床実習を意識し始めるタイミングで、各授業の内容から具体的なヒントを得ながら実習準備を進められたことが、学生には興味深く、高評価に繋がったのではないかとと思われる。

反対に「理解」「知識習得」「達成感」の項目の値がやや低かった。本授業では復習に力を得ていたため、新しい知識の理解や習得には繋がらなかったと思われる。また、本授業では、実習に向けて必要とされる知識や技術を学生自らが気付き、その習得に向けて学生が動き出すきっかけを与えることを目標としているが、動き出した後の成果を授業内では手にしていないため達成感が低かったと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

肯定的な意見としては「実習に特化した授業でいよいよ実習が迫ってくるなど、危機感を持たせてくれる授業でした。」「これから実習に行くにあたって、必要だと思われる知識をたくさん学ぶことができた」「実習を意識できた点良かった。」などの意見が聞かれ、授業目標が到達できていることが伺えた。また、「3人の先生で各担当を決めて講義をしていたことが授業を通してよかったと感じた。」という意見があり、オムニバス形式での授業の進め方が良かったとも言える。否定的な意見としては「質問しやすい先生としにくい先生がいた」というものが見られた。具体的な表記ではないためその原因は分からないが、3人の教員が関わるため対応の差が分かりやすかったものと思われる。



◆今後の改善に向けて

上述の通り、本授業の到達目的は臨床実習のイメージをつけ、学生自らが実習準備に取り組めるようになることであった。学生のコメントや、業後や冬期休暇中に実習準備に励む学生の姿が見られたことから、この目標は概ね達成できたと言える。

しかしながら、学生は「達成感」が低いと評価しており、本授業内で実習に必要な知識や技術を習得することを目標としていたことが推察できることから、本授業の開始時のオリエンテーションにて、本授業の到達目標について十分に学生に説明してから授業を進めることが重要であると思われる。

また、教員によって質問のしにくさがあるとのコメントがあったが、臨床では質問しにくい場面でも質問する力が必要となるため、今後は積極的に質問することや、分からないことをそのままにしないなど、学生各自が臨床実習を見越して授業に参加することが重要であると思われる。

科目名

84.身体障害作業治療学Ⅰ

担当教員

草川 裕也

出席者数

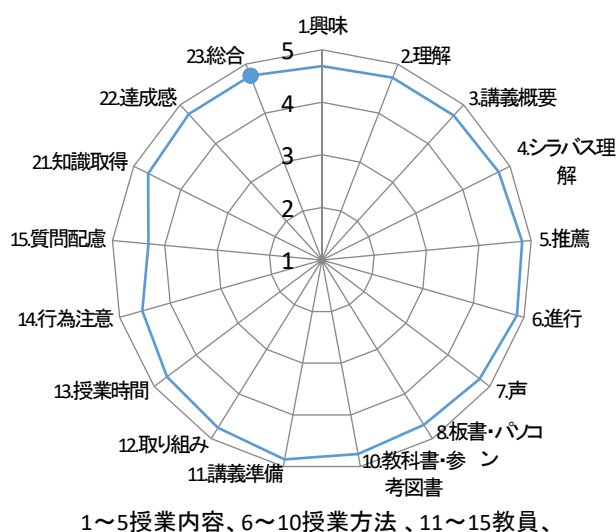
29 名

◆集計データ結果について

「質問配慮」、「目標等への意識」、「質問」を除き、平均4.5以上であり、総合的に良好な結果となった。質問を受け付ける時間は十分に確保しているつもりであったが、環境作りは不十分であったのかもしれない。また、シラバスに記載されている目標や注意を意識できていない学生がいたことは残念である。講義の初回時にシラバスの説明を行ったが、毎回意識できるような工夫が必要かもしれない。予習や復習については、毎回解剖学に関する小テストを実施していたことも影響し、予習に時間を取るが、復習にはあまり時間を取らないという傾向が認められた。授業の内容に直接関連する内容の小テストではないため、小テスト対策として、予習に偏ったと考えられる。また、予習範囲については、シラバスや初回講義時に説明を行ったため、学生も分かりやすかったと思われる。故に、復習についても範囲などを明確にし、取り組みやすくする工夫が必要かもしれない。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

グループワークで行ったこと、提示された症例について考えていくこと、資料を配布したことが良かったという意見が多かった。症例を提示し、その症例を中心に講義を進行していくという試みは、今年度より開始したが、1年生後期の見学実習で、様々な整形外科疾患の対象者と接した経験も生かすことができるため、良い試みであると考え。結果として、良い感想が聞かれたので、グループワークとともに来年度以降も継続していきたい。また、昨年と同様に、小テストが良かったという意見があった。1年生の復習に過ぎないが、重要であると認識している学生もいるため、今後も継続していきたい。もう少し時間をかけて学習したいというような意見もあったが、時間数に比べて、扱うべき内容が非常に多いため、ゆっくりと進めていくことは難しいと考える。



◆今後の改善に向けて

上記の通り、グループワーク中心の症例検討形式を来年度も継続していきたい。学生がよく考えられるよう、症例や進行の仕方についてはさらに検討していきたい。また、質問がなかなかできない理由として、授業の進行が早いということが影響していると考え。上述の通り、扱うべき内容が多く、質問を考えたり、学生自身が内容を十分に確認する時間を確保できていないと思われる。そのため、授業内容について再度吟味し、学生が十分に内容を振り返る時間を設けるようにしていきたい。また、予習や復習の課題についても検討し、講義時間が少ない分を補えればと考える。さらに、目標を意識できるように、何を理解していくのかを毎回説明する時間を設けるようにしたい。

◆集計データ結果について

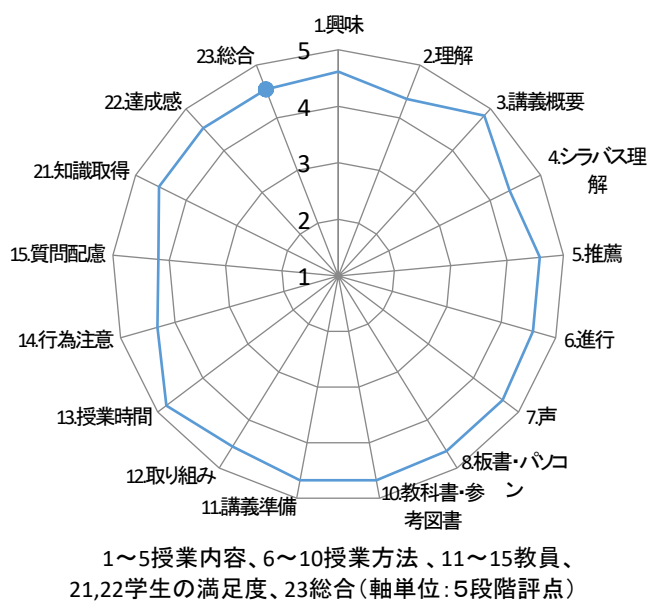
評価の平均は4.5程度であった。その中で、4.5点以下であったのは、2. 理解、3. シラバス理解、14. 行為注意、15. 質問配慮の項目であった。

理解やシラバス理解については平均を下回っており、教員が伝えようとする内容や授業目標に対する理解が不十分であった可能性がある。十分に講義の意図を理解してもらえるように配慮していく必要がある。行為注意や質問配慮についても平均に比べると点数が低くなっていたため、講義の環境を整え、学生が質問しやすくなるよう配慮していく必要がある。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

肯定的な意見としては、「難しかったが色々考えることができてよかった」「自分たちで一連の流れを学ぶことで知識が身についたのでよかった」などの意見があった。しかし、否定的な意見として、「課題の意図を理解しにくかった」「疾患について知識を伝えて欲しかった」という意見も多くあった。

本講義では、前半で、作業療法の治療に対する考え方を振り返り、後半でそれを活かして事例に対する介入を考えられるように授業を構成した。しかし、作業療法評価から治療をする根拠の考え方の講義時間が多くなり、各疾患に対する治療の講義が少なくなってしまう。それを補えるよう、事例を元に学習を進めて、疾患に限らない治療の考え方を学んでもらっていた。しかし、その意図が十分に伝わりにくく、学習が不十分になってしまった可能性がある。



◆今後の改善に向けて

講義の中で、全ての疾患に対する知識を伝えるのではなく、作業療法の治療に関する知識や技術を伝えられるように講義を構成していた。しかし、その構成において、作業療法の治療に関する知識や技術が多くなっており、身体障害特有の作業療法の知識が少なくなっていた。そのことが、学生の効果的な学習に繋がらなかった可能性がある。

まずは、授業の構成を見直し、作業療法の治療の考え方と身体障害特有の作業療法の知識をバランスよく伝えていく必要がある。それに加え、教員がどのようなことを学んでもらいたいのか、それが今後の作業療法にどのような影響を与えるのかを講義の開始時に伝える必要がある。事例をもとにしたグループでの学習は、肯定的な意見もあったことから今後も継続していきたい。その際には、課題を設定した意図やどのような学習を進めていくのかがわかりやすくなるよう、課題の設定や事前の知識の提供を行っていく。

科目名

86.身体障害作業治療学実習

担当教員

清水 一輝

草川 裕也

加藤 真夕美

出席者数

28 名

◆集計データ結果について

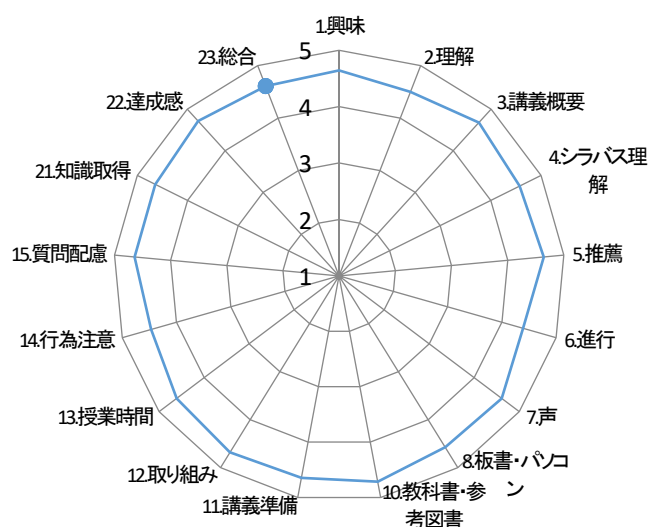
授業内容、授業方法、教員に関する項目で「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の合計が8割以上であり、おおむね学生のニーズに沿った授業が展開できたと考えている。授業の進み具合に関しては数名の学生が不満を提示しており、今後の課題である。

また、熱心に取り組めたという学生がほとんどであり、シラバスに記載されている「学習到達目標」や「履修上の注意」を意識して取り組んでいるようであったが、質問ができなかったという学生が2割いた。また、実技試験を必須とする科目にも関わらず、復習時間がまったくない学生が約1/3、1時間未満の学生を合わせると半数以上となった。毎回の授業で予習復習の大切さを学生には伝えていたが、復習としてコツコツ行えた学生は少なく、試験前に時間をかけて取り組む学生がほとんどであった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

たくさんの知識を得られた、勉強になったという感想があったが、時間を増やしてほしい、もう少し説明してもらいたいという意見も多かった。上記の通り、授業の進み具合に関しては、満足できない学生がいることから明らかであるが、授業の展開の早さや実習時間が短いという点が影響していると考えられる。授業終了後の試験準備で実技練習の時間を補っている部分が多いため、出来るだけ実習中に個別に対応し、技術の確認をしたり、配布資料で復習できるようにしたりする工夫が必要であると考えられた。

一方、「3人の教え方や検査方法などに違う点がありました」という意見もあり、教員間での測定手技に関する確認は必要である。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

授業内容や方法に関しては、概ね本年度のものを引き継いでいければと考える。しかし、授業の進み具合については今後検討が必要である。授業開始時に、試験内容や試験で求めるもの、学習到達目標をより具体的に明確にし、それを基に、できるだけ簡潔に説明を行い、可能な限り実習時間を確保できるようにしたい。そして、授業時間中において、質問や技術の確認を個別に十分に行えるようにしたい。また、なぜ評価実技の修得が必要なのか、臨床実習や専門職としての意味づけを折に触れて、繰り返し学生には伝えていき、授業時間中から積極的に実技の実習を行う姿勢を引き出していき、加えて復習を学生同士でこまめにやっていけるようにできればと考える。

科目名

87.精神障害作業治療学

担当教員

美和 千尋

出席者数

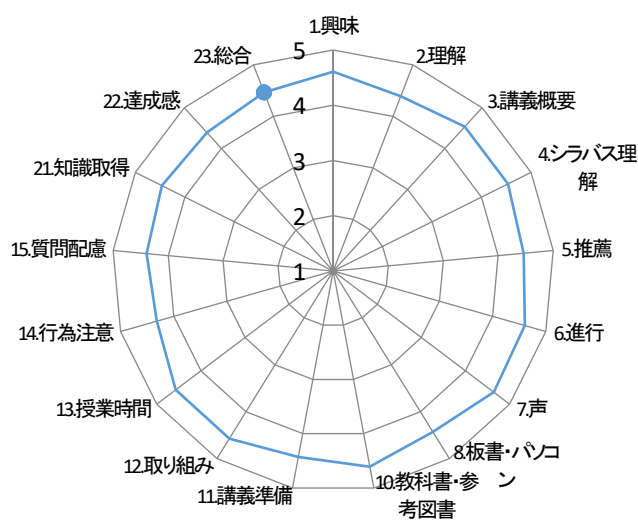
28 名

◆集計データ結果について

難しい授業内容であったが、評価は全て、平均④「どちらかといえば、取り組めた」であった。学生が取り組める内容になっていたと思われる。その理由として、丁寧に講義の項目を説明したことが良かったと思われる。今後ともこのような事業の進め方が必要と感じる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載については、1) 良い点では、「わかりやすくて良かった」「興味があったのもあって、とても有意義な授業だった。」「精神障害について具体的な症状や作業療法について学ぶことができて良かった」「沢山の知識を得る事が出来た」などであった。反面、「難しいです」「教科書を読むことだけでなく、プリントやパワーポイントを使うなどして授業を進めてくれると私はもっと理解しやすいものになったと思った」「テストを問題形式にしてほしい」であった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

精神障害の作業療法を歴史的、構造的に教えた。また、各疾患について病態および作業療法を説明する形で行った。以下、今後、改善する点を記入する。

1. 資料、パワーポイントなどの工夫をして行う。
2. 難解な部分においては時間をかけて説明する。
3. テストの作成の検討をする。

科目名

88.精神障害作業治療学実習

担当教員

横山 剛

出席者数

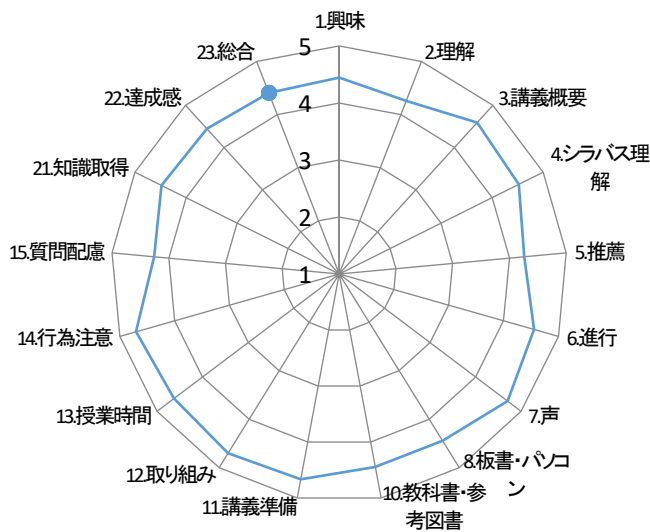
27 名

◆集計データ結果について

概ね4～5点であり、意図していたことが教授できたのではないかと考えている。今年度授業では、次回の授業までに1回は担当教員のフィードバックを受けて、評価のまとめ、次回評価計画、統合・解釈などの時間を授業外で義務付けた。そのため、学生の理解が進み、また深まったのではないかと考えている。そのため、予習・復習の時間をまったく設けていない、ということはないはずであるが、そのような理解になっていない学生が5～8名いるということなのであろう。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

非常に好評な授業であったと考えている。青年期課題に焦点を当てて学生同士評価し評価されるという体験は、教員がフィードバックする中で行うことは非常に有意義なのであろうと考えられる。「自身について理解する」といった青年期の心理社会的発達課題に学生が喜んで取り組んでいる授業科目となったことを大いに評価している。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合 (軸単位: 5段階評点)

◆今後の改善に向けて

今後も青年期学生の心理社会的発達課題に着目して授業を展開し、対象者理解のためのレディネスとしての授業を展開していく。十分に取り組むことが困難な学生に対しては柔軟に対応することが今後の課題である。

科目名

89.発達障害作業治療学

担当教員

加賀谷 繁

出席者数

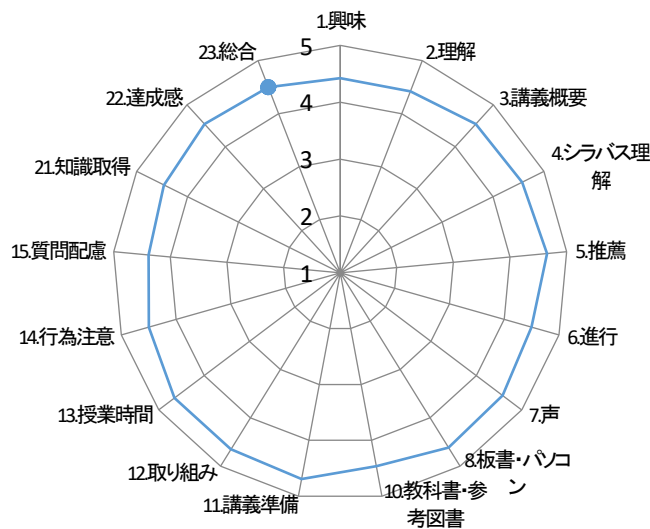
26 名

◆集計データ結果について

評価結果からすると、概ね学生に講義内容が理解してもらえたものと思われま。作業療法による発達障害児への関わりは、学生からするとイメージを想定することが難しいことを今までの講義経験を通じて感じています。しかし、今年度は講義内容やその進め方が学生自身の成長と上手くかみ合い、発達障害児に対する作業療法のイメージが伝わり理解につながったものと考えられます

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「小児分野のイメージが持てた」「発達障害児の特徴からアプローチを考える過程が、グループワークや実技を通じて理解しやすかった」などの関連した記載が多く、発達障害児に対する作業療法としての関わりがイメージしやすくなったものと思われま。ただし、一部には「難しかった」という記載もあり、毎回の講義において、学生の理解状況を学生が表出しやすい環境づくりが必要であると感じた。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

評価からすると講義の方向性は大きく変更する必要はないものと考えられます。作業療法として発達障害児を対象とした関わりが、作業療法として介入の視点は同じであることを理解してもらえるように、グループワークや実技を通じて出来るだけ具体的に学生に提示し理解を深められるように授業の工夫をしていくことを考えています。

科目名

90.発達障害作業治療学実習

担当教員

美和 千尋

清水 一輝

田原 靖子

出席者数

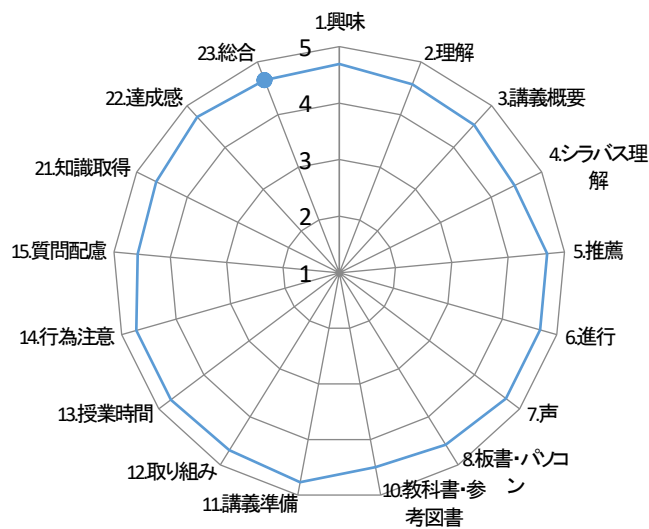
26 名

◆集計データ結果について

平均は4.5点以上であり、全ての項目で4.5点以上であった。集計結果からは良い評価ができるのではない。しかし、実習を通じて園児と触れ合って楽しかった経験が評価に繋がっている可能性もあるため、実習の経験がどのような学びに繋がっているかを確認していく必要はあると考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

肯定的な意見が殆どであり、「園児との関わりの中で学べた」「計画を立てることで発達段階を考えることができた」など、園児との交流の経験が学びにつながっている様子がうかがえた。肯定的な意見の中には「園児とのふれあいが楽しかった」など、交流することから学生がどのような学びに繋がったのか疑問に残る部分もあった。芋掘りの実習について「草取りなど収穫までの経験も一緒にできると良いのではないか」という意見もあった。学生が園児にとって良い経験になるよう、実習の形態まで視野を広げて関わってもらえたことはよかったのではない。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

学生からの評価も概ね好評であり、自由記載でも肯定的な意見が多くあったため、今後も同様の形式で実習を進められると良いと考える。その中で、今回と同じように、園児とかわる貴重な機会であるため、実習する楽しさだけでなくそこからどのような学びができるのかを学生に意識してもらいながら実習ができるような環境を整えていきたい。

科目名

91.老年期作業療法学

担当教員

山下 英美

出席者数

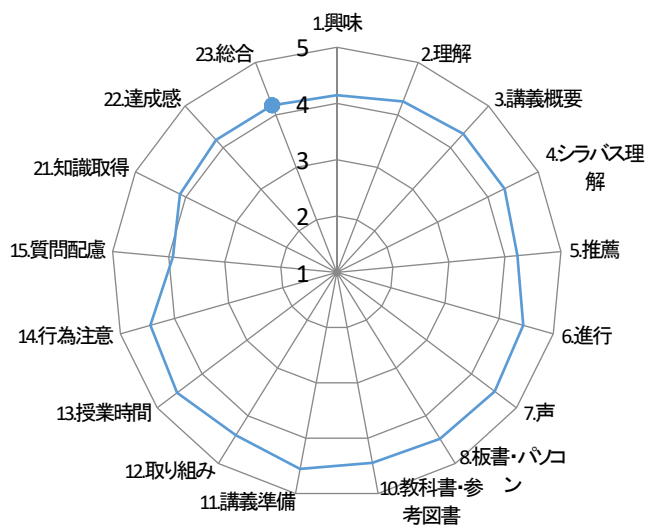
27 名

◆集計データ結果について

概ね4点台前半でありどちらかといえば良いという評価であった。しかし「質問配慮」は3.9点であり、学生が質問や意見を述べられる環境に関して、今後は改善が必要である。学生の取り組みとしては「目標などを意識して取り組んだか」はどちらかといえば取り組んだ・取り組んだが6割程度、「熱心に取り組んだか」は8割程度であったが、「質問したか」は6割が質問しなかったと答えている。これは、先述の「質問配慮」に関係があると考えられる。予習・復習に関しては、全くしなかった者がそれぞれ6割強・5割弱であり、家庭学習が行われていなかった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

評価を実際に行い、フィードバックし合ったことに関して、「フィードバックをお互いにすることで自分の悪いところに気づけたので良かった」「気をつけることなどが分かった」「実習に生かせるので良かった」といった記載があり、フィードバックを組み込んだ演習の効果があつたと考えられる。また「プリントがたくさんあってよかった」「いろいろな資料から文献を拾ってきてたくさんの文献から学ぶことができたのでよかった」といった記載もあり、教科書以外の知識を広げるための視点を示すことができたと考える。さらに「認知症について詳しくやって、認知症について以前よりもわかるようになった」「これからの実習に役立つ、お年寄りとの関わり方などの話が聞けてよかった」といった記載があり、自身の研究や臨床での経験を授業に生かすことができたと考える。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

これからも、評価の演習など、アクティブな学習ができるように授業を組み立てていきたい。また、自身の臨床での経験はもとより、研究活動で得た認知症や介護予防・認知症予防に関する知識を、授業の中に取り入れていきたい。質問しやすい環境に関しては、今後とも引き続き留意していきたい。家庭学習の不足に関しては引き続き促していきたい。

科目名

92.日常生活作業学 I

担当教員

加藤 真夕美

出席者数

21名

◆集計データ結果について

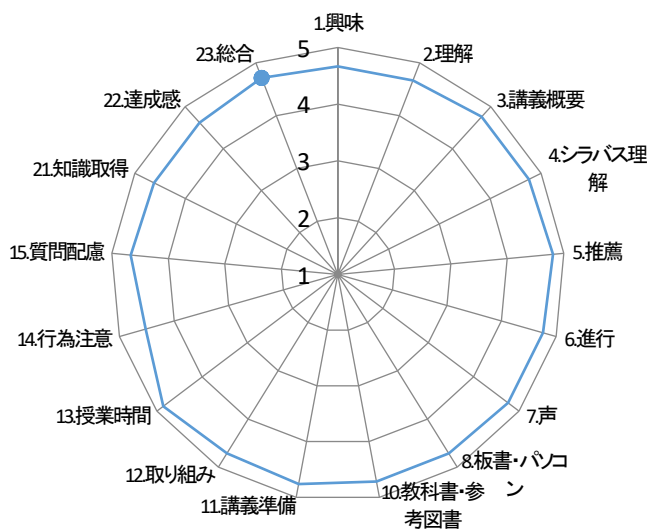
すべての項目で平均4.5以上であり、バランスの取れた評価であった。毎回簡潔に授業内容をまとめたレジュメを配布し、授業中はマイクを使用した。また随時、作業療法関連の雑誌から日常生活活動(ADL)に関する研究論文を探し出し、レビューするという個人ワークも取り入れた。

1年次の授業ではあるが、この科目で習得する知識は、今後作業療法を学ぶ上での基盤となるため、基本的な事項はすべての学生にもれなく押さえてもらいたいということが、担当教員としての願いであった。そのため、極力言葉を噛み砕き、学生らの身近な経験に引き寄せて考えてもらい、ポイントは何度も授業内で振り返った。それらの工夫が、バランスの取れた評価に繋がったと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「わかりやすく説明してもらえた」という教授方法に関すること、「ADLについて様々なことが学べて楽しかった」「人にとっていかにADLが必要かがよくわかった」という授業内容への興味に関することなど肯定的な意見ばかりであった。

特に「図書館で事例を調べることによってこんなアプローチもあるのかという発見ができてよかった」「文献をあまり読む機会がないので、読めて面白かった」と、文献検索に対する興味について書かれた感想が多かった。スマホ世代の学生らに、図書室でのハンドサーチやラーニング commons の利用に対する抵抗感を1年次から減らし、上の学年での学習へ繋げられないかという思惑があり、学生にも常にそのように説明してきた。随時の文献検索は、そのきっかけ作りとして役立ったのではないかと考えている。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

今年度初めて受け持った授業ということもあり、試行錯誤しながらの15コマであった。科目試験の結果を見ても、授業中に強調したことがらはしっかりと押さえてあり、必要最低限の知識は身につけて頂けたと思う。レジュメやマイクの使用、授業構成についても特筆すべき指摘がなかったため今年度の授業方法を踏襲しつつ、授業をよりよいものに構築していきたい。

また今後これらの知識が臨床実習や2年次の専門科目の授業で使っていける知識として成熟していくかを、つぶさに見守っていかねばならない。彼らの2年次の学習の様子を踏まえ、当授業の構成を改めて考えていきたい。

科目名

93.日常生活作業学Ⅱ

担当教員

堀部 恭代

出席者数

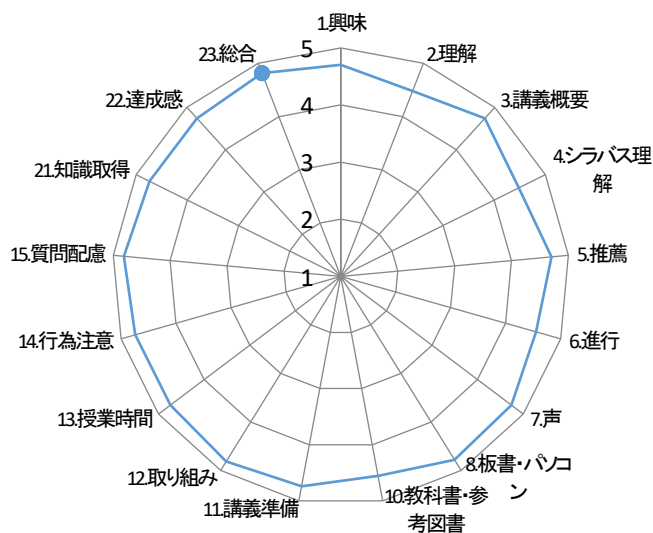
27名

◆集計データ結果について

平均して4.7と高評価であったといえる。特に値が高かった項目としては「取り組み」「質問配慮」といった、教員の態度に関するものであった。反対に値が低かった項目としては「理解」「シラバス理解」であった。本授業では模擬事例の日常生活作業の評価、介入、治療を作業療法プロセスにて検討する内容であったが、「理解」に個人差があり、進捗状況に合わせて、学生からの質問を多く受け、全体の前で質問に答えるなど、シラバスの内容を変更して進めることもあった。このため、「シラバス理解」が低い値になったものもと考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「質問のしやすい雰囲気づくりや、わからないことを明確にでき、またそれを解決するのもとてもできる授業だった。また、教師の言葉や姿勢も生徒全体をひきつけるようなとても良い授業だった。」
 「難しいことをやったけど、絶対に必要なことを学んだ達成感が大きいです。」など、高評価である一方、「一つの授業でやることがたくさんあったので学びを増やすために二単位にしてほしいと思いました。」
 「もう少し余裕のあるスケジュールだと助かります」「実習につながる授業でとてもわかりやすかったが、スピードがかなり早く大変だった。2時間続けての授業がきつかった。」など、授業内容で取り合う使う内容が多く、学生にとっては負担の大きな授業であったことも伺えた。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

本授業は、模擬事例検討を通して作業療法プロセスを学ぶことを到達目標としている。また同時に、統合と解釈の文章化や、レジュメ作成といった、実習で必ず求められる経験を積むことも課している。

いずれについても未経験な学生にとっては、負担が大きい講義であったと思われる。模擬事例を検討する授業や、統合と解釈の文章化、レジュメの書き方など、臨床実習にむけた取り組みができるような授業を別枠で検討することも必要であると思われる。

科目名

94.日常生活作業学実習

担当教員

堀部 恭代

出席者数

22名

◆集計データ結果について

平均値が4.8であり、高評価であったといえる。特に数値が高かったのは、「講義準備」「取り組み」「質問配慮」であり、教員の講義に対する姿勢に対するものであった。これは、6種の事例を用意したこと、模擬事例を用いて作業療法プロセスが検討できるように講義の進め方を工夫したためと考える。

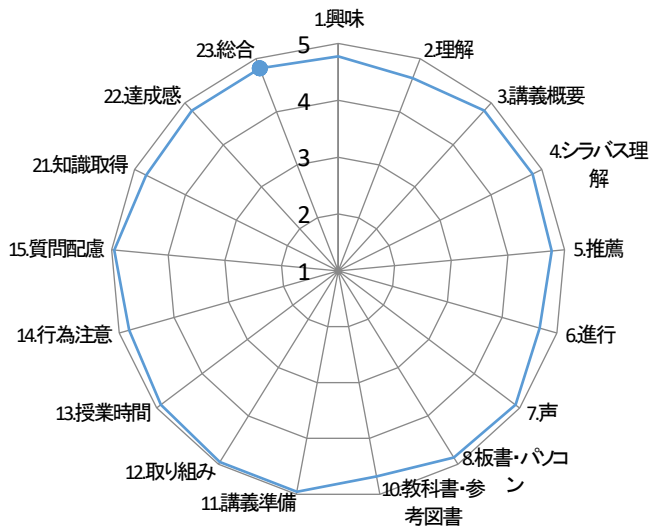
反対に数値が低かったのは、「理解」「進行」であった。本実習では模擬事例に対し、作業療法評価、統合と解釈、介入計画という一連の作業療法プロセスを経験するが、学生にとってこのような経験は初めてであるため、理解が難しかったのではないかと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

ポジティブなコメントとしては「評価を実際に行いながら治療プログラムを立てたりと実習に向けた授業だったのでよかった」「授業の雰囲気がよくわからないことを質問しやすい雰囲気だった」「説明がとてもわかりやすく理解しながら授業を受けることができた」があった。

ネガティブなコメントとしては「進むスピードが速かった」「授業では全体論的な視点からの話が多かったので、もう少し還元主義的な視点での考え方も学びたかった」「もう少し噛み砕いて話してもらえたら理解できたかなと思う」があった。

集計データでは「理解」について評価が低くあったが、実際のコメントでは、理解しやすかったという内容と、理解しにくかったという内容があり、学生個々の理解に合わせた内容になっていなかったのではないと思われる。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

これまでの結果を踏まえて、以下に今後の改善案を検討する。

- ・理解できていない学生に対して補講を行う。

本講義は、面接・検査測定、情報の統合と解釈、介入計画の立案の3つを主軸としているのだが、各テーマが終わった際に小テストを設け、成績不審者に対して補講を行う仕組みを作ることが必要と考える。

- ・カリキュラムの検討

学生が実習前に模擬事例に対して、部分的ではなく、一連の作業療法プロセスを検討する機会があまりに少ない。

実習対策の時間を設けるなどして、各領域の模擬事例検討を実施することが必要と考える。

科目名

95.高次脳障害作業治療学

担当教員

加藤 真夕美

出席者数

27名

◆集計データ結果について

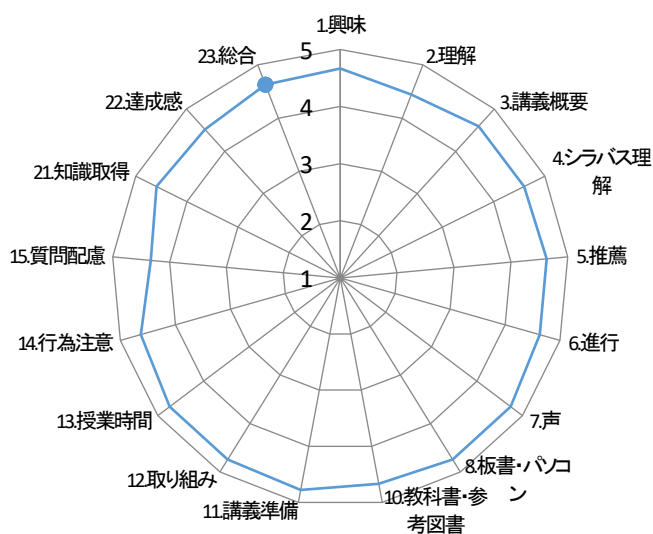
すべての項目で平均4.5点前後であり、バランスのとれた評価であった。本科目の授業準備や進行で工夫していることは、①わかりやすく、後に活用できるレジュメを作ること ②演習を取り入れること ③関連論文を学生一人一人に探してもらうこと の3点である。①については、臨床実習や国家試験を念頭に置き、ポイントをわかりやすく示すことを意識した。また②についても同様に、臨床実習や国家試験で体験を生かせるよう、できる限り多くの演習を限られた時間の中で盛り込んだ。

学生の取り組みについてはほとんどの学生が質問16, 17, 18に「取り組んだ」あるいは「どちらかといえば取り組んだ」と回答していた。予習・復習状況は約7割の学生が「少しは勉強した」と自覚していた反面、残りの3割は皆無と回答していた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

昨年度の授業評価では「マイクを使っても離れているせい聞き取れないことがあった」「とても内容が濃くて良かったのですが、もう少しペースを落としていただくと理解しやすかった」「ビデオがあれば見たかった」との意見があった。それに対して今年度は、声はマイクを使いつつゆっくりはっきり話すよう心がけ、授業も学生の進行状況を見ながら進めた。ビデオは使用しなかったが、演習の仕方を工夫したり、臨床での経験談を適宜入れることで、上記の指摘は今年度はいずれも記述されなかった。

今年度は「文献検索をして情報を得ることができてよかった」「検査法を学生同士で行うことで身についた」「現場での話がわかりやすく楽しく受けることができた」と、授業の方法に関する肯定的意見が多数挙げられた。一方「脳の中は難しいだけに、理解するのが時間がかかる」「高次脳の難しさを知った」との意見が挙げられた。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

本授業の受け持ちが2年目となり、教員自身も、様々なことのタイミングや、学生が何に興味を持ち、何に躓きやすいかが少しずつわかってきたので、昨年度よりは先を予測しながら授業を進めることができた。

高次脳機能の領域は難しいとよく言われるが、難しいからイヤだ、ではなく、難しいからこそおもしろい、そう思ってもらえるような、高次脳機能の入門編としての位置づけの授業が展開できたらと思っている。上記に紹介した「難しい」と自由記載した2名の学生も、「だからイヤだ」と文章が続いていないのが救いである。学生が逃げず、難しいが近づいてみようと思ってくれるような工夫を更に試行していきたい。

科目名

96.義肢装具作業療法学

担当教員

草川 裕也

出席者数

29 名

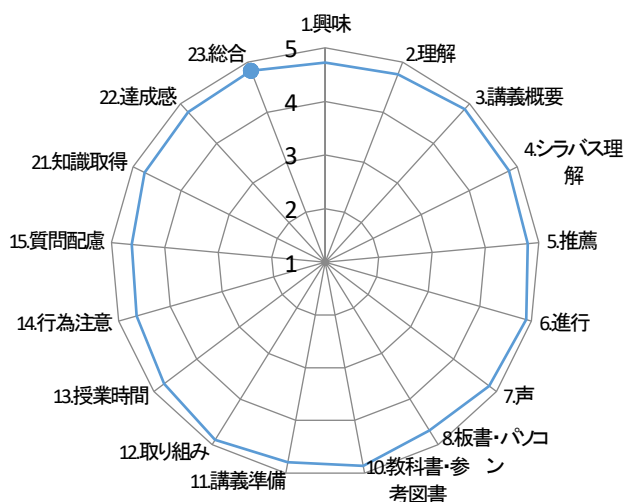
◆集計データ結果について

「目標等への意識」、「質問」を除き、平均4.5以上であり、総合的に良好な結果となった。質問を受け付ける時間は十分に確保しているつもりであったが、環境作りは不十分であったのかもしれない。また、シラバスに記載されている目標や注意事項を意識できていない学生がいたことは残念である。初回講義時にシラバスの説明を行ったが、毎回意識できるような工夫が必要かもしれない。予習や復習については、毎回解剖学に関する小テストを実施していたことも影響し、予習に時間を取る傾向が認められた。授業の内容に直接関連する内容の小テストではないため、小テスト対策として、予習に偏ったと考えられる。また、予習範囲については、シラバスや初回講義時に説明を行ったため、学生も分かりやすかったと思われる。故に、復習についても範囲などを明確にし、取り組みやすくする工夫が必要かもしれない。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

グループワークで授業を進めたこと、義肢や装具の実物や写真などの補助資料を用いたことが良かったという意見が多かった。昨年度も実物を使用したことが良かったという意見が多く、興味や理解を深める上で、実物を実際に見たり、触ったりすることは重要であると考えられる。また、国家試験において、義肢・装具については、図や写真を用いた設問が多くあるため、視覚的にも印象に残るような講義を実施していければと考える。

こちらから説明する講義形式よりも、グループワークで検討して理解していくという形式が良かったという意見があったため、説明する時間ばかりでなく、学生が考えていく時間を十分に確保するようにしたい。今後もこのような形式を継続していきたい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評価)

◆今後の改善に向けて

グループワークを中心に進める講義、義肢や装具の実物を用いることは今後も継続していきたい。グループワークを通して、意見交換をしながら考えていくという形式が良かったという意見もあるため、グループワークを有効に活用できるよう、課題の内容やグループワークの進め方などの詳細をより具体的に、十分に検討していきたい。質問についても、グループワークを通して確認したり、グループごとに質問を確認するなど、質問を行いやすい場面作りをしていきたい。また、目標を意識できるように、何を理解していくのか、毎回説明する時間をしっかりと設けるようにしたい。学校で保管している義肢や装具については、古いものが多く、機能的には問題がないが、破損しているものがいくつかあるため、修復などについて検討していくことが必要と考える。

科目名

97.義肢装具作業療法学実習

担当教員

草川 裕也

出席者数

25 名

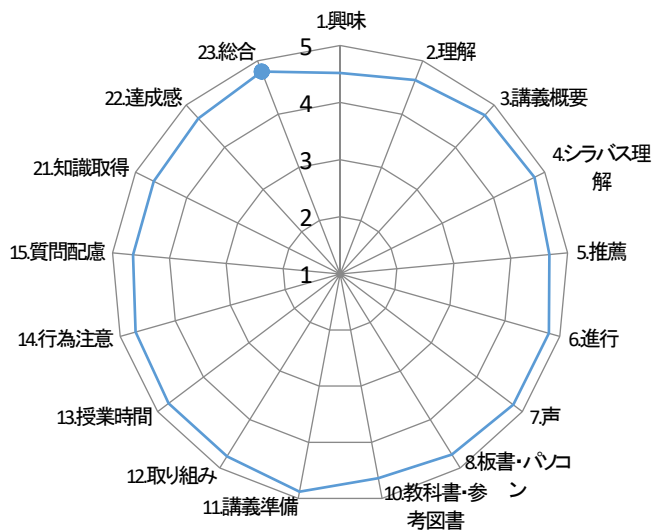
◆集計データ結果について

ほとんどの項目において4.5以上となり、総合的に良好な結果となった。装具を製作するという普段の授業内容とは異なる活動も盛り込まれており、楽しみながら取り組むことができたと思われる。一方、予習や復習を全く行わなかった学生が1/3程度いたことが残念である。予習内容については、シラバスに教科書の範囲と合わせて記載してあるが、授業の中で積極的に伝えていなかったため、このような結果になったと考える。また、予習や復習を行っていた学生も、小テストの準備のためや提出物作成のための学習になっていた可能性があるため、授業内容の理解や目標達成を意識した学習に繋がられるよう、目標を提示したり、こまめに説明していきたい。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

装具を作るという体験がよかった、楽しかったという意見が多かった。装具を実際に作ることが、名称を覚えたり、利点・欠点などを理解したりすることのきっかけとなるため、装具製作は今後も継続していきたい。装具製作については、一昨年より担当教員数を減らしているが、配布資料を準備したりすることで対応できていると思われ、学生から不満などは聞いていない。装具製作以外の授業についても、グループワーク中心の授業形態や症例に関する資料を用いた学習方法に関しては肯定的なコメントがあるため、今後も継続していきたい。

一方で、装具製作の際には、城南キャンパスで実施しなければいけないという点について不満があるようだが、道具や設備の面から変更は難しい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

装具製作についての反応は良かった。装具製作を通して、装具の機能を考えたり、手の構造や特徴を考えたりできるため、装具製作をできる限り増やす方向で考えていきたい。実際の装具製作については、特別な材料が必要となるため、一昨年よりアルミホイルを使用した模擬的装具製作を実施している。しかし、本年度はその時間を多く設けることができなかったため、その時間を増やせるように検討していきたい。

グループワーク中心の授業形態や症例に関する資料を用いた学習方法については、今後も継続して行う予定であるが、国家試験において、義肢・装具の問題に苦勞している学生が多いため、授業理解や目標達成を意識した学習を促し、知識の定着や理解を深められるよう促していきたい。

科目名

98.作業科学

担当教員

堀部 恭代

出席者数

28名

◆集計データ結果について

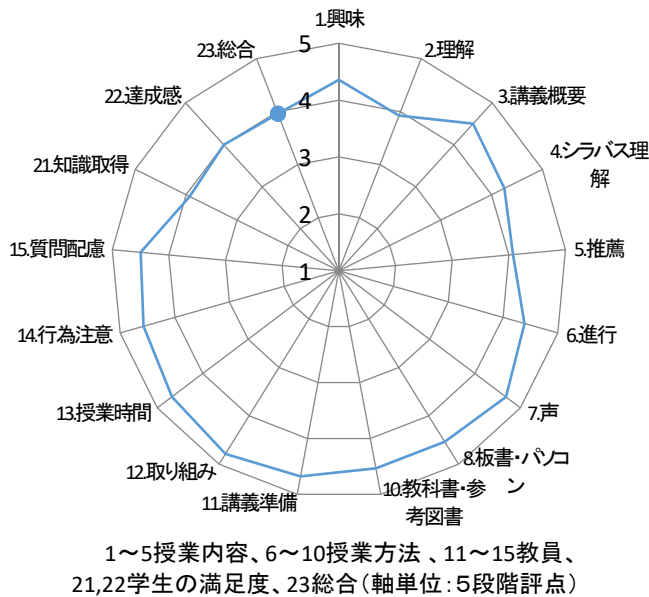
平均して4.3の評価であった。最低の項目としては「理解」「知識習得」であった。この科目は今年度初めて担当したものであり、学生にとって何処が理解しにくいのか、何処で躓くのが分からず、短い時間の中で多くの内容を伝えようとしたため「理解」「知識習得」の項目が低かったものと考えられる。また、本学の作業科学の授業時間数は15時間であるが、他学では30時間であることが多い。授業内容を検討すると共に、授業時間数を増やす検討が必要と思われる。また「達成感」が低く、これは理解できず、知識の習得が不十分であったことから達成感が低かったことが考えられる。

一方、高い値の項目としては「取り組み」「声」が挙げられた。受講した学生からみて教員の態度が高評であったことが伺える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

肯定的な記載内容としては「作業療法士になった時に必要な知識や考え方であると感じた」「作業科学の心を忘れてはいけないと思った」「自分で作業科学を体験できたため講義の内容がわかりやすかった」「授業の伝え方がとてもわかりやすく内容が入ってきやすかった」という内容があり、否定的な記載内容としては「国試勉強の時間が削られた」「この時期にレポートで評価されるのはしんどい」「課題に苦労した」などの内容があった。

また、「プライバシーなことを根掘り葉掘り聞かれた印象がある」との表記があった。本授業では学生の主観的な体験を通して作業を理解してもらうことを狙い、授業を進めていたが、“根掘り葉掘り”という表現から不快感を抱いたことが推察される。主観を通して作業を理解することは、将来、作業療法士として対象者を理解することに繋がる大変重要なことであると考え、今後はそのような旨を学生に説明した上で授業を進める必要があると思う。



◆今後の改善に向けて

今回、学生からのフィードバックを受け、授業内で行う内容を吟味して絞込まなくてはならないことがよく分かった。

また、一方で現在、日本作業療法士協会が検討を重ねている作業療法の定義の中で、作業療法は「作業に焦点を当てた治療、指導、援助」という文言で表現されている。このことから、作業療法士が作業について理解していることは基本であり、作業科学は作業療法の基礎学問であるとも言える。

上述のように、今回の授業評価には国家試験勉強を行う時期にこの授業を行うことへの否定的な意見がみられている。このようなことから、作業療法にとって重要な科目を3年次の国家試験前の短期間に開講するのではなく、1年次から開講時間数を増やし、時間をかけ学生たちに伝えていく必要があると思われる。

科目名

99.人間作業モデル論

担当教員

美和 千尋

出席者数

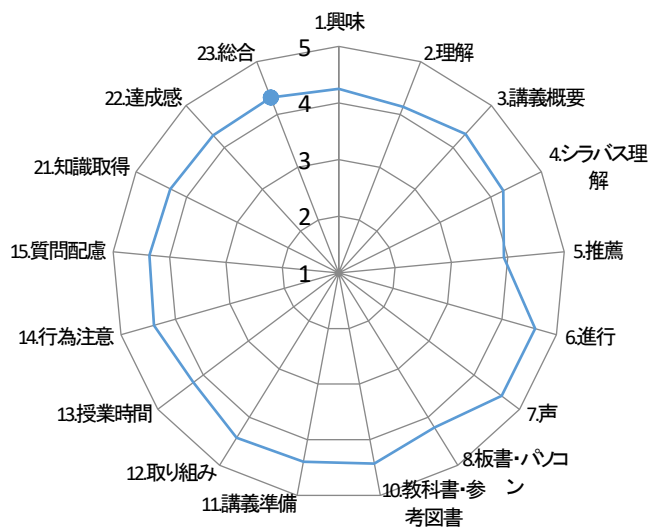
28 名

◆集計データ結果について

全体的な評価は「後輩に推薦する」が④以下であったが、他は平均④「どちらかといえば、そう思う」以上であった。授業は概ね学生の期待に添えたものであったと考える。後輩に推薦するが低かったのは、3年生のこの時期に行う必要があるかなどの意見によるものかと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由欄の記述では、良い点として「人間作業モデルについて深く知れたので良かったです。これからは勉強していきたいと思いました」などの意見が聞かれた。悪い点として「この時期にやる必要があったか疑問です」「感想や発表だけの採点は、あまり良くないと思い、筆記を取り入れて欲しい」が挙げられていた。3年生のこの時期に行った内容として検討する必要があると考える。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

以上の集計データと自由記載欄の事項を踏まえて、以下のような改善を行っていききたい。

1. 授業の時期の検討を行う。
この授業は、3年生の後期に用意されている。これは、カリキュラム上この時期にしか入れられないことある。ただ、授業内容に実習のレポート作成があり、この点においてももう少し早い方が良いかもしれない。
2. 評価様式をテストなどを加える。
3年生の後期の授業のため、授業中の評価を重要にしており、あえてテストは、テスト期間で行っていない。学生からの要望を加味して、再度検討する必要があるだろう。

科目名

100.リハビリテーション関連機器

担当教員

清水 一輝

出席者数

29 名

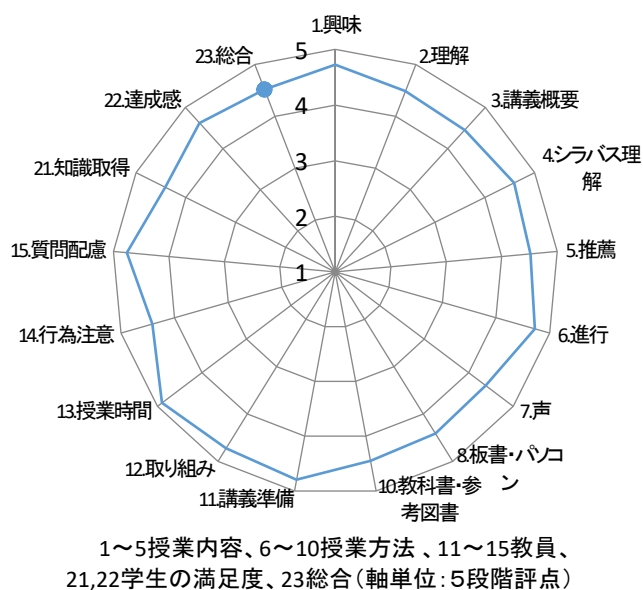
◆集計データ結果について

平均して4.5程度の評価であった。その中で4.5以下であった項目は、7.声、8.板書パソコン、10.教科書・参考図書、14.行為注意、21.知識習得であった。

7.声に関しては自由記載でも指摘する声があったため、今後配慮が必要であると思われる。8.板書パソコン、に関しては、講義の中で使用する機会は少なかったが、学生の顔が見えるようにと考えて照明をつけた環境で行なっていたことが影響していると思われる。10.教科書・参考図書については、学生がグループワークの中で使用してもらえようと考えていたが、講義形式で用いていなかったことが要因と考えられる。14.注意喚起については、学生が自ら考え動くことを優先していたため、教員の介入を控えていたが、それを良く思わない学生もいることがわかったため、他の学生の様子に配慮しながら講義を進める必要があると感じた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

肯定的な意見としては、「グループごとに疾患についてや、リハ関連機器について学ぶことができ理解が深まりました」「グループで課題に取り組むことで自分以外の人の意見を聞くことができたため、よかった」「自分たちで調べてレポートを作成していくのは、わからないところがはっきりするので調べる力がついたと感じる」など、本講義で事例を通したグループワークを中心に行ったことで、各自の学びが深まった様子が伺えた。一方、否定的な意見として「説明をもう少ししっかりして欲しかった」「何が重要かわからなかった」「グループレポートの課題が難しかった」などがあり、学生主体で進めてもらおうと思いき教員からの知識の提供や課題の詳細な説明を控えていたが、それが知識の習得につながらなかった可能性がある。



◆今後の改善に向けて

本講義では、グループワークを主体としており、学生同士で学ぶことを狙いとして行ってきた。自由記載でも肯定的な意見があり、その意図を理解できた学生にとっては学びが多いものであったと思われる。しかし、その意図が十分に伝わっていない可能性が今回の結果を通して明らかになった。知識習得に対する評価が低かったことも、その意図が十分に伝わらず、自身で学ぶことに繋がりにくかったことが要因であると推測できる。今後は、課題について学生の理解を促せるような支援を行い、学生自身で学びやすい環境を整えていきたい。それに加え、教員から知識を提供する機会が少ないことに対する意見もあった。知識を提供する講義形式での構成も検討しながら改善に向けて取り組んでいきたい。

科目名

101.地域作業療法学

担当教員

山下 英美

出席者数

29 名

◆集計データ結果について

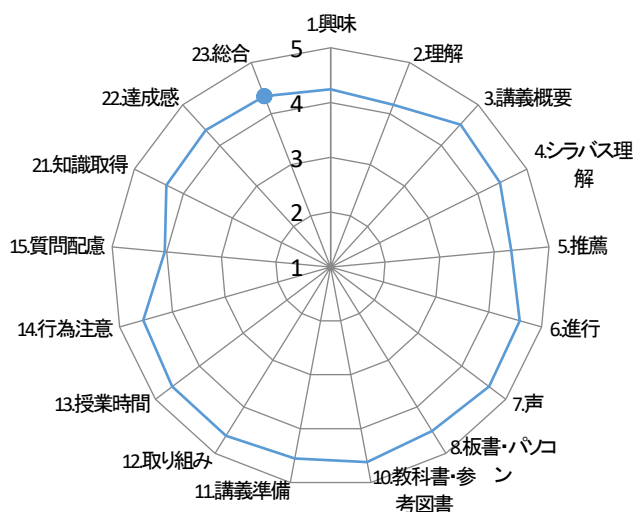
概ね4.5点前後となりある程度の評価を得ることができたと考える。しかし「質問配慮」は4.0点であり、改善の余地があると思われる。学生の取り組みとしては「目標などを意識して取り組んだか」「熱心に取り組んだか」は、どちらかといえば取り組んだ・取り組んだを合わせると、どちらも80%前後となった。しかし「質問したか」は70%程度が質問しなかったと答えている。予習・復習に関しては、全くしなかったものがそれぞれ70%・45%であり、多くの学生が家庭学習をしなかったと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

グループで領域ごとにまとめて発表する時間を設けたが、「グループで取り組むことでいろいろな観点から知識を得ることができた」「実際に自分たちで症例についてまとめたので、より理解が深まった」「書いたり誰かにわかりやすく説明するために考えるのは内容も良く頭に入ってきている」というような記載が複数みられ、アクティブな学習の効果が見られたと考えられる。また「資料があり分かりやすかった」「介護保険制度について曖昧だったが良く分かった」といった記載も複数あり、ともすると敬遠されがちな制度面についても理解が深められたと考えられた。しかし、「内容が難しかった」という記載はやはり見られ「他の知識がなかったので、後期にあるといいなと思いました」との意見もあり、授業時間の配置に関して、検討の余地があると考えられた。最後に「新しい分野を知ることができた」「今後役に立つことだと思う」「訪問リハについて興味を持つことができた」といった記載もあり、医療の現場だけでなく今後の活躍の場としての地域OTに関して、興味を膨らませることができたのではないかと感じた。

◆今後の改善に向けて

今後もグループワークを取り入れ、他者に伝える体験を授業に組み込んでいきたい。授業時間の配置に関しては、講義中も感じていたことであり、来年度の講義日程調整の際には、後期への配置を検討していきたい。敬遠されがちな制度面に関しては、引き続き分かりやすく伝える工夫を行っていく。これからのOTの活躍の場として、官学連携事業での介護予防の実践状況の紹介なども、自身の経験に基づき授業に取り入れていき、学生の興味につなげていきたい。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、
21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆集計データ結果について

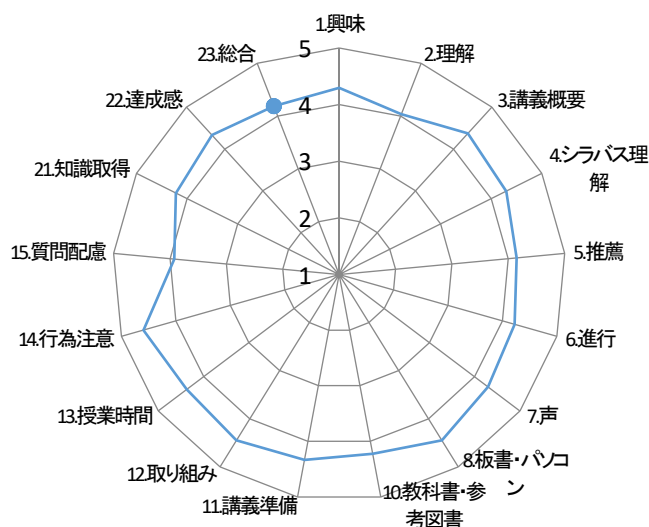
概ね4点台前半で、どちらかと言えば良いという評価であった。しかし、「質問配慮」の得点が低く、改善の余地があると考えられる。学生の取り組みについては、「目標を意識して取り組んだか」「熱心に取り組んだか」については、どちらかと言えば取り組んだ・取り組んだを合わせると80%前後となり、レクリエーションを学生のグループで計画し、実際にデイケアセンターで実施するという授業の特性が現れたと考えられる。しかし、「質問をしたか」については、したものが40%に留まった。これは、先述の質問配慮の得点が低いことと関連があり、環境面での配慮が必要であると考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

実際にレクリエーションを計画し実施することにより、「実際に計画を立てないと分からないことがわかった」「計画する難しさを知った」「自分たちで大事なことを探すのはしっかり考えてできるのでよかった」「思ったより大変だということが分かった」というように、自分たちで考える機会が得られたことは有意義な授業であったと伺われた。「色々な経験ができてよかった」という記載も複数あり、「実習でも活かしていきたい」「対象者に配慮しなければいけない点がたくさん学べた」というように、今後に繋がる学習ができた学生もいたようである。また今年度から、官学連携事業の「清須市民げんき大学」受講生の演習にも参加する時間を設けたことにより「げんき大学の实習に参加できてよかった」「地域の方々と直接接する場面が何度かあり、とてもいい経験になった」といった記載もあり、学習に広がりができたと考えられる。

◆今後の改善に向けて

来年度も引き続き「清須市民げんき大学」受講生の演習に参加する機会を持ち、介護保険サービスを受給している高齢者と、健康増進に興味のある地域在住の高齢者とを比較して理解する視点を養うよう授業を組み立てていく予定である。デイケアセンターでのレクリエーション実習に関しては、学生が自ら計画を立て実践する中から学び取るものはかけがえのないものであるため、できるだけ自主性を重んじながら、サポートしていきたい。そういった意味でも、学生が質問しやすい環境づくりに留意していきたいと考える。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

科目名

103.就労支援学

担当教員

美和 千尋

堀部 恭代

出席者数

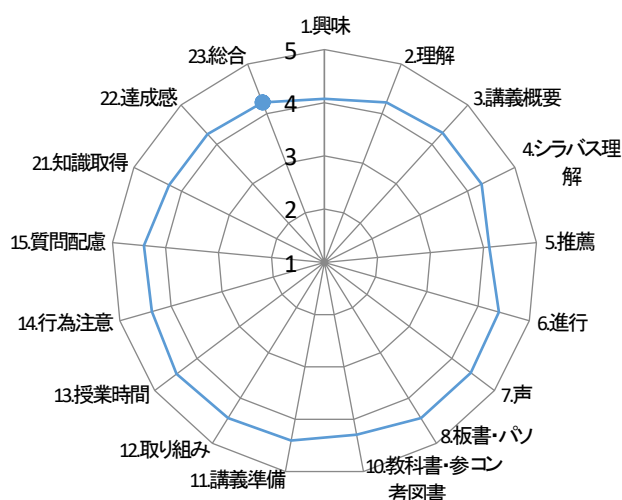
27 名

◆集計データ結果について

3年生の後期の授業であり、まとめの段階であった。この授業の評価は全て、平均④「どちらかといえば、取り組めた」であった。学生が取り組める内容になっていたと思われる。その理由として、国家試験対策に準じた内容を用意し、丁寧に講義の項目を説明したことが良かったと思われる。今後ともこのような事業の進め方が必要と感じる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載については、1) 良い点では、「実際に評価するための物品を自分たちで使用することにより、国試などの問題がイメージしやすくなった。」「就労について興味が湧きました」「制度についての概要など理解が深まりました」「わかりやすかった」などであった。反面、「教員が変わるのは考え方の差異があると多少混乱するのであまり適当でないと思った」「実習前に講義してもらいたかった」であった。



1～5授業内容、6～10授業方法、11～15教員、21,22学生の満足度、23総合(軸単位:5段階評点)

◆今後の改善に向けて

学生の個々の意見を反映して、以下、今後、改善する点を記入する。

1. 講義は1人の先生で考え方を統一できるようにする。
2. 3年生の後期の授業で国家試験を取り入れた授業にし、時期に即した内容にする。
3. 他の授業などで就労支援の内容を取り入れるようにする。

編集委員

鳥居 昭久 (FD&SD委員会委員長)
加藤 真夕美 (FD&SD委員会)
清島 大資 (FD&SD委員会)
臼井 晴信 (FD&SD委員会)
清水 一輝 (FD&SD委員会)
田原 靖子 (FD&SD委員会)
松浦 智美 (FD&SD委員会)

2017年度 授業評価レポート

発行日 平成30年6月30日
発行者 学校法人 佑愛学園
愛知医療学院短期大学
〒452-0931 愛知県清須市一場519
TEL 052-409-3311
<http://www.yuai.ac.jp>